

京都府遺跡調査概報

第 22 冊

1. 上 中 遺 跡 第 4 次
2. 蒲 生 遺 跡
3. 西 町 遺 跡
4. 府 営 ほ 場 整 備 関 係 遺 跡
 - (1) 正 垣 遺 跡
 - (2) 谷 内 遺 跡
5. 長 岡 宮 跡 第 172 次
6. 長 岡 京 跡 左 京 第 151 次

1 9 8 7

序

当調査研究センターが、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施するようになって、早やくも6年が過ぎようとしています。私達は、常により精密な調査を心掛け、より正確な記録を作成し、これらを後世に伝えるため、日夜努力しているつもりであります。そしてその手段の一つとして、「京都府遺跡調査概報」を年度毎に刊行しているほかに、「京都府埋蔵文化財情報」や、「京都府遺跡調査報告書」を刊行しています。

昭和61年度においては、当センターでは41か所の発掘調査を実施しましたが、本書では、その内7か所の遺跡の調査概要を報告します。そして他の遺跡の調査については、さらに数冊の冊子にまとめています。本書を含めて、これらが関係各位の参考に供され、斯学向上の一助となれば幸いです。

本書に掲載した各調査を実施するにあたりましては、発掘調査の契機となりました事業関係者をはじめ、京都府教育委員会・各市町教育委員会等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく、酷暑・極寒の中でも多くの方々が熱心に作業等に從事していただきましたことを明記して、これらの方々に厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、

1. 上中遺跡第4次 2. 蒲生遺跡第2次 3. 西町遺跡 4. 府営ほ場整備
関係遺跡 5. 長岡宮跡第172次 6. 長岡京跡左京第151次

を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調査期間	経 費 負 担 者	執 筆 者
1. 上中遺跡第4次	北桑田郡京北町下弓削	昭61. 8. 11 昭61. 9. 30	京都府教育委員会	岡崎 研一
2. 蒲生遺跡第2次	船井郡丹波町字蒲生小字 蒲生野	昭61. 8. 25 昭61. 10. 9	京都府教育委員会	西岸 秀文
3. 西 町 遺 跡	綾部市西町	昭60. 4. 19 昭60. 10. 15 昭61. 5. 27 昭61. 9. 13	京都府土木建築部	伊野 近富 西岸 秀文
4. 府営ほ場整備関 係遺跡				
(1)正 垣 遺 跡	中郡大宮町奥大野小字正 垣	昭60. 10. 1 昭61. 7. 3	京都府峰山地方振 興局	竹原 一彦
(2)谷 内 遺 跡	中郡大宮町字谷内	昭61. 5. 8 昭61. 6. 26		藤原 敏晃
5. 長岡宮跡第172 次	向日市上植野町上川原	昭61. 4. 17 昭61. 6. 24	京都府警察本部	竹井 治雄
6. 長岡京跡左京第 151次	向日市鶏冠井町清水ほか	昭61. 4. 30 昭61. 8. 20	日本道路公団大阪 管理局	辻本 和美

3. 本冊の編集には，調査課企画資料が当たった。

目 次

1. 上中遺跡第4次発掘調査概要	1
2. 蒲生遺跡第2次発掘調査概要	7
3. 西町遺跡発掘調査概要	11
4. 府宮ほ場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要	37
(1) 正垣遺跡	39
(2) 谷内遺跡	60
5. 長岡宮跡第172次発掘調査概要	69
6. 長岡京跡左京第151次発掘調査概要	77

挿図・付表目次

上中遺跡

第 1 図	周辺の遺跡分布図	2
第 2 図	調査地位置図	4
第 3 図	C区実測図	5
第 4 図	京北町井崎出土石製品	6

蒲生遺跡

第 5 図	周辺遺跡分布図	7
第 6 図	調査地周辺及びトレンチ配置図	8
第 7 図	遺構検出図	9
第 8 図	4 トレンチSK01・SD01実測図	9
第 9 図	出土遺物実測図	10

西町遺跡

第 10 図	調査地周辺遺跡分布図	12
第 11 図	調査トレンチ配置図	13
第 12 図	第1・5・7 トレンチ土層断面図	14
第 13 図	第1 トレンチ平面図	15
第 14 図	第7 トレンチ平面図	17
第 15 図	トレンチ調査出土遺物実測図	19
第 16 図	立会調査出土遺物実測図	21
第 17 図	土層模式図	23
第 18 図	第8 トレンチ遺構図	24
第 19 図	SB01実測図	25
付表 1	掘立柱建物跡規模一覧表	25
第 20 図	第7 トレンチ遺構図	26
第 21 図	第8 トレンチ出土遺物実測図	28
第 22 図	第7 トレンチ出土遺物実測図	29
第 23 図	掘立柱建物跡変遷図	30
付表 2	出土遺物観察表	33

府宮ほ場整備関係遺跡

(1) 正垣遺跡

第 24 図	調査地位置図	38
第 25 図	正垣遺跡調査地位置図	40
第 26 図	調査地地区割り図	41
第 27 図	第 1・第 4・第 5 トレンチ平面図	43
第 28 図	第 2・第 3 トレンチ平面図	46
第 29 図	弥生土器実測図	50
第 30 図	土師器・黒色土器実測図	52
第 31 図	須恵器・施釉陶磁器実測図	54
第 32 図	木器実測図	56

(2) 谷内遺跡

第 33 図	検出遺構図	61
第 34 図	自然流路NR01断面図	62
第 35 図	遺物実測図	63
第 36 図	遺物実測図	64
第 37 図	スタンプ文	65
第 38 図	補修孔	65

長岡宮跡第172次

第 39 図	調査地位置図	69
第 40 図	調査地周辺地形図	70
第 41 図	B地区東壁断面図	71
第 42 図	A地区北壁断面図	72
第 43 図	自然木出土状況実測図	73
第 44 図	出土遺物実測図	75

長岡京跡左京第151次

第 45 図	調査地位置図	78
第 46 図	Aトレンチ遺構平面図	80
第 47 図	Bトレンチ遺構平面図	81
第 48 図	Cトレンチ遺構平面図	83
第 49 図	出土遺物	85
第 50 図	木簡	86

図版目次

上中遺跡

- 図版第1 (1)調査地西側近景(南西から) (2)調査地東側近景(南東から)
図版第2 (1)A区調査地掘削状況(南東から) (2)B区調査地掘削状況(西から)
図版第3 (1)C区調査地掘削状況(西から) (2)溝状遺構(北西から)

蒲生遺跡

- 図版第4 (1)調査前全景 (2)1トレンチ全景(東から)
図版第5 (1)SK01・SD01遺物出土状況 (2)SK01・SD01完掘状況(東から)

西町遺跡

- 図版第6 (1)第1トレンチ(第1面)全景(西から) (2)同(第2面)全景(西から)
図版第7 (1)第2・3トレンチ全景(西から) (2)第5トレンチ全景(南から)
図版第8 (1)第6トレンチ遺構検出状況(南から)
(2)第8トレンチ遺構検出状況(南から)
図版第9 立会調査・第8トレンチ出土遺物
図版第10 立会調査出土遺物
図版第11 (1)第8トレンチ全景(西から) (2)第7トレンチ全景(西から)
図版第12 (1)SB01(南から) (2)SB01遺物出土状況
図版第13 (1)SB04・SB08(南から) (2)SB04-1遺物出土状況
図版第14 西町遺跡出土遺物

府営ほ場整備関係遺跡

(1) 正垣遺跡

- 図版第15 (1)調査地遠景(東から) (2)第1トレンチ全景(西南から)
図版第16 (1)第2トレンチ全景(東南から) (2)第3トレンチ全景(東北から)
図版第17 (1)第4トレンチ全景(西南から) (2)第5トレンチ全景(東南から)
図版第18 (1)SH05・06・07検出状況(東北から) (2)SB01検出状況(西北から)
図版第19 出土遺物(1) 弥生土器
図版第20 出土遺物(2) 土師器・黒色土器
図版第21 出土遺物(3) 須恵器・施釉陶器
図版第22 出土遺物(4)

(2) 谷内遺跡

図版第23 (1)検出遺構(北から) (2)自然流路NR01土層断面(東から)

図版第24 出土遺物

長岡宮跡第172次

図版第25 (1)調査前風景(南から) (2)B地区調査トレンチ(南から)

図版第26 (1)Aトレンチ全景(西から) (2)Aトレンチ北壁断面

図版第27 (1)Bトレンチ全景(南から) (2)Bトレンチ東壁断面

図版第28 (1)Aトレンチ自然木出土状況(南から) (2)自然木出土状況(部分)

長岡京跡左京第151次

図版第29 (1)Aトレンチ全景(北から) (2)Aトレンチ全景(南から)

図版第30 (1)Bトレンチ全景(南から) (2)Bトレンチ中央部(南から)

図版第31 (1)Cトレンチ全景(南から) (2)Cトレンチ全景(北から)

図版第32 (1)掘立柱建物SB15125(南から) (2)同上建物柱掘形木簡出土状況

図版第33 出土遺物

1. 上中遺跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

京都府教育委員会は、府立北桑田高等学校校内に視聴覚教室や図書室等の建設計画を予定した。建設予定地は、周知の遺跡である上中遺跡の範囲内であることから、京都府教育委員会と当調査研究センターとの間で協議が行われた。協議の上、京都府教育委員会から当調査研究センターが依頼を受け、遺構の有無を確認し、記録保存を図るとともに、重要な遺構・遺物を発見した場合、保存のための資料を作成することを目的として、事前に発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和61年8月11日から同年9月30日まで実施した。

現地調査は、当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克・同調査員岡崎研一が担当した。その間、調査補助員・整理員として花園大学学生諸氏、作業員として地元の方々の協力を得た。また、京北町教育委員会・府立北桑田高等学校をはじめ多くの方々の協力も得た。記して謝意を表したい。

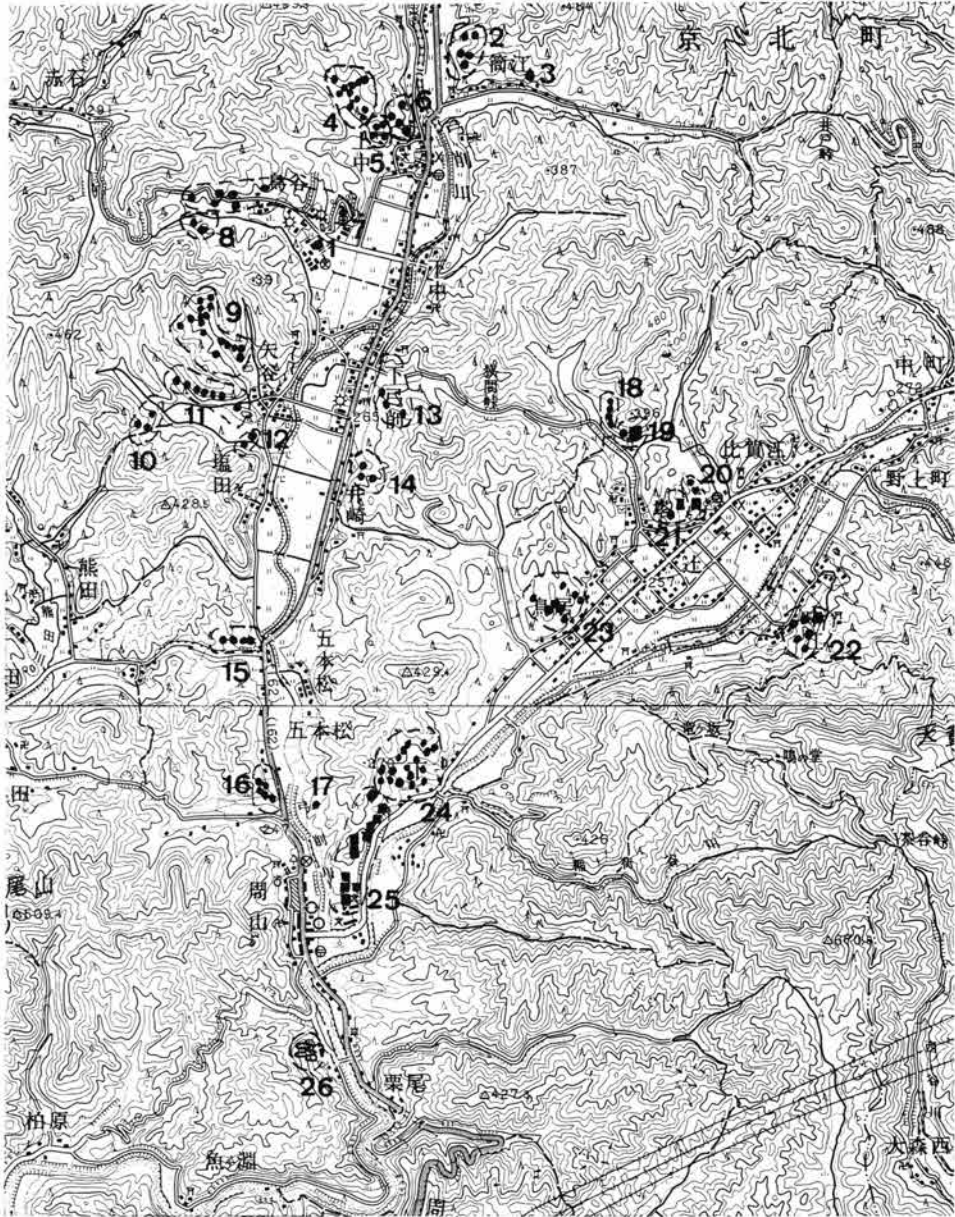
2. 位置と環境

京都府のほぼ中央に位置する京北町は、大堰川とその支流である弓削川とにより形成された小盆地からなり、周山で両河川は合流する。合流した河川は、船井郡八木町を経て亀岡盆地へ流れている。周山から大堰川沿いを遡ると左京区花背に至る。また山城・丹波両国の国境である笠峠を越え、更に栗尾峠を越えて周山に至る周山街道は、弓削川沿いに北上し、深見峠・安掛・鶴ヶ岡・堀越峠を経て若狭小浜に達する。このように周山は、丹波国・山城国・近江国・若狭国を結ぶ交通の要所であったと思われる。

上中遺跡は、京都府北桑田郡京北町下弓削に所在し、周山から周山街道沿いに約4km北上した所である。弓削川によって形成された南北に広がる小盆地の右岸にあたり、丘陵裾部の高台が調査地である。上中遺跡は、昭和58年度より3回調査を行ってきた。その結果、弥生時代から室町時代にわたる遺構・遺物を検出しており、これらの時代に関連した集落が存在し、生活が営まれていたものと想定されてきた。

京北町出土の弥生時代の遺物として、下弓削から文久元年出土と伝えられる扁平鈕式四区袈裟襷文銅鐸が知られている。

古墳時代になると、弓削川・大堰川沿いの丘陵部に多くの古墳が築造されるようになる。



第1図 周辺の遺跡分布図(1/50,000)

1. 調査地
2. 岩ヶ鼻古墳群
3. 筒江古墳
4. 宮の谷古墳群
5. 八幡宮裏山古墳群
6. 弾正古墳群
7. 鳥谷古墳群
8. ふくかなる古墳群
9. 矢谷古墳群
10. 塩田古墳群
11. 矢谷奥古墳群
12. 塩田口古墳群
13. 狭間谷古墳群
14. しが田古墳群
15. 出口古墳群
16. 大年古墳群
17. 大年古墳
18. 三宅谷古墳群
19. 塔村古墳群
20. 比賀江古墳群
21. 愛宕山古墳群
22. 中江古墳群
23. 鳥居古墳群
24. 折谷古墳群
25. 周山古墳群
26. 周山窯跡群

調査地周辺では、岩ヶ鼻古墳群・弾正古墳群・宮の谷古墳群・鳥谷古墳群・ふくがなる古墳群・矢谷古墳群・矢谷奥古墳群・狭間谷古墳群・塩田口古墳群・しが田古墳群がある。これらは、いずれも直径10m前後の円墳から構成されている。弓削川沿いでの古墳の調査例はないが、大堰川右岸において1基発掘調査が行われている。それは、京北町大字塔小字宮の谷7番地に位置する愛宕山古墳^(注1)である。当地より小学生が銅鏡・勾玉・管玉などを発見したことにより、京都府教育委員会によって発掘調査されたものである。調査の結果、一辺15mの古墳時代中期の方墳で、主体部は割竹形木棺を直葬するもので、副葬品は銅鏡、鉄剣、鉄鏃、玉類等が発見されている。この時期の集落遺跡としては、今回の調査地である弓削川沿いの上中遺跡と宮の谷遺跡、大堰川沿いの殿橋遺跡がある。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、天平勝宝3(751)年創建と伝えられる中道寺跡があり、弓削川左岸に位置する。また、昭和22年に石田茂作氏らによって調査された周山廃寺がある^(注2)。この調査によって、塔跡・東堂跡・中堂跡・北堂跡・西堂跡・南門跡を検出しており、特殊な配置であることが確認されている。周山廃寺に関連した遺跡として周山窯跡がある。周山窯跡は、京都府教育委員会と京都大学文学部考古学研究室が発掘調査を実施した^(注3)。その結果、4基の窯跡とそれに伴う灰原を検出している。また磁気探査によって調査地付近に別の2基の窯跡の存在も推測されている。調査された窯体のうち、2基の窯体内からは、瓦と須恵器が出土しており瓦陶兼業窯であることが判明している。

中世以降になると、経塚や城跡が点在するようになる。

このように周山は、弥生時代から現在に至るまで交通の要衝の地であったと考えられ、それに伴って当地は、弥生時代から開けてきたものと想定できる。

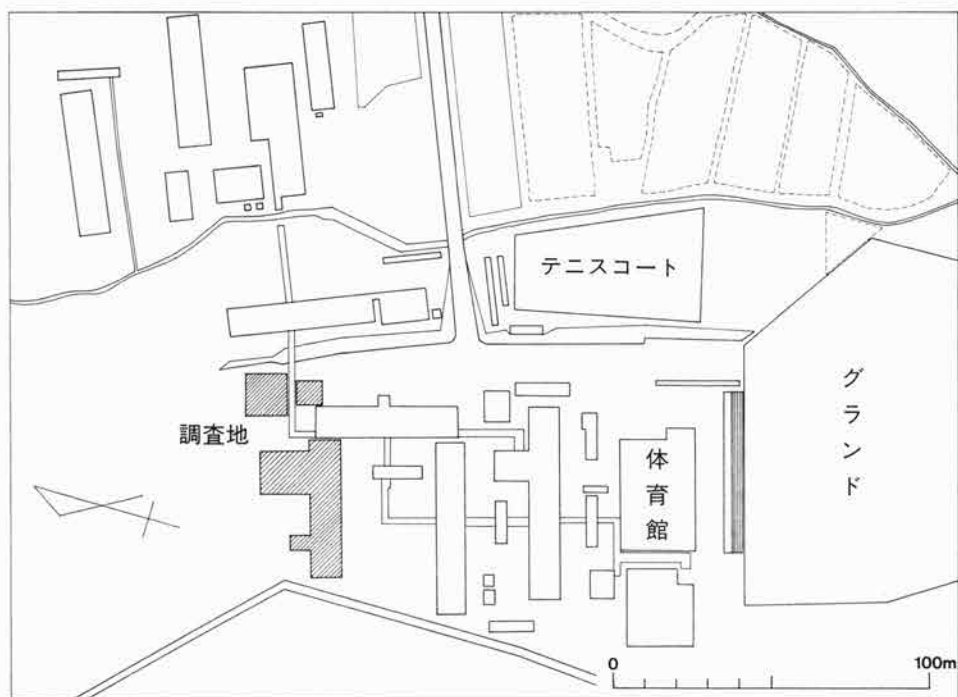
3. 調査概要

上中遺跡は、昭和158・59・60年度に当調査研究センター^(注4)が発掘調査を行った。

昭和158年度の調査は、格技場新築工事に伴うもので、体育館の西側が調査地である。古墳時代前期の川跡・土坎・柱穴状の掘り込みを検出した。

昭和159年度は、林業科実習棟新築工事に伴うもので、体育館の北側約210mの所が調査地である。ここからは、自然流路と時期不明の溝2条を検出しているが出土遺物が少ないことから、この付近が上中遺跡の北端と考えられている。また周辺の分布調査も行われ、遺物の散布状況が明らかになった。

昭和160年度は、林業科校舎新築工事に伴うもので、前年度の調査地から南東約60mの所が調査地である。ここからは、不整形・隅丸長方形・隅丸正方形を呈する土坎37基を検出している。その規模は、平均して長軸2.4m・短軸1.3m・深さ60cmを測る。これらの土坎



第2図 調査地位置図

の性格は明確ではないが、土坑墓の可能性があると考えられている。

今回の調査は第4次調査で、体育館北側約130mの所が調査地である。昭和59年度の分布調査によれば、遺物が粗く散布する範囲にあたる。調査は、調査地内に4か所の試掘グリッドを設定し、土層及び遺物出土状況の確認を目的として掘削した。その結果、調査地西側は、北桑田高等学校建設時に削平されており、バラスの下は岩盤であった。調査地東側は、旧地形に盛土をして平坦にしていた。堆積状況は、バラス・盛土・旧表土・黄褐色土・黄白色砂質土・岩盤であった。このあたりは削平を受けておらず、遺構が残存している可能性があったため、調査地東側を全面掘削することにした。盛土まで重機で掘削し、そこから人力で掘り下げた。調査地中央に渡り廊下と水路があるため、トレンチは3か所となった。これらのトレンチを便宜上南側より、A区・B区・C区調査地と名付けた。

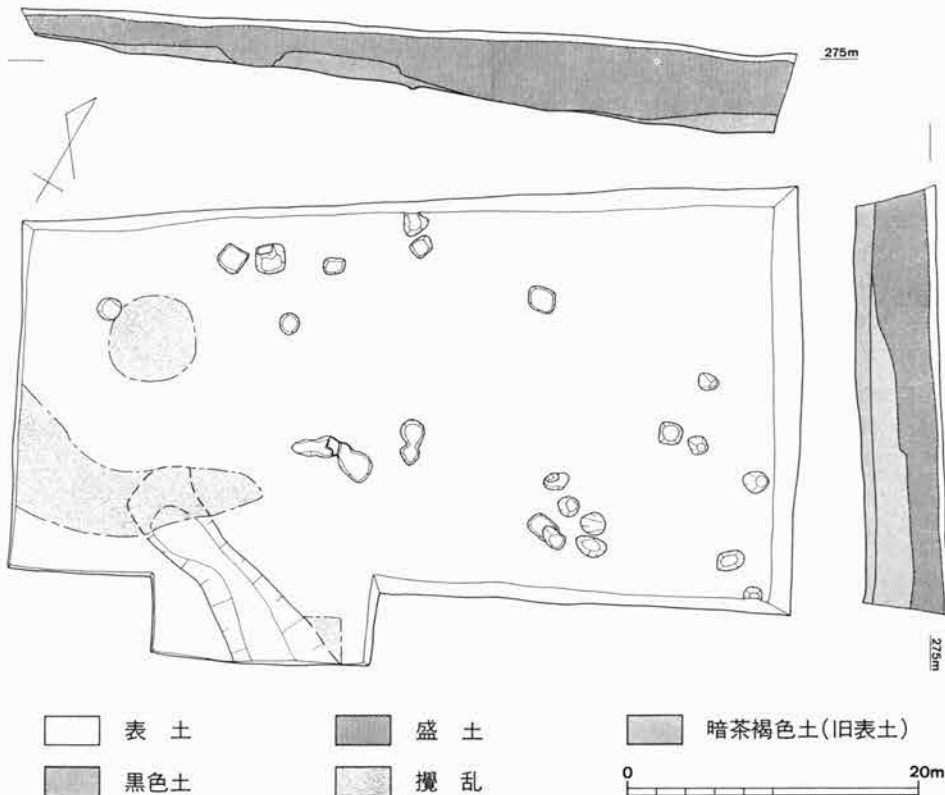
A区調査地では、バラス・盛土・旧表土・黄褐色土・黄白色砂質土・岩盤の順で堆積していたが、遺構は存在しなかった。

B区調査地では、盛土・旧表土・黒色土・黄褐色土・黄白色砂質土・岩盤の順に堆積していた。盛土は約1.1mも堆積しており、この調査地から黒色土が見られるようになる。この黒色土は、昭和58年度や60年度に確認している黒褐色土に相当するものと思われた。両年度の調査では、遺構が黒褐色土を切り込んでいたことから、B区あるいはC区調査地

に遺構が存在するものと考えられ、旧表土から人手で掘削したが、遺構は存在しなかった。

C区調査地では、表土・盛土・旧表土・黒色土・礫混りの黄褐色土の順に堆積していた。旧表土は、調査地東側にのみ見られたが、他の所にはなく、盛土する際に旧表土を削平したものとされた。盛土は、40cmから1m堆積していた。旧表土から人力で徐々に掘り下げたところ、調査地南側で溝あるいは土坎と思われる遺構を検出した。その全容を知るために、南東に2m×6m拡張した。拡張区を掘削したところ、幅約1m・長さ約3.5m・深さ約40cmの溝状の遺構となった。この遺構はB区調査地の方にのびているが、B区調査地からは見つからなかった。またC区調査地に広がる黒色土を掘削していくと、その下層より円形あるいは方形の掘形が見つかった。その規模は、直径および一辺が約20~30cm、深さ約5~80cmを測り、中には黒色土が堆積していた。溝状遺構や円形あるいは方形の掘形からは、遺物の出土は見られなかった。

これらの遺構は、拡張区断面を観察すると、旧表土からさほど深くない所から掘り込まれていることや、この付近は調査前が果樹園で、これによる攪乱が遺構面にまで一部及んでいたことから、集落跡に伴う遺構であるかどうか不明である。この遺構内から遺物が出



第3図 C区実測図

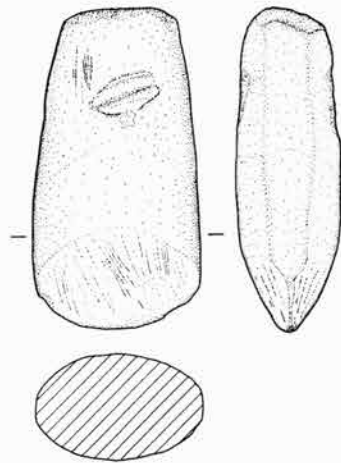
土しないことから、あるいは果樹園による攪乱であるかもしれない。

4. ま と め

調査の結果、府立北桑田高校建設時にかなりの削平を受けており、調査地西側には遺構が存在しないことがわかった。また、あまり削平されていない調査地東側においても、溝状・ピット状の遺構を検出したものの、旧表土からさほど深くなく、その後果樹園として利用されていたことから、これらの遺構は集落跡の痕跡とは考えられなかった。

今回の調査においては、今までの調査結果及び位置等から、集落跡が検出できるのではないかと考えられていたが、以上のことにより顕著な遺構は検出できなかった。

調査中に周山中学校教諭岩崎氏が、京北町井崎の志賀田古墳群付近で採集された磨製石斧を持って来られた。図化作業を行ったので、ここに図化することにした(第4図参照)。磨製石斧の重さは、約560gであった。(岡崎研一)



第4図 京北町井崎出土石製品
(1/3)

- 注1 「愛宕山古墳発掘調査概報」(『京都府京北町埋蔵文化財調査報告書』第2集 京北町教育委員会) 1983
- 注2 石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」(『考古学雑誌』45-2) 1959
- 注3 京都大学文学部考古学研究室編『周山瓦窯跡発掘調査報告書』京北町教育委員会 1982
- 注4 増田孝彦「上中遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
- 増田孝彦「上中遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 増田孝彦「上中遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

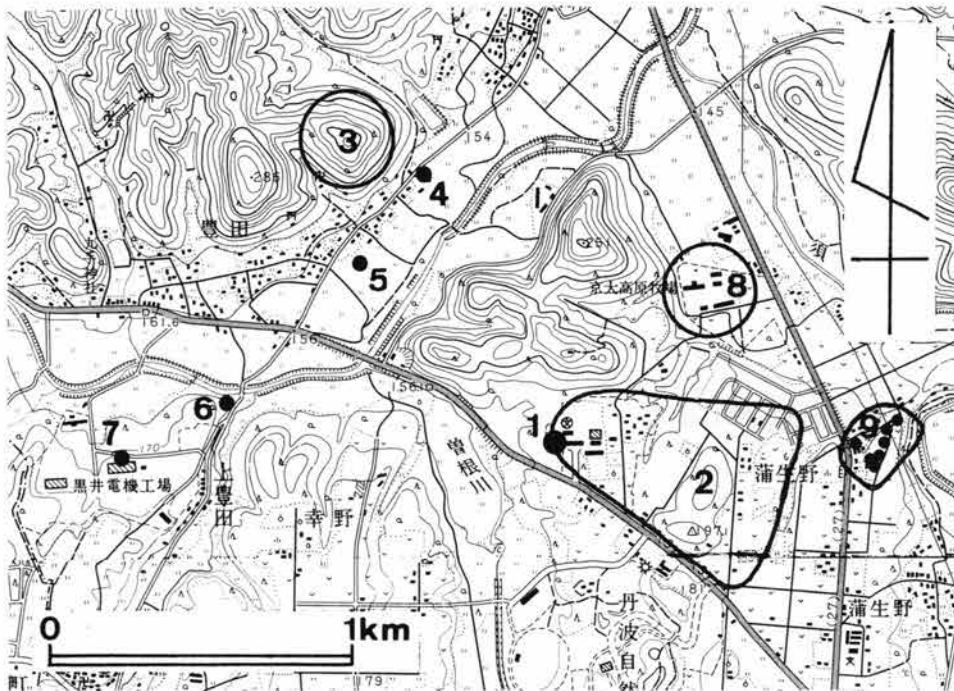
2. 蒲生遺跡第2次発掘調査概要

1. はじめに

蒲生遺跡は、船井郡丹波町字蒲生小字蒲生野に所在する。丹波町は、京都府の北部と南部の分岐点に位置し、水系の点でも由良川・淀川の分水嶺にあたる。

蒲生野の周辺は、標高150mの高原地にかかわらず、美月遺跡・蒲生遺跡^(注1)などの集落跡や前方後円墳のカナヤ1号墳(乗鞍古墳)・豊田車塚古墳をはじめ、群集墳や窯跡群などの遺跡が点在している。

さて、今回の調査は、京都府立須知高校の増改築工事に先立ち、京都府教育委員会管理部の依頼を受けて実施したものである。蒲生遺跡の推定範囲は、東西約300m・南北約200mに及び、昭和58年度にも北西部で同校校舎改築に伴い発掘調査を実施し、弥生時代中期の堅穴式住居跡1基・土壇等を検出している。今回の調査地は、蒲生遺跡推定地の最西端に位置し、調査は遺跡の有無を明らかにすることを目的として実施した。調査は、後述す



第5図 周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|---------|----------|-----------|-----------|---------|
| 1. 調査地 | 2. 蒲生遺跡 | 3. カナヤ古墳群 | 4. 豊田車塚古墳 | 5. 藤波古墳 |
| 6. 千原古墳 | 7. 鳥居野古墳 | 8. 美月遺跡 | 9. 蒲生野古墳群 | |

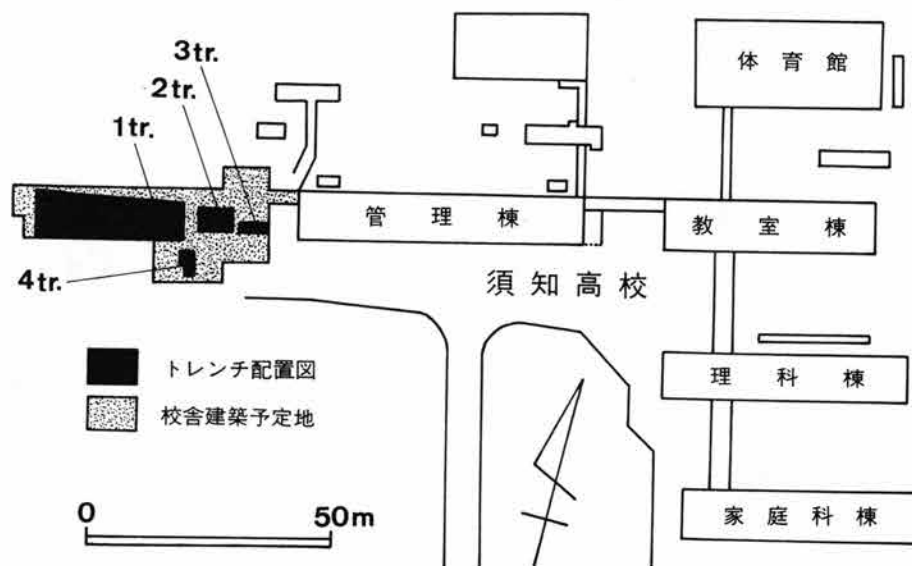
るように旧校舍建築時の削平が著しく、顕著な遺構・遺物は検出できなかったが、今後周辺地の調査を行うに際し指針となる成果が得られた。

現地調査は、昭和61年8月25日から同年10月9日までの約400m²を実施した。期間中は、丹波町教育委員会・須知高校の方々から多大なる御協力・御助言を賜わり、また作業員・^(注2)調査補助員として、地元有志の方がた及び学生諸氏にそれぞれ参加協力を得た。記して感謝したい。^(注3)

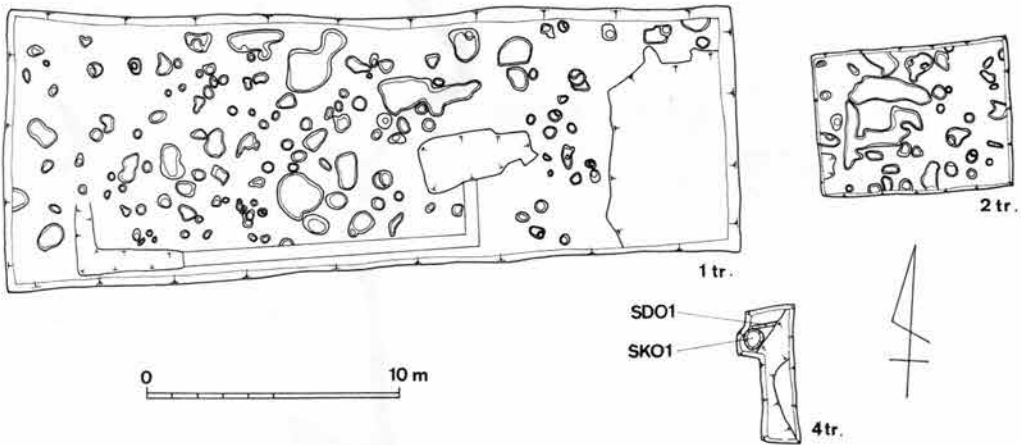
調査にあたっては、当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克・同調査員森下 衛・同調査員西岸秀文が担当して実施し、本稿の執筆は西岸が行った。

2. 調査概要

調査は、3m四方の試掘トレンチを調査地の東端と西端との2か所に設けて、掘削作業から開始した。その結果、遺構の遺存状態が良好と考えられた部分を面的に拡張した(1トレンチ)。その後、2・3・4の順に各トレンチを設けて掘削を行った。1トレンチでは、地山面と考えられる黄褐色粘質土に黒褐色粘質土が切れ込む形で、土坎・ピット等を検出した。しかし、著しい削平のため、遺構は深さ約10cmにすぎず、出土遺物も皆無であった。また地山面はトレンチの中央から西北にかけて緩やかに傾斜しており、これが旧地形であったと考えられる。2トレンチも、1トレンチとはほぼ同様の状況を呈し、遺構の遺存状況は極めて悪かった。時期・性格についても同じく不明である。3トレンチは、表土下約10



第6図 調査地周辺及びトレンチ配置図

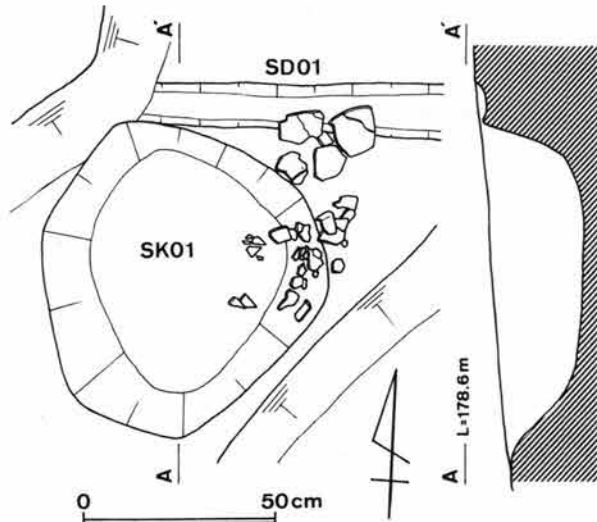


第7図 遺構検出図

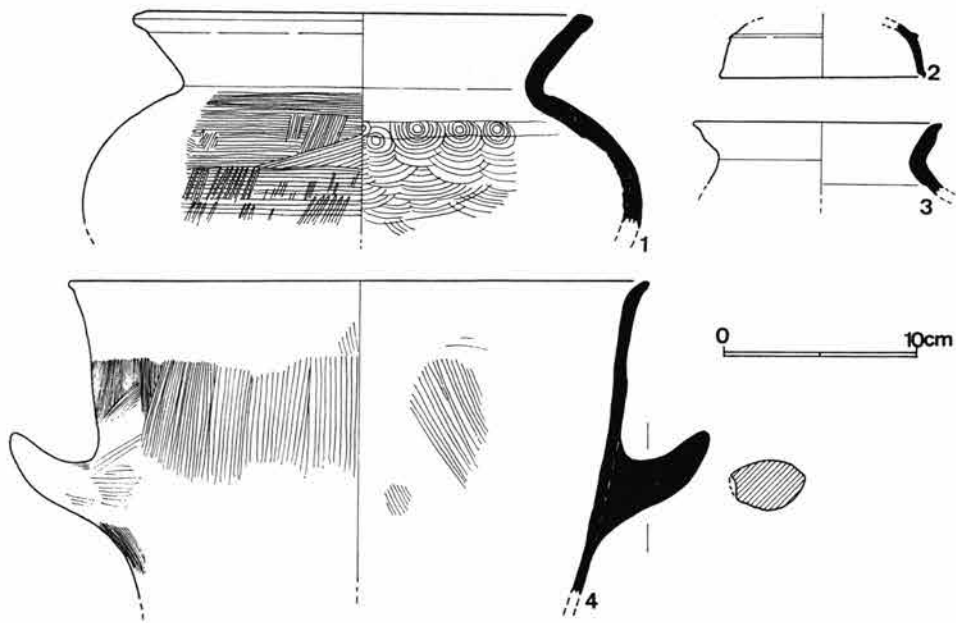
cmで地山面に達し、遺構は検出できなかった。4トレンチでは、全面に攪乱が著しく、地山面まで削平されている様子であった。ただ、トレンチの中央よりやや北西において径約80cm・深さ約30cmの円形を呈する土坑(SK01)を検出した。また、その北側で、幅約15cm・深さ約5cmの溝(SD02)を検出した。SD02からSK01の北半部にかけて、土師器甕・甕、須恵器杯蓋等が出土した。

3. 出土遺物

1は1トレンチの攪乱坑から、2～4はSK01・SD01から出土し、それ以外から遺物は全く出土しなかった。1は須恵器甕で、口径22.4cmを測る。外反する口縁部をもつ。外面はカキメの後、タタキを施す。内面はナデの後、同心円タタキを施す。2は須恵器杯蓋で、口径10.6cmを測る。外面には明確な稜線がみられる。口縁端部内面は段をもつ。3は土師器甕で口径12.4cmを測る。外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。内外面ともナデを施す。4は土



第8図 4トレンチSK01・SD01実測図



第9図 出土遺物実測図

師器甕で、口径30.4cmを測る。口縁部は内外面ともナデを施す。外面は縦方向のあらいハケを施す。内面は、ケズリの後ハケ、さらに一部にナデを施す。1は6世紀後半、2は6世紀前半に比定できる。3・4は出土状況から2と同時期と考えられる。

4. ま と め

今回の発掘調査によって得られた知見は以下のとおりである。第1に、調査地は前校舎の建築時にかなりの削平を受けていたことが確認できた。ただ、1トレンチの状況から、旧地形は1～3トレンチを通じて、東から西に緩やかに傾斜していたと考えられる。第2に、検出したSK01・SD01は出土遺物より6世紀前半の遺構と考えられる。遺構そのものの性格については不明であるが、調査地以東にその時期の集落が存在していたと推察できる。第3に、遺構に伴うものでないが6世紀後半と考えられる須恵器も出土しており、その時期の集落の存在も予測できる。当地域で発掘調査が行われることはまれで、考古学的資料の蓄積も少ない。その意味からも、これらの成果は貴重であると言えよう。

(西岸秀文)

注1 清水芳裕「京都府美月遺跡の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学埋蔵文化財研究センター) 1981, 引原茂治「蒲生遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

注2 溝口光盛 西山季雄 竹口 弘 竹元 豊 野口 享 西野博之 山崎孝一 谷口政枝 山崎蓉子

注3 西垣真史 横山憲夫 竹岡光男 大西啓喜 洲崎 浩 武田文登

3. 西町遺跡発掘調査概要

1. はじめに

綾部市西町は、国鉄綾部駅の北側に位置し、市街地の中心部にあたる。

綾部市街地の埋蔵文化財では、北東部の由良川流域に「青野遺跡」・「青野西遺跡」・「綾中遺跡」などの弥生時代から奈良時代に至る集落遺跡が密に広がり、また西町と隣接する綾中町には白鳳時代寺院とされる「綾中廃寺」や何鹿郡衙推定地が所在している。

さて、今回、綾部市西町にある神栄株式会社工場跡地総面積11,000m²に、府営西町団地が建設されることになった。京都府教育委員会・綾部市教育委員会は、遺跡地図には遺跡包蔵地と記されていないが、綾中遺跡や青野遺跡の周辺地域であるため、事前に調査を行う必要があると判断した。そこで京都府土木建築部の依頼により、当調査研究センターが発掘調査を実施することになり、委託契約並びに文化財保護法等の諸手続きに伴う遺跡名称を便宜的に「綾中遺跡」として調査を開始することになった。しかし、調査の結果、綾中遺跡とは低湿地を挟んで独立しており、また後述するように遺跡の性格においても相違がみられることなどから、京都府教育委員会・綾部市教育委員会と協議し、新たに「西町遺跡」と命名することにした。

発掘調査は、昭和60年4月19日から10月15日まで(第1次調査)・昭和61年5月27日から9月13日まで(第2次調査)の2か年にわたった。建物の建設予定地に限り総計2,350m²の調査を実施した。

第1次調査は、建設建物棟7棟・貯水槽部の試掘調査及び第1棟の全面発掘調査を実施した。第2次調査では、試掘調査の結果により第6棟・第7棟建設予定地から検出した掘立柱建物跡を中心とした面的調査を実施し、後述する調査成果を得て昭和61年9月5日現地説明会を開催し、すべての調査を終了した。

現地調査は、当調査研究センター調査課主任調査員水谷寿克・同調査員伊野近富・同調査員西岸秀文が担当して行った。調査期間中、真夏の炎天下のなか、作業員として従事していただいた地元綾中町・味方町の方がた、調査補助員・整理員として参加願った有志学生諸氏に記して感謝するとともに、御指導・御助言をいただいた方がたに改めて感謝の意を表したい。

なお、本書の執筆は、第1次調査を伊野、第2次調査を西岸が担当した。

(水谷寿克)

2. 位置と環境

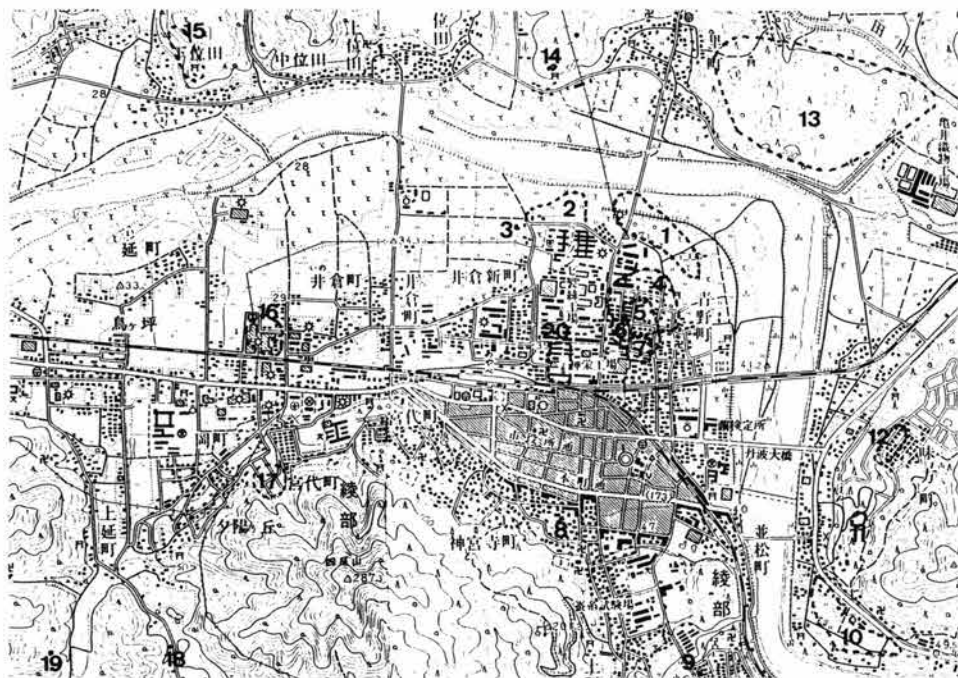
今回、調査対象となった西町遺跡は、中丹地域の中核を占める綾部・福知山盆地の中に位置している。盆地の中には由良川が貫流しており、調査地はその南方にある。

現在は、国鉄綾部駅に近接し、周辺には工場や住宅地が密集した市街地が広がっている。

往時の状況を、最近の発掘調査の成果によって簡単に述べよう。まず、現在の由良川までの間には、弥生時代中期から古墳時代にかけての集落跡である青野遺跡(青野西遺跡も含む)がある。そして、対岸には同時期の久田山古墳群がある。ところが、最近の知見^(注1)によると、由良川は青野遺跡の南側を流れていたということであり、2つの遺跡は1セットとして考える必要性^(注2)がでてきた。当該地における第2次調査では、後述するように古墳時代初頭の住居跡が確認され、集落と墳墓という点で、新たな留意点が出てきたといえよう。

古墳時代後期から奈良時代にかけては、「青野型」^(注3)と呼ばれる特徴的な住居跡が造られる。これは、竪穴住居跡の一辺の外側に沿ってカマドの煙道が作り付けられたものである。

これらの住居が營造されていた頃、何鹿郡衙跡と目される青野南遺跡官衙跡や、寺院跡



第10図 調査地周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|----------|--------------|------------|-----------|---------------|
| 1. 青野遺跡 | 2. 青野西遺跡 | 3. 青野大塚古墳 | 4. 青野南遺跡 | 5. 青野南遺跡官衙跡 |
| 6. 綾中遺跡 | 7. 綾中麩寺 | 8. 藤山経塚 | 9. 寺町遺跡 | 10. 味方遺跡 |
| 11. 平古墳群 | 12. 斎神社裏山古墳群 | 13. 久田山古墳群 | 14. 里古墳 | 15. 宮越古墳群 |
| 16. 岡町遺跡 | 17. 明智平遺跡 | 18. 宮の堂古墳 | 19. 東光院窯跡 | 20. 西町遺跡(調査地) |

である綾中廃寺が营造される。西町遺跡の北東100mほどの地点でも、この頃の集落が営まれており、これらの中心施設を造営した基盤を知る上で、注目される調査となった。^(注4)

平安時代初めの遺構は、現在のところ確認されていないが、同末期になると綾中遺跡等で遺構・遺物が発見されている。
(伊野近富)

3. 調査成果

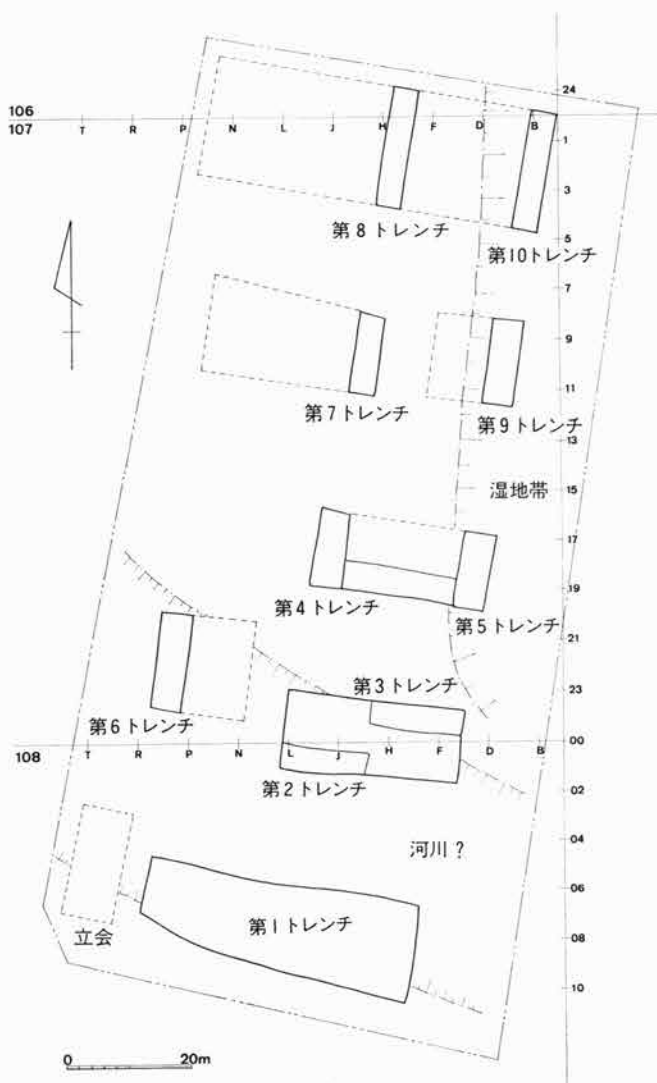
(1) 第1次調査

1. 調査の経過と概要

現地調査は、昭和59年4月から開始した。まず調査地全体を測量するために、基準点を設置する作業からとりかかった。綾部市教育委員会による周辺の発掘調査の成果との整合性を図るために、同教育委員会が設定した座標を利用した。

その結果、調査地は100m方眼の大区画のうち、106～108区に相当することとなり、この中を更に4m方眼に分割した。そして、それぞれの4m方眼区を表示する際は、東西軸を数字で、南北軸をアルファベットで表示することとした。

まず、全体の敷地の平板測量(縮尺100分の1)を行った。その後、今年度建築予定の4棟分に関



第11図 調査トレンチ配置図

して、6か所のトレンチを設定した。試掘調査の結果、2棟分に関しては面的に広げて調査を実施した。次いで、来年度予定の2棟分に関しては、計4か所のトレンチを設定し、試掘調査を行った。

2. 検出遺構

トレンチは、掘削した順番に名付けた。基本的層序は、第1トレンチの場合、地表下0.5mで灰褐色砂質土層（中世相当層）となり、0.9mでは暗茶褐色粘質土（地山）が露出した。第5トレンチでは、地表下0.6~0.7mが灰褐色粘質土（中世相当層）、それ以下が淡褐色粘質土（地山）である。水がほとんど抜けず、低湿地状態を示していた。第9トレンチでは、地表下0.6~0.7mに灰褐色粘質土層があり、その下に黄褐色粘質



第12図 第1・5・7トレンチ土層断面図

土層がある。非常に不安定な土で泥土に近いものである。更にその下、地表下1 m以下が黄褐色粘質土層(鉄分含む)で、これが地山である。

直上の土層と非常によく似ているが、近隣からの流れ込みによる堆積で、その形状から湿地を形成していたと推定できる。

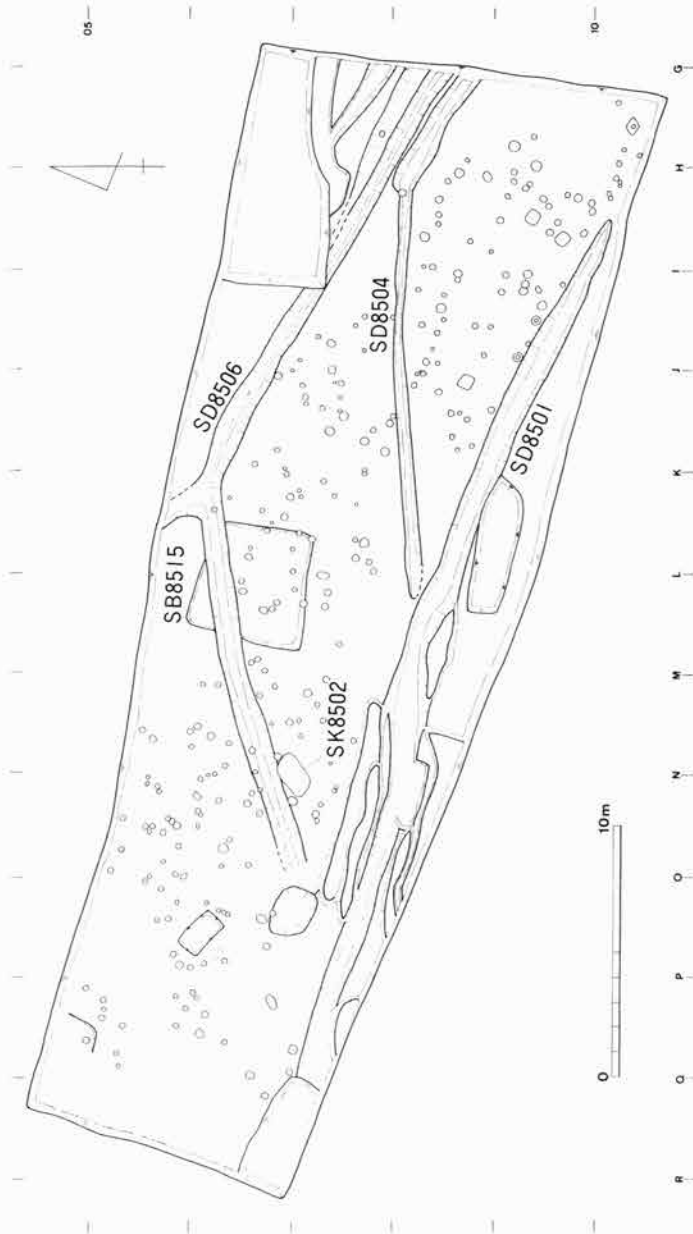
第1トレンチ

遺構・遺物の検出状況を簡単に述べると、トレンチの南部では東西走する中世の溝(SD8501)が検出された。

埋土は灰褐色土である。これはトレンチ東端から約5 mのところまで途切れているほかは、ずっと連続している。特にK・L区の辺りでは、土師器皿や瓦器碗などが多量に出土した。

溝はあと2条ある。いずれもトレンチ東端の中央から始まるが、東端から西へ4 mのところまで分かれる。北の溝(SD8506)は、徐々に北に向かい、トレンチ中央付近で屈曲し、南に折れていく。埋土は黒褐色粘質土である。

ピットは、径20cm



第13図 第1トレンチ平面図

程度のもので、トレンチ全体で検出された。しかし、構造物として把握できるものはなかった。

溝SD8506と重複する土壇SK8502は、焼土や炭の入り混じった長方形土壇で、出土遺物はなかったが、層序から溝より古いことは言える。

地山(黄褐色粘土層)直上から弥生土器片が出土したが、遺構として確定できる点はなかった。

これらの遺構の下層に、竪穴住居跡様の落ち込みを検出した。埋土は暗茶褐色粘質土で、遺物は小片のため、時代は確定できない。

第2—3 トレンチ

南から2番目の建物予定地の南西隅に設定したのが第2トレンチで、北東隅に設定したのが第3トレンチである。

トレンチ調査の結果、溝や土壇等が検出されたので、第1トレンチと同様に、一棟分の建築予定範囲に調査対象を広げた。

その結果、北西から南東方向にのびる溝を2条検出した。また、東西方向にのびる溝も2条検出した。このほか、北辺部に一辺120cmの方形土壇を検出した。これは掘立柱建物の掘形の可能性があったため、北側に東西5.6m・南北3.2m分拡張して、この可能性を検証した。この結果、同様の方形土壇は発見されなかった。

調査地内では他に柱穴様のピットが多数検出されたが、掘立柱建物等の可能性は認められなかった。

第4—5 トレンチ

南から3番目の建物予定地内の西端に設定したのが第4トレンチで、東端に設定したのが第5トレンチである。溝やピットを検出したが、それほど数は多くない。

第5トレンチの場合は、かつて低湿地であったと思われる、泥土に近い粘質土が遺構面であった。この状態は第4トレンチでは認められなかったので、低湿地の範囲を確認するために、両トレンチを連結する形で、幅4mのトレンチを設定した。この結果、第5トレンチの東端より西へ約5.7mの地点で、低湿地となることが判明した。

第6 トレンチ

調査地のもっとも西部にある建物予定地内の西端に設定したトレンチである。北部には大きな攪乱土壇がある。遺構としては、南北方向に幅60~70cmの溝があるほか、多数のピットを検出したが、構造物として把握できるものはなかった。なお、これらは中世相当層より上から掘り込まれている。

以上が、60年度試掘調査を実施した概要である。次いで、61年度に実施する本格調査の資料収集のため、第7~第10トレンチを設定した。その結果、後述するとおり、第7トレ

ンチの西方と第8トレンチの西方を調査することとなった。では、以下で個々の試掘調査の概要を説明する。

第7トレンチ

南から数えると第5棟目の建築予定地内の東端に設定したトレンチである。

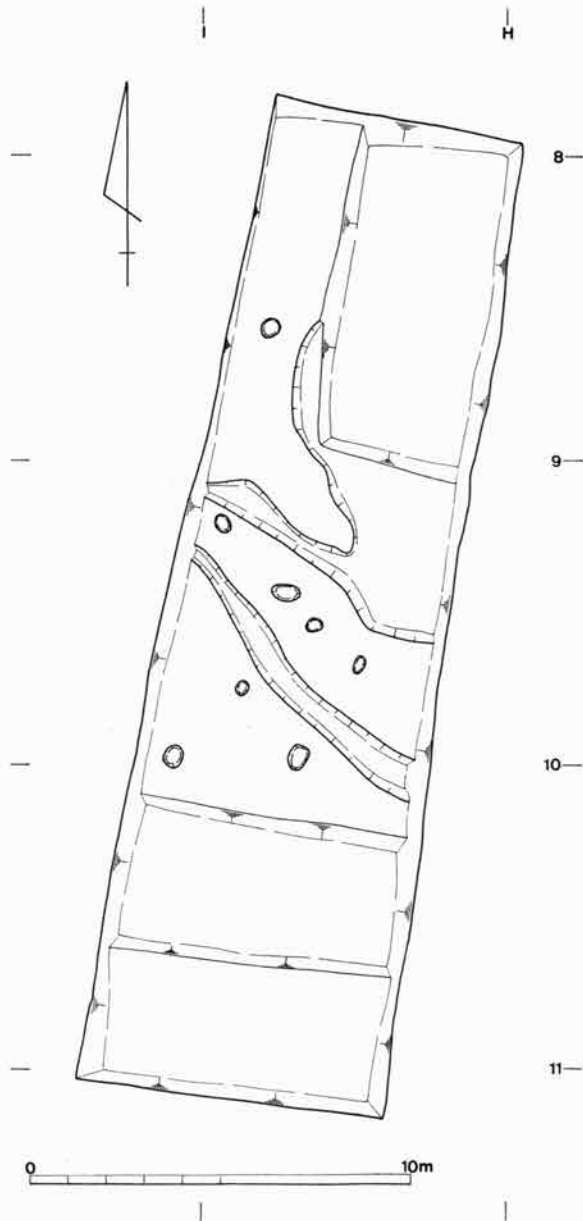
攪乱土壇が南部と北東部にあり、これで4分の1ほどの遺構面が失われているが、地山は安定した締りがあり、かつては建築物としては最適の地と考えることができる。

調査の結果、トレンチ西辺に沿って3個のピットを検出し、西へのびる2間×1間以上の掘立柱建物を想定することができた。

第8トレンチ

南から数えて7棟目の建物予定地内の中央部に設定したトレンチである。

遺構は、今回の調査の中でもっとも遺存状態が良い。主要な遺構は、トレンチの北半部で検出したピット8個で構成された掘立柱建物1棟である。この建物の広がりを確認するために、東西辺にそれぞれ2か所拡張した。その結果、東辺では確認されなかったものの西辺ではピット2個を検出した。したがって、建物の規模は、南北3間・東西1間以上と想定できる。柱間



第14図 第7トレンチ平面図

は1.6mである。

この建物の北で、完形の瓦器碗を埋納したピットを検出した。埋土は掘立柱建物のそれと同じであり、瓦器碗の年代観から12・13世紀^(注5)と推定できる。

第9トレンチ

南から数えると6棟目の建物予定地の東端に設定したトレンチである。遺構面は、非常に不安定な泥土に近い土質である。第5トレンチと同様に、かつては低湿地であったことを示している。

第10トレンチ

第8トレンチと同じ建物の東端に設定したトレンチである。第5・9トレンチと同様に、かつて低湿地であった状態を示していた。

以上の試掘調査の結果、調査地の北東部は低湿地であったと推定できた。そして、遺構面の残存状況から、同北西部にその広がりが見込まれた。

立会調査

浄化槽設置のための掘削に昭和61年3月3日立会ったところ、中世の一括遺物が出土する隅丸方形土壇を検出したので、3月4日まで緊急の調査を実施した。以下がその概要である。

調査地は第1トレンチの西方約5mの地点であり、溝(SD8501)が延長していたとすれば、検出できる地点であった。

まず、重機で地表下約1m掘り下げたところ、立会範囲の南部で多量の遺物の出土を見た。そこで、浄化槽設置全域に調査の手を広げたが、結局は攪乱等により、SX01と名づけた隅丸方形土壇のほかは遺構は検出されなかった。

SX01は、多量に遺物が出土した地点を人力で精査したところ、約10cmほど下で輪郭が判明した。規模は、東北—西南が2.1m、西北—東南が1.65mである。深さは40cmほどである。遺物は瓦器碗と土師器皿を主体とし、少量の中世陶器甕(丹波か常滑)、土師器鍋、須恵器鉢、瓦器皿、土師器碗などがあり、この時期の資料に乏しい当地域にとって貴重なものとなった。

3. 出土遺物

数量としてはあまり多くなく、しかも時代的には中世に集中していた。

種類を列記すると、弥生土器壺、奈良時代の須恵器杯身・土師器甕、平安時代中期の灰釉陶器碗、同末期から鎌倉時代初期にかけての瓦器碗、土師器皿・杯、白磁碗、同中期から後期の土師器皿・碗・鍋(2種類)、瓦器皿、須恵器鉢、陶器甕などである。

では、第15・16図を参照しながら、遺物の概要を説明しよう。

トレンチ調査(第15図)

弥生時代から中世までの遺物が出土した。今回図示したのは、すべて第1トレンチ出土分である。溝SD8501から出土したものがほとんどである。

弥生土器小壺(1) トレンチ北西部の茶褐色粘質土(古代相当層)より出土した。1~2mm大の白色砂を含んでおり、色調は赤褐色である。完形品。

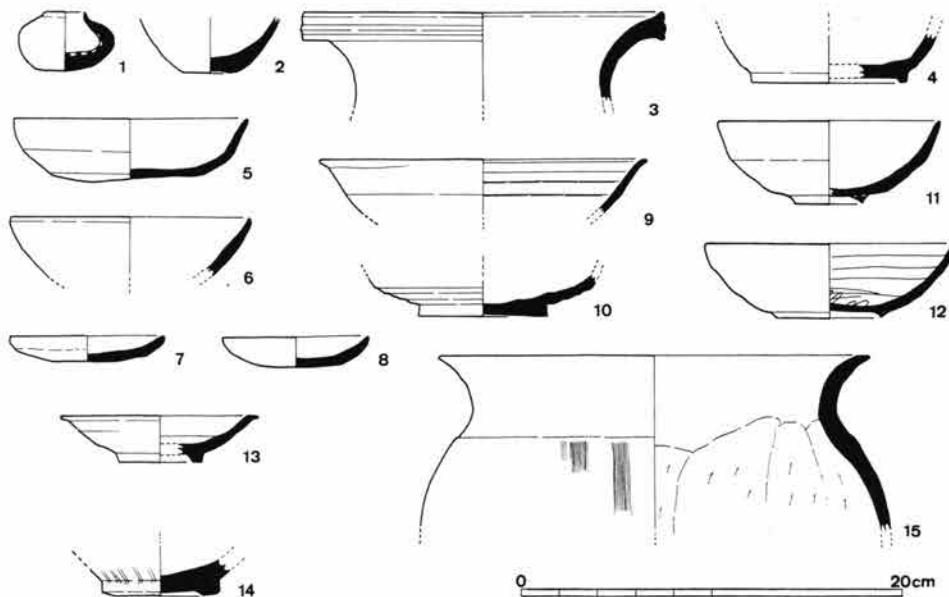
弥生時代の遺物としては、他に甕の底部(2)や壺の口縁部(3)が出土した。大略中期末に比定されるものであろうか。

次に古墳時代から奈良時代にかけてのものをいくつか紹介しよう。

奈良時代須恵器杯身(4) 高台の形態に注目すれば、奈良時代のおわり頃、あるいは平安時代初期に入るかも知れない。(1)と同様の箇所出土した。

次に平安時代前半期に属する灰釉陶器碗(9)がある。灰釉はあまり濃密にはかかっていないが、プロポーションからいえることは、猿投窯跡における折戸53号窯式(注6)に相当し、およそ10世紀に属するものと思われる。管見では、綾部市において灰釉陶器としては発掘調査で出土した最初のものではなかろうか。SD8501出土。次いで中世の遺物を紹介する。

土師器皿は、中型(5・6)と小型(7・8)がある。口縁部の形態(注7)に注目すれば、12世紀後半から13世紀に比定されるが、法量に注目すれば、かなり縮小しており、13世紀~14世



第15図 トレンチ調査出土遺物実測図

紀に比定される。おおよそ13世紀の製品であろう。いずれもSD8501から出土した。

土師器杯(10)は、内外面ともにロクロなどで施したものである。この種類の製品は丹波や丹後に認められるが、おおよそ13世紀に入ると消滅するようである。調査地の北東部の茶褐色粘質土より出土した。

瓦器碗(11・12)は、磨滅して詳細は不明であるが、主要な点をあげると次のとおりとなる。(11)は、口径が11.8cmで、器高4.4cmである。口径に比して高台が小さい点などが丹波地方の瓦器碗の特徴をよく示している。^(注8)類例は、京北町周山瓦窯跡出土品^(注9)にあり、ここでは13世紀に比定されている。(12)の例も、内面の暗文が退化して数条しか施されておらず、高台も断面が三角形で小さい点などから、これも13世紀に比定されるものである。いずれもSD8501から出土した。

白磁皿(13)は、中国製品と思われる。削り出し高台で、内底面には砂を置いて重ね焼きをした跡がある。そして、その部分は施釉した後に削り取っている。

白磁碗(14)は、中国製品と思われる。これは、大宰府での横田・森田両氏の^(注10)分類によればⅣ類に相当するものである。外面下半は、施釉部を削るために、回転ヘラケズリを施した状況がよくわかる跡がある。白磁はいずれもSD8501より出土した。

立会調査(第16図)

遺物のほとんどすべては、土塚SX01より出土した。しかも、中世の一括資料であり、当地域の土器資料として貴重なものとなった。

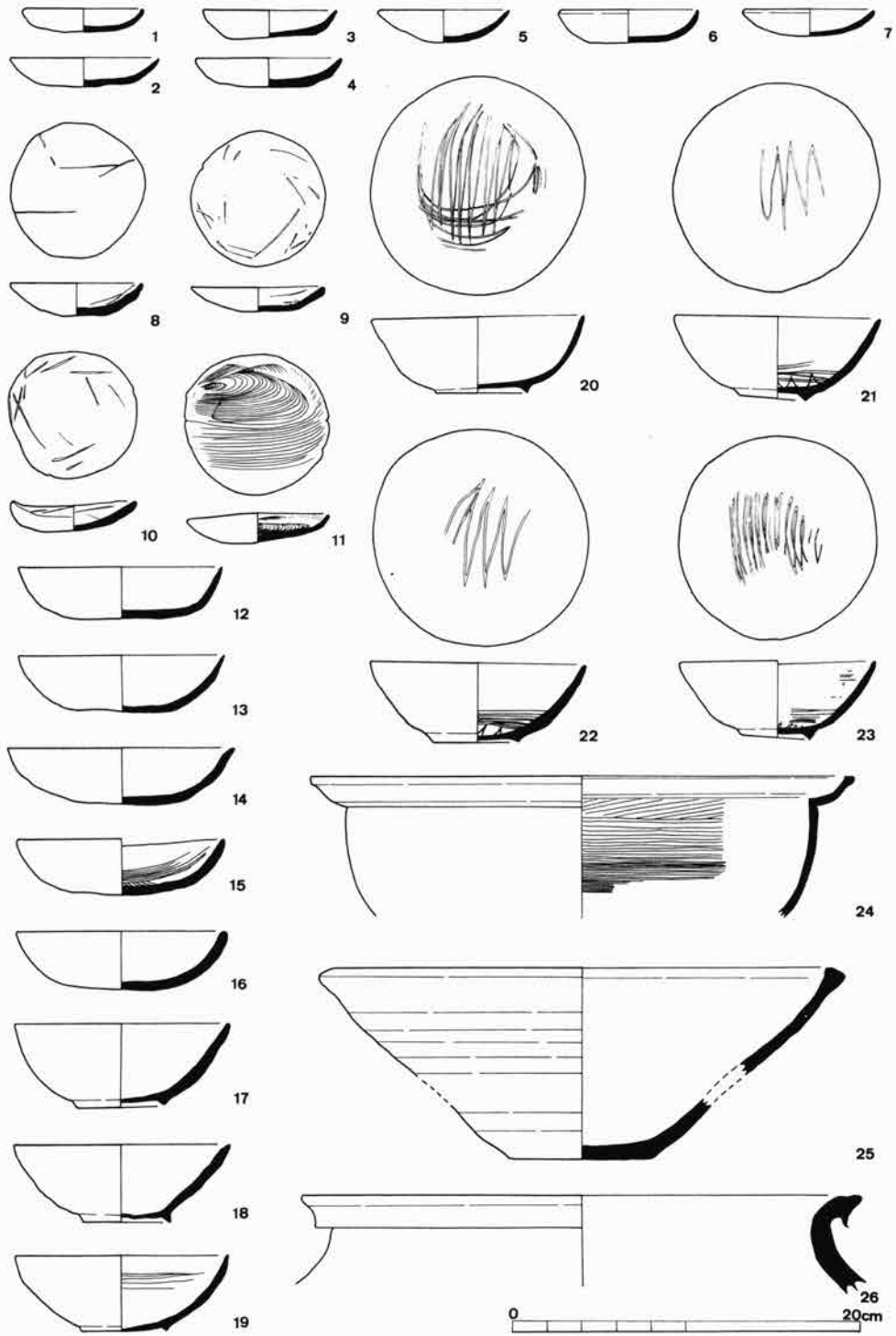
それでは、主要な遺物の説明を行う。

土師器皿は、中型(12~16)と小型(1~4・8~11)がある。中型の口径は、11.7~13.1cmで、12cm前後が多い。色調は淡褐色や乳褐色で、比較的白っぽいものが多い。(15)の内面には板状工具によるハケ目様の痕跡がある。小型の口径は、7.5~8.5cmのものが多い。色調は中型と同様である。(8)~(10)は、板状工具またはヘラ状工具で時計まわりの方向に削った痕跡が明瞭である。(11)の成形は、まず回転糸切り手法によって粘土塊から円板をつくり、その円板をもとにユビオサエ成形によって皿としたものである。今回の調査では数点発見された。

今回の調査で発見された土器群で注目には値するのは、土師器碗が出土したことである。

土師器碗は10数点発見された。プロポーションは瓦器碗と同様であるが、暗文は施さないようである。(17)は口径が12.4cmで、器高は4.7cmである。色調は黄褐色で、他の土師器より精良な胎土を使用しているようである。

土師器鍋(24)は口径30.2cmで、器高は底部を欠損しているため不明である。胎土は良ではあるが、1mm大の黒・灰・茶色の粒が混入されている。色調は淡褐色で、外面には



第16図 立会調査出土遺物実測図

煤が付着しているため黒灰色となっている。

瓦器には皿と碗がある。

皿(5)~(7)は小型のものばかりで、口径7.5~8cmのものである。基本的には土師器皿と同形であるが、口縁端部が「面取り」したように稜線のあることが違っている。

瓦器碗(18)~(23)は口径が11.2~12.5cmぐらいまでのものである。内底面の見込みには「ジグザグ」状の暗文がある。体部内面の暗文は、それほど遺存状態がよいとは言えないが、それほど密ではないようである。

須恵器鉢(25)は口径が約28cmで、器高は推定11cmのものである。色調は灰色であるが口縁部と底部は黒灰色となっている。

陶器甕(26)は口径が約30cmで、端部を上下に肥厚させたタイプのものである。胎土はやや砂粒が多く、色調は灰色となっている。おそらく、丹波焼か常滑焼のいずれかと思われる。常滑焼の編年観に従えば、^(注11)13世紀中頃から後半の時期となろうか。

遺物群からみた遺構SX01の年代は、やや小振りすぎるが、瓦器碗や土師器皿の年代観^(注12)に従えば13世紀後半という年代が妥当であろう。これは、伴出した陶器甕の編年観とも大きく矛盾しない。

4. ま と め

今回の調査成果について列記すると次のようになる。

(1) 集落の中心地を掘ったわけではないが、第7トレンチや第8トレンチの状況からすれば、調査地の西北方に集落が埋没している可能性が指摘できる。

(2) 検出された地山の高低差を調べてみると、第12図に示したとおり、第1トレンチの中央部から第2トレンチまでの間に、微低地形を想定することができる。あるいは、かつて河川があったのかも知れない。

(3) 調査地の東部には図示(第11図)したように低湿地が広がっていたことが判明した。

(4) 今回発見された弥生時代中・後期の遺物は少量ではあるが、完形品も含むことから、近隣に住居跡等のあることが推測できる。

(5) 古墳時代から奈良時代にかけても同様であり、今後の周辺の調査が待たれる。

(6) 平安時代末期から鎌倉時代については、遺構はさほど検出されなかったが、遺物は一括性の高いものであり、貴重な資料となった。瓦器碗には浅目のものや、他地域より小振りなものなどバラエティに富んでおり、「丹波型」と総称される中に、幾つかの相違を見出すことができる。あるいは各郷に土器作り集団が存在したことを暗示しているのかも知れない。

(伊野近富)

(2) 第 2 次 調 査

1. 調査の経過と概要

第2次調査は、昨年度の試掘調査で掘立柱建物跡の一部が検出された第7・8トレンチを、それぞれ住宅建築予定範囲いっぱいまで拡張して実施した。試掘調査の結果も含めて、第2次調査の成果として報告する。

廃土処理の問題で第8トレンチの調査を先に行い、そこを埋め戻して第7トレンチの調査を実施する予定であった。ところが、後述するように、先に調査した第8トレンチの検出遺構が顕著であったため、再度、住宅課と協議を行った。その結果、廃土は調査地外へ搬出し、第8トレンチの埋め戻しは現地説明会以後にすることとなった。そして、第7・8両トレンチがそろった状態で、終了間際の9月5日に現地説明会を実施した。

第7・8トレンチともに試掘調査の結果を参考に、遺構面直上の旧耕作土まで重機により除去し、以下を人力により掘削した。遺構面は工場の基礎等によって攪乱を受けているか所が多くみられた。ところが、その攪乱面や、排水用にトレンチの周囲に掘った溝の壁面の観察によって、遺構面が2面あることが観察できた。そこで、旧耕作土を除去した時点で上層の遺構を検出し、さらに、その面を約10cm掘り下げて下層遺構を検出した。基本的な層序は第17図のとおりである。

2. 検 出 遺 構

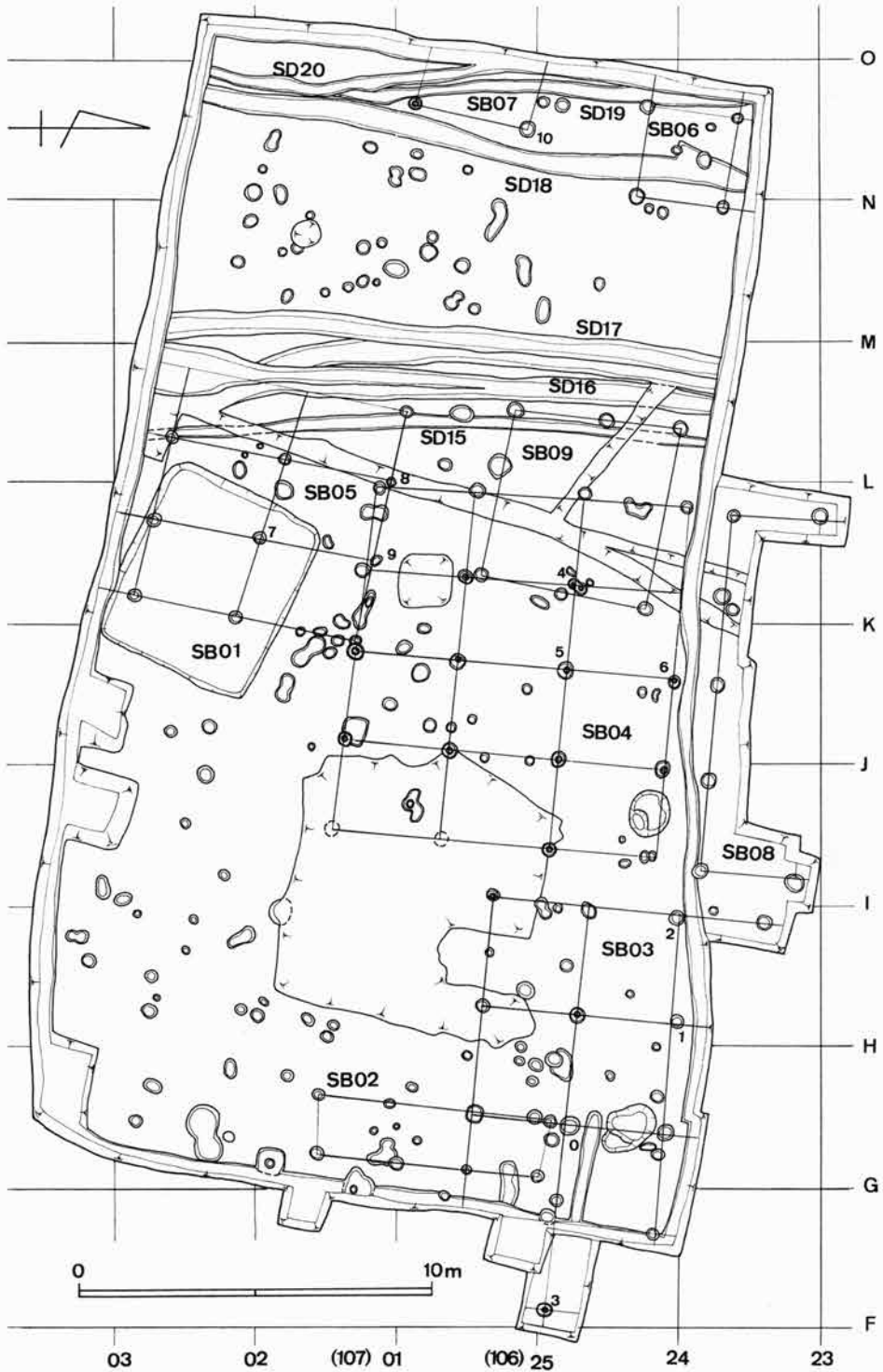
調査の結果、主な遺構として古墳時代前期の竪穴式住居跡及び溝、奈良時代の溝、中世の掘立柱建物跡群等を検出した。第7・8トレンチまとめて、各時期に分け概説する。

古墳時代前期 竪穴式住居跡(SB01)は、東西約5.4m・南北約4.5mで隅丸方形を呈する。壁高の残りは約20cmで、周壁溝の一部を確認できた。主柱穴は東西方向の2穴であったとみられる。南辺中央付近には、側壁に接して方形の土壇があり、さらにその中央部は円形に穿たれていた。^(注13)北辺中央部付近では、周囲より数cm盛り上がった土壇状の部分があり、粘土が貼られ堅く叩き締められていた。溝(SD21)は、第7トレンチを南東から北西方向にのびる。幅約40cm・深さ約20cmを測り、埋土は黒褐色粘質土で単一である。第8トレンチの溝(SD19・20)に連続する可能性も考えられる。溝(SD22)は溝(SD21)の南側を同じく南東から北西方面にのびる。幅約2



1. バラス他 2. 灰色粘土層
3. 黒褐色粘質土層
4. 黄褐色粘質土層

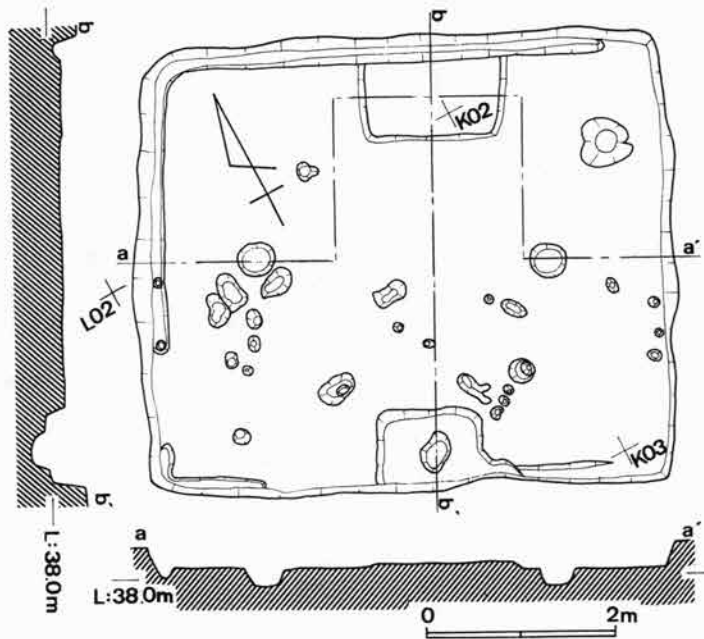
第 17 図 土層模式図



第18図 第8トレンチ遺構図

m・深さ約30cmを測り、一度掘り直されている様子が底部の状況からうかがえた。埋土は黒灰色粘質土で、竪穴式住居跡(SB01)と共通する。

奈良時代 溝(SD18)は、幅約40cm・深さ約5cmと、ほとんどが削平されている。埋土は、灰褐色粘質土である。溝(SD15)も

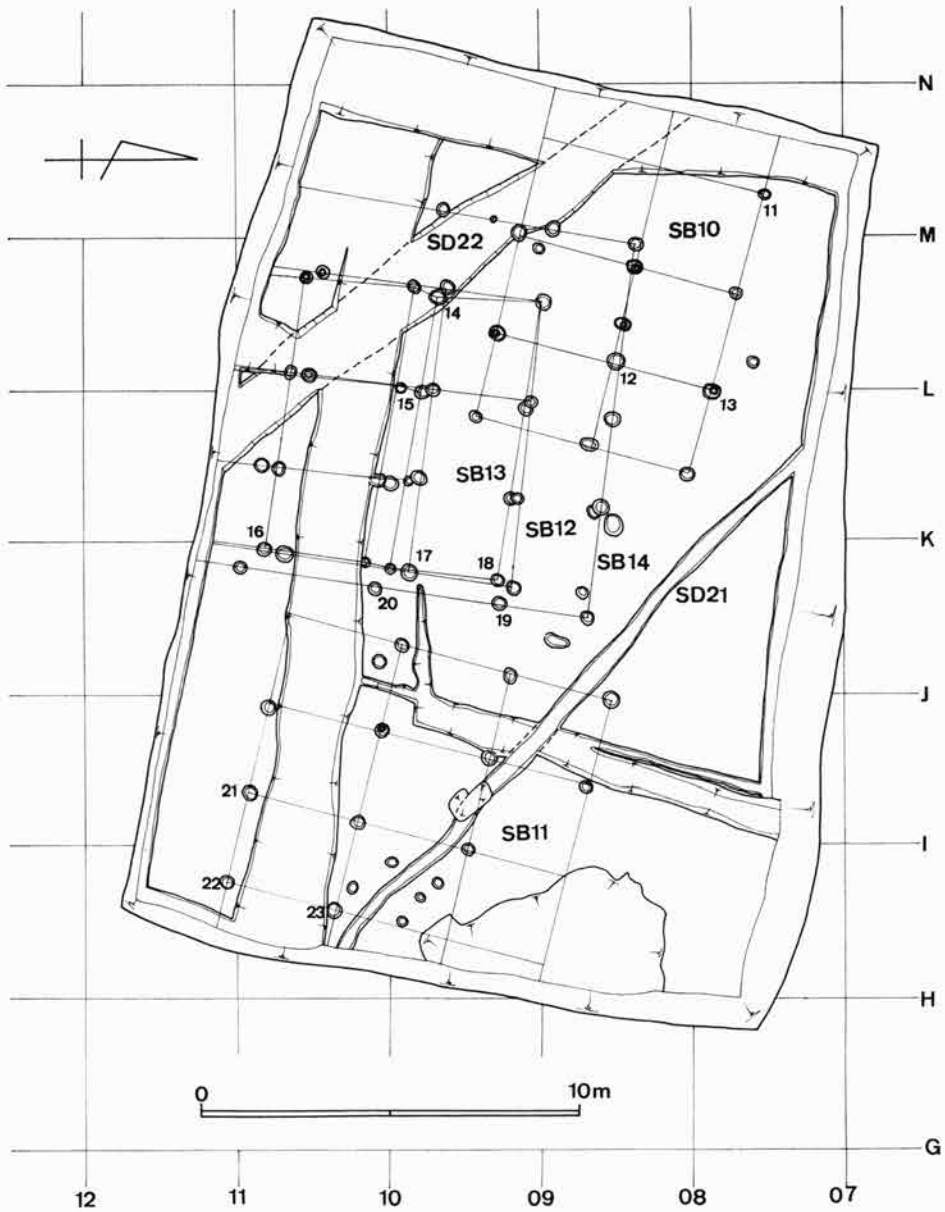


第19図 SB01 実測図

同様の埋土をもち、同時期かとみられるが、検出時の深さ約3cmとほとんど削平され、出土遺物が皆無のため、断定はできない。溝の残りが悪いこと、旧耕作土の最下層で同時期

付表1 掘立柱建物跡規模一覧表

遺構 No.	間数(間) 東西×南北	規模(m) 東西×南北	柱間距離 東西(m)	柱間距離 南北(m)	方向	時期
SB02	1間×3間	1.7×6.7	1.7	2.2	N7°E	I
SB03	4間以上×3間以上	×	3.0	2.6	N6°E	II
SB04	4間×3間	10.0×8.9	2.5	3.0	N5.5°E	II
SB05	3間×2間以上	6.6×	2.2	3.2	N11°E	I
SB06	1間以上×1間以上	×	2.5	2.6	N7°E	II
SB07	×1間	×3.3		3.3	N12.5°E	I
SB08	4間×1間以上	10.1×	2.5	2.7	N5.5°E	II
SB09	1間×2間	5.1×4.8	5.1	2.4	N11°E	I
SB10	3間以上×2.3間	7.5×	2.5	2.9	N15.5°E	II
SB11	3間以上×3間以上	7.2×8.9	2.4	3.0	N15°E	II
SB12	3間×2間以上	7.6×	2.5	3.0	N8.5°E	I
SB13	3間×3間以上	7.4×	2.5		N8.5°E	I
SB14	4間×3間以上	10.0×	2.5	3.1	N8.5°E	I



第20図 第7トレンチ遺構図

とみられる遺物が多く含まれることなどから、この時期の遺構は既に削平されたと考えられる。

中世 第8トレンチで8棟(SB02～09)、第7トレンチで5棟(SB10～14)、合計で13棟の掘立柱建物跡群を検出した。それぞれの建物跡の規模は付表1のとおりである。調査範囲の関係、あるいは攪乱により、全容を確認しえた建物跡は2棟にすぎない。また、SB04

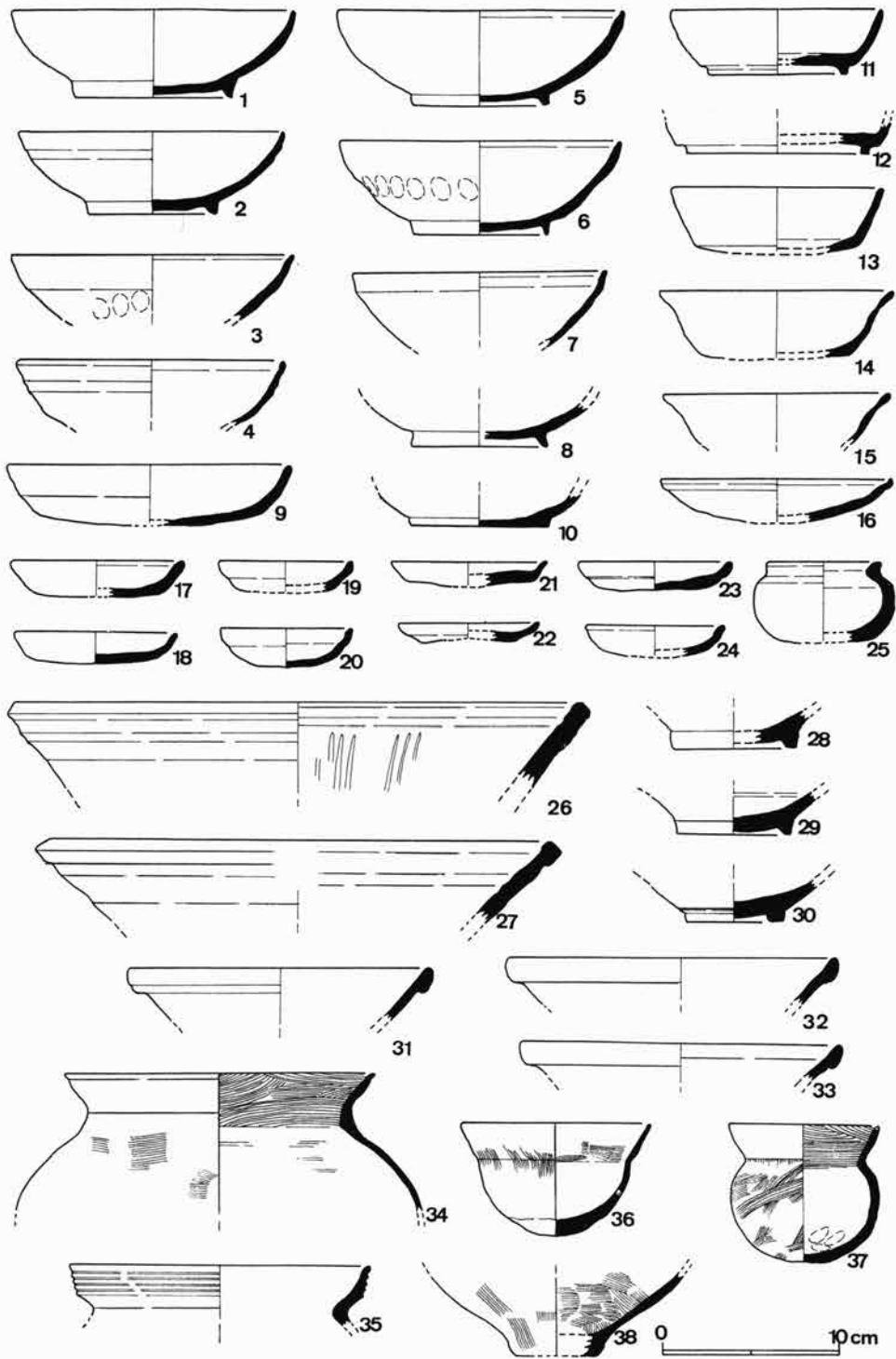
とSB08・SB13とSB14は、それぞれ同一の建物と考えられるが、整理の都合上、別棟として扱った。いずれの建物も磁北よりわずかに東に振って建てられている。また、規模の大きい建物は総柱となっている。ピットは、直径約30～40cmで、15cm程度の柱痕の残るものもみられた。深さは約20～40cmである。埋土は灰褐色粘質土に黄斑が混じる。数多くのピットから瓦器・土師器等の遺物が出土した。特にSB04-0・1, SB11-12では完形の瓦器椀が埋納されていた。

近世以後 溝(SD16・17)は、工場が建築される直前まで機能していた水田耕作用の水路とみられる。埋土は青灰色粘土で、溝(SD16)の東壁には杭列が残っていた。また、複雑な掘形を呈することから、どちらの溝も廃絶まで長期間にわたって使われていたと考えられる。

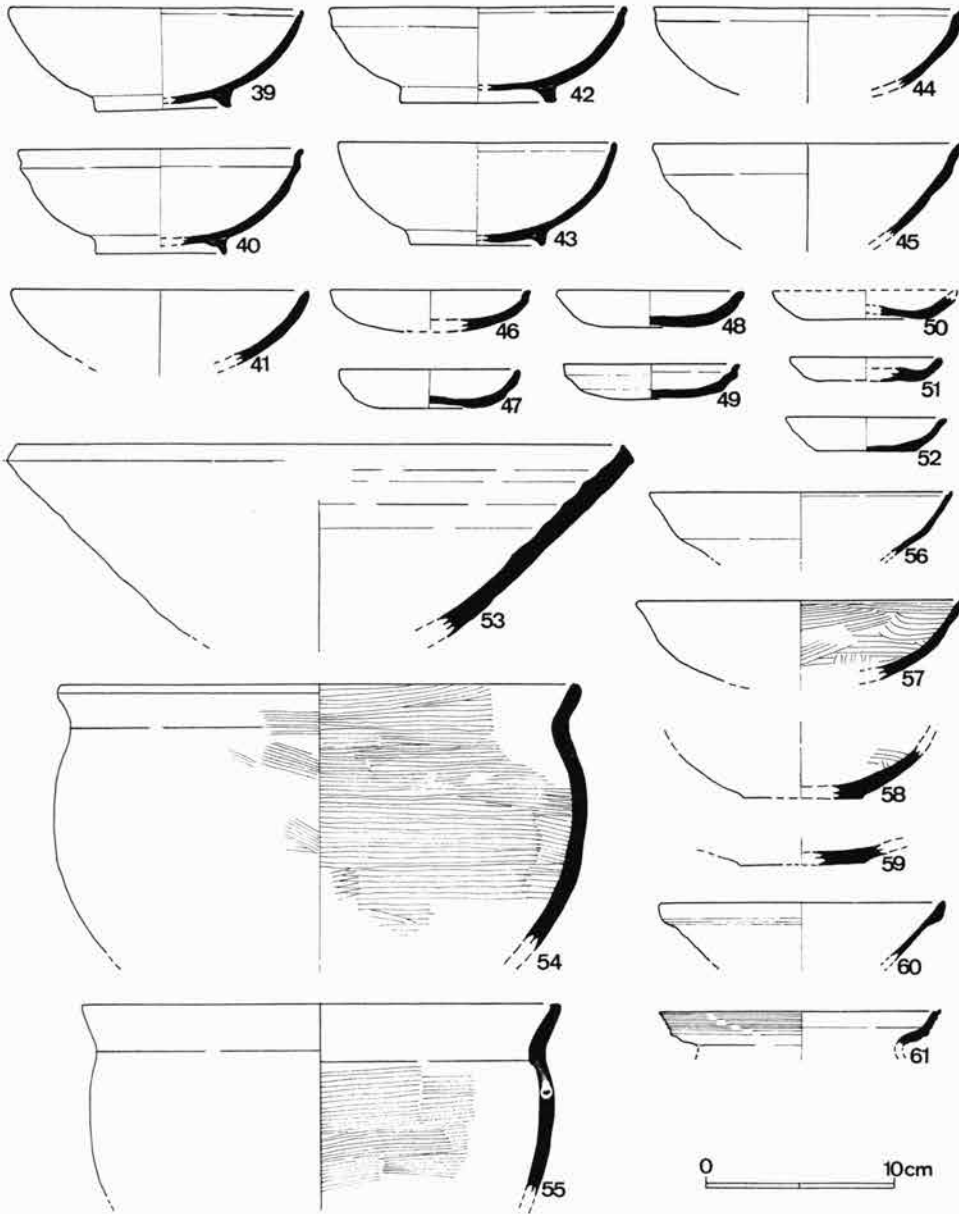
3. 出土遺物

掘立柱建物跡のピットを中心に、コンテナにして約10箱の遺物が出土した。基礎的なデータは遺物観察表に譲り、ここでは特徴的なことについてのみ述べる。

1～8・39～45は瓦器椀である。口径は15～16cm程度が多く、扁平な観を受ける。体部から口縁部にかけてはやや肥厚気味で、1・3などは特に顕著である。高台は断面が三角形・台形を呈するものが多く、底部外方にしっかりと貼り付けられている。口縁端部は内側に段を有するもの(3～7・38・42～44)、有さないもの(1・2・41・44)とがある。暗文等の調整は、いずれも磨滅が激しく、観察不能であった。これらの瓦器椀の特徴は、兵庫県春日町の多利・前田遺跡出土のものと非常に類似している^(注14)。17～20・46・47は瓦器小皿である。口径は7cm台のもの、9cmを越えるものとがある。平底気味の底部にやや外反する口縁部をもつ。9・10・16は土師器皿である。9は内膳町遺跡分類の皿Dに相当する^(注15)。10は出土の土師器で唯一糸切りを施す。16はレンズ状の体部をもち、端部は上方に屈曲させ丸くおさめる。21～24・48～51は土師器小皿である。平底気味の底部に内湾して立ち上がる口縁部をもつもの(23・24・48・49)、平坦な底部に直線的にのびる口縁部をもつもの(21・22・50・51)とがある。24は土師器小壺、54・55は土師器鍋で、他にあまり出土例をみない。以上、述べてきた瓦器・土師器(10・16を除く)は、ほとんどが掘立柱建物跡のピットから出土しており、おおむね12世紀のものと考えられる^(注16)。11～15は須恵器杯身で、12を除いてSD18から出土している。高台をもつもの(11・12)、もたないもの(13～15)がある。いずれも、8世紀のものと考えられる。26・27・53は陶器・須恵器鉢である。26は丹波系の摺鉢で14世紀、27・53は東播系の練鉢で12世紀のものと考えられる。52・57～59は黒色土器である。52は皿、57～59は椀で、いずれも内面のみ黒色、底部は糸切りを施す。共伴する瓦器椀から、12世紀のものと考えられる^(注17)。28～33・60は輸入陶磁で、いずれも白



第 21 図 第 8 トレンチ出土遺物実測図



第22図 第7トレンチ出土遺物実測図

磁碗と考えられる。28~30は底部で、低く幅の広い削り出し高台を有する。31~33・60は口縁部で、端部は外側に折り返し玉縁をなす。60はそれらより若干先行するものとみられる。^(注18)
 今回の調査で出土した中世遺物中の、輸入陶磁の構成比率は0.8%で1%を下回る。34~38は、SB01から一括して出土した。34・35は甕の口縁部、36・37は小型丸底壺、38は甕か壺の底部である。小型丸底壺の形態を、青野西遺跡の編年試案に対照すると、青野西II

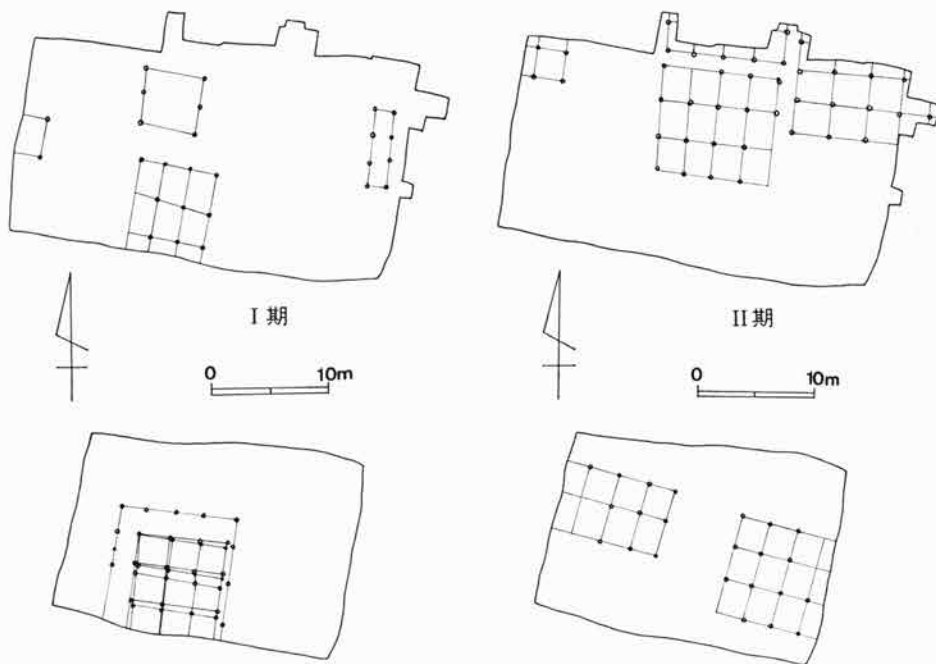
式新と布留Ⅱの中間に位置づけられる。^(注19)

4. ま と め

今回の調査によって得られた成果は、大きく二つに分けられる。一つは古墳時代前期の竪穴式住居跡及び溝の検出、一つは中世の掘立柱建物跡群の検出である。

前者は、古墳時代前期の集落跡の一角を検出したといえよう。第6・9・10トレンチの状況から、集落跡は西及び北に広がっている可能性が高い。^(注20) また、SD22がこの集落を区画する溝である可能性もある。今までの周辺地域の調査結果によると、7世紀段階までの集落は由良川(旧河道)付近に確認されるのみで、7世紀以後になって青野南・綾中地域にも人々が住むようになったと考えられた。^(注21) しかし、今回の集落跡の検出は、その考え方に一部修正を求めるものである。^(注22) 現在のところ、西町遺跡の集落は古墳時代前期の一時期であり、短期廃絶型の集落であったとみられる。一方、青野・青野西遺跡は長期継続型の拠点的な集落と考えられる。あるいは、青野ないし青野西遺跡の住人が何らかの事情(由良川の氾濫による可能性が高い)によって、古墳時代前期の一時期に西町遺跡に移り住んだ可能性が考えられよう。

後者は、中世村落の居住域のほぼ中心を検出したと考えられる。このように、中世の掘



第23図 掘立柱建物跡変遷図

立柱建物跡群を発掘調査により検出したのは綾部市では初めてである。中丹以北に目を転じて、^(注23)大内城跡・^(注24)城ノ尾城館跡があるにすぎない。これらは、丘陵上に設けられた城館跡で、沖積地に立地する西町遺跡とは性格が異なる。

検出した建物跡は重複する部分が多くみられ、時期差をもって建てられていたことがわかる。第23図にその変遷を示した。前後関係は、柱穴の切り合い、層序関係などの検出状況から解釈した。出土遺物からは、時期差を示す有力な手がかりは得られなかった。逆に建物群が短期間に連続して建てられていた様子を示しているとも考えられる。第7トレンチでは、Ⅰ期—SB12・SB13・SB14、Ⅱ期—SB10・SB11とした。柱穴の切り合いから、SB13がSB12に先行する。また、SB13—18とSB14—19の遺物片の多くが接合でき、SB14がSB13の庇あるいは縁の部分かとみられ、一つの建物であったと考えられる。つまり、Ⅰ期でもさらにSB13・SB14→SB12と変遷している。SB10は攪乱のため南北2間しか確認できなかったが、Ⅱ期の建物の状況から南側にあと1間あったとみられる。第8トレンチでは、Ⅰ期—SB02・SB05・SB07・SB09、Ⅱ期—SB03・SB04・SB06・SB08である。SB04とSB08は、建物間隔が約1.2mと近接して建てられており、同一の建物であったかと考えられる。第7トレンチと第8トレンチは、Ⅰ期の建物がN8.5°E～N12.5°Eとほぼ同一方向で同時期と考えた。また、Ⅱ期の建物は、第7トレンチと第8トレンチとでは若干方向は異なるものの、柱間間隔がほぼ等しいことなどから、同時期と考えた。

特に、Ⅱ期の建物は、約30cm(=A)を基本単位に、その整数倍の数値を用いてピットの配置を決定している。具体的には、南北方向A×10、東西方向A×8(SB03は東西・南北が逆)、SB03・SB04の間がA×4、SB04・SB08の間がA×5である。こうして、Ⅱ期の段階では平面プランの点からだけではあるが、一定の規格性をもって建てられていたことがわかる。ここには、12世紀の段階で綾部地域に規格性をもった建築技術が導入されており、その技術者が存在したことが推察できる。さらには、この建物群を建てた人々が、被支配者である村落民ではなくて、特定の支配者であった可能性も考えられよう。

当地域は『和名抄』にその名が記載されているとおり漢部郷であったと考えられる。綾部と記されるようになるのは、江戸時代以後で、現在の西町・綾中・坪ノ内・新宮・寺・田野・中村・井倉・青野・野田・味方の各字にあたる。漢部郷も、おおよそ上記の各字の範囲であったとみられる。建久三(1192)年八月「伊勢神宮神領注文」と同六年九月「大神宮神主注進帳」^(注25)によって、12世紀後半の漢部郷の様子がわずかながらうかがえる。それによると、仁平年間(1151～54)に伊勢神宮内宮に寄進され「漢部御厨」となっている。領家は源行貞の子、上分米は十石である。ところが、建久六年九月に太神宮神主が「任道理停止国衙妨」するように訴えているように、実質的に国衙領になり、御厨の号も廃されている。

また、隣の福知山市に雀部という地名が残っており、11世紀の終わりから松尾大神領となり雀部荘となっている。松尾社家文書に、12世紀に入ってから地頭の非法を訴えているものがある。^(注26)十項目に及ぶ訴状で、当時の荘園での地頭の侵略ぶりが具体的に示される好史料である。その第二項を以下に示す。

一 充造地頭庄屋於百姓事。

右、如覺秀申者、先例僅造草屋之處、於本宅者爲薪、可新造五間三面式屋之由、令譴責之間、百姓等失爲方、可逃脫之由、依令申、社家言上事由之曰、就被下問狀御教書、雖止式屋徵、

要約すると、地頭は五間三面の式屋を造るのに百姓にその役を課し、困った百姓は逃げ出そうとしているといった内容である。ここで、地頭の式屋の規模が具体的に五間三面と記されていることに注目できよう。五間三面とは、中世ではおそらく五間三間の規模を表していると考えられる。発掘調査により検出した建物と、文献に示された建物とを単純に規模のみで比較するのは少々乱暴であるが、西町遺跡で検出した建物跡群とはほぼ一致する。これらの建物跡群の居住者の性格を知る上で、重要な史料となりえよう。

これらを総合すると、「漢部御厨」が設置されさらに国衙領へと移り変わっていく政治的様相のなかで、西町遺跡の掘立柱建物群を考えてみる必要がある。建物の規模が雀部荘の地頭の式屋に相当すること、建物が約30cmを基本単位に規格性をもって建てられていることなどから、この建物跡群が漢部郷の荘官クラスの屋敷跡と推定できる。ただ、断定するには数多くの問題点が残る。多利・前田遺跡の場合は、建物跡の規模は同様であるが、建物群の隣りに輸入陶磁・和鏡・鉄製品を埋納した墓があり、遺跡の性格を示している。西町遺跡では、遺構は建物跡に限られ、墓は検出できなかった。ただし、この点については調査地外に存在することも十分に考えうる。また、大内城跡の場合、建物規模もさることながら、1,000点を越える輸入陶磁片が遺跡の性格を物語る。これも、大内城跡は京都の中央権力とも特別な結びつきが考えられ、単純に比較することはできない。

西町遺跡の発掘調査は、今までほとんど明らかでなかった当地区の中世の様相を解明するのに、非常に大きな成果をもたらしたといえよう。と同時に、まだまだ不明な点ばかりで今後の課題の多さを再認識させられた。今後の調査により様々の点が解明されるであろうが、本稿がわずかでも活用されれば幸いである。

(西岸秀文)

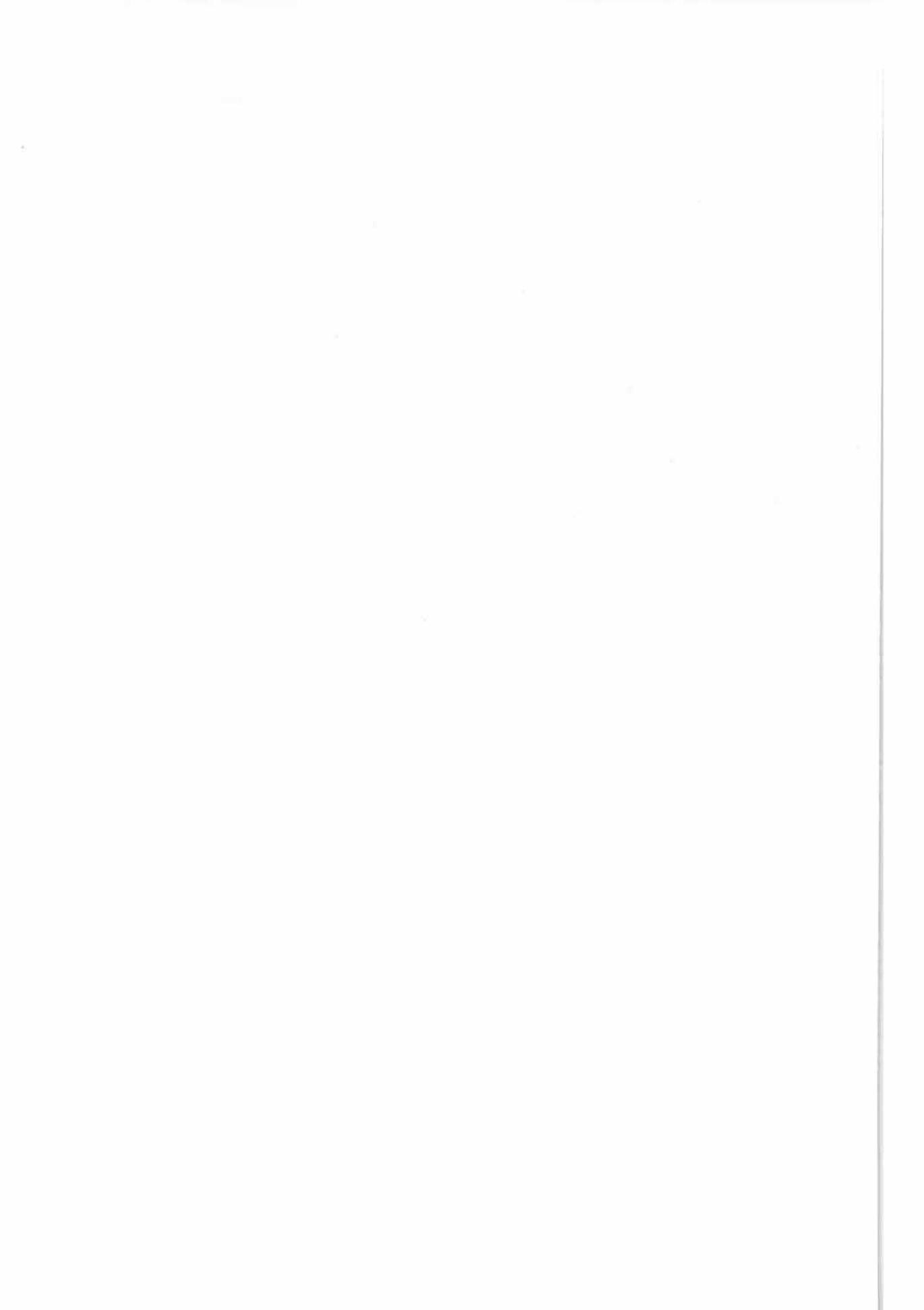
付表2 出土遺物観察表

器種	器形	番号	法量 (cm)		手 法		色 調	焼成	胎 土 他	出土地点	
			口径	器高	体部外面	体部内面					
瓦器	椀	1	16.2	4.9	ヨコナデ	観察不能	黒灰色	良	石砂含む	S B03-1	
		2	15.4	4.8	ヨコナデ	暗文僅か残	黒灰色	良	砂粒含む	S B03-1	
		3	16.4	5.3	ヨコナデ	観察不能	黒灰色	良	砂粒含む	S B03-1	
		4	16.0	5.2	ヨコナデ	観察不能	黒灰色, 乳灰色	良	細砂粒含む	S B03-1・2	
		5	16.0		ヨコナデ	観察不能	乳灰色	良	砂粒含む	S B04-4	
		6	14.9		ヨコナデ	観察不能	黒灰色	良	密	S B04-5	
		7	14.4		ヨコナデ	観察不能	黒灰色	良	砂粒多く含む	S B04-5	
		8			不 明	不 明	黒灰色, 乳灰色	良	砂粒含む	S B05-9	
		39	15.2	5.2	ヨコナデ	観察不能	黒灰色	良	砂粒含む	S B11-22	
		40	14.8	5.5	ヨコナデ	観察不能	黒灰色	良	砂粒含む	S B13-16	
		41	15.2	4.9	ヨコナデ	観察不能	灰白色	良	砂粒含む	S A10-12	
		42	14.3	5.4	ヨコナデ	観察不能	黒灰色	良	砂粒含む	S B12-17	
		43	16.2		ヨコナデ	観察不能	黒灰色	良	砂粒含む	S B10-13	
		44	16.0		ヨコナデ	観察不能	黒灰色	良	砂粒少量含む	S B14-20	
		45	15.5		ヨコナデ	観察不能	黒灰色	良	砂粒少量含む	S B11-22	
		小皿	17	9.8	2.0	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色	良	密	S B03-1
			18	9.0	1.7	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色	良	密	S B03-3
			19	7.5	1.7	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色	良	密	包含層
			20	7.3	2.2	ヨコナデ	暗文僅か残	黒灰色	良	密	S B07-10
			46	10.3	2.2	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色	良	密	S B10-11
47	9.4		2.0	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色	良	密	S B13-15		
土師器	椀		56	15.6		不 明	不 明	淡橙色	良	砂粒少量含む	S B11-23
		10			底部糸切り	ヨコナデ	淡茶褐色	良	砂粒少量含む		
	皿	9	15.8	3.4	不 明	不 明	明淡褐色	軟	砂粒含む	S B05-8	
		16	13.0	2.5	不 明	不 明	淡黄褐色	軟	砂粒含む	S D-18	
	小皿	23	8.5	1.6	不 明		淡褐色	良	砂粒含む	S B04-6	
		24	7.7	1.8	不 明	ヨコナデか	暗茶褐色	良	砂粒含む	S B04-5	
		48	9.5	1.9	不 明	未調整	淡褐色	良	砂粒含む	S B14-19	
		49	9.2	1.7	不 明		淡褐色	良	砂粒含む	S B12-17	
	皿	21					淡黄褐色	良	砂粒少量含む	包含層	
		22	8.0		観 察	不 能	淡黄褐色	良	砂粒少量含む	包含層	
		50	8.8				淡黄褐色	良	砂粒少量含む	S B13-14	
		51	8.0				淡黄褐色	良	砂粒少量含む	包含層	
	小壺	25	6.2	4.5	ハケの後	ヨコナデ	淡褐色	堅緻	砂粒, 石粒含む	S B05-7	
	鍋	54	27.0		ハケ目	ヨコナデ	淡橙褐色	軟	砂粒多量含む	S B10-11	
		55	25.0		観察不能	ヨコナデ	暗茶褐色	軟	砂粒多量含む		
須恵器	杯身	11	11.8	3.7	貼付け高台	ロクロナデ	青灰色	堅緻	砂少量含む	S D18	
		12					青灰色	堅緻	砂少量含む	包含層	
		13	11.7	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	青灰色	堅緻	密	S D18	
		14	13.0	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	淡褐色	軟	砂粒含む	S D18	
		15	12.8		ロクロナデ	ロクロナデ	灰白色	軟	砂粒含む	S D18	

器種	器形	番号	法量 (cm)		手 法		色 調	焼成	胎 土 他	出土地点
			口径	器高	体部外面	体部内面				
	鉢	26	32.0		ロクロナデ	条 痕	淡灰色	堅	砂粒含む	包含層
		27	28.0		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	堅	砂粒含む	包含層
		53	31.8		ロクロナデ	ロクロナデ	灰色	堅	砂粒含む	S B12-17
黒色土器	皿	52	8.4	1.8	底部糸切り	ヨコナデ	外面茶褐色	良	砂粒含む	S B14-19, S B13-18
		57 58 59	16.8		底部糸切り	ヘラミガキ	外面茶褐色	良	砂粒含む	S B14-19, S B13-18
					底部糸切り	ヘラミガキ	外面茶褐色	良	砂粒含む	S B14-20
					底部糸切り	ヘラミガキ	外面茶褐色	良	砂粒含む	S B12-17
輸入陶磁	碗 (底部)	28			削り出し高		素地灰白色	良	良	包含層
		29			削り出し高		素地灰白色	良	砂粒含む	包含層
		30			削り出し高		素地灰白色	良	良	包含層
	碗	31	17.0		ロクロナデ	ロクロナデ	素地灰白色	良	密	S B05-7
		32	16.6		ロクロナデ	ロクロナデ	素地灰白色	良	密	
		33	18.0		ロクロナデ	ロクロナデ	素地灰白色	良	密	
		60	14.9		ロクロナデ	ロクロナデ	素地灰白色	良	密	
土師器	甕	34	19.6		ケズリ	ヨコナデ	黄褐色	軟	砂粒を多く含む	S B01
		35	17.0		口縁部に 擬凹線	調整不明	淡褐色	軟	砂粒を多く含む	S B01
		61	14.6			調整不明	淡褐色	軟	砂粒を多く含む	S D21
	壺	36	10.6	6.3	ハケ	ハケ	淡褐色	良	砂粒少量含む	S B01
		37	8.5	7.7	ナデ	ハケ	橙褐色	軟	砂粒含む	S B01
38				タテハケ	ヨコハケ	赤褐色	軟	砂粒含む	S B01	

- 注1 小山雅人「青野西遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注2 中村孝行「綾部市久田山南遺跡の出土遺物について」(『太瀬波考古』第5号 両丹技師の会) 1985
- 注3 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 注4 綾部市教育委員会による西町北大坪遺跡の調査(昭和60年)
- 注5 伊野近富「京都北部の中世土器について」(『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会) 1985
- 注6 檜崎彰一「猿投窯の編年について」(『愛知県古窯跡分布調査報告(Ⅲ)尾北地区・三河地区』愛知県教育委員会) 1983
- 注7 注5に同じ
- 注8 橋本久和「瓦器碗の地域色と分布」(『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会) 1980 及び注7文献。
- 注9 平良泰久他「周山瓦窯跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財調査概報』京都府教育委員会) 1979
- 注10 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集 4』九州歴史資料館) 1978
- 注11 赤羽一郎編「常滑編年図表」(『世界陶磁全集 3 日本中世』小学館) 1977

- 注12 注7に同じ。
- 注13 青野西遺跡(小山雅人『青野西遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985)では、同様の土坯をもつ住居跡が5基報告されている。報告書では、特殊ピットと名付けその性格について論及されている。
- 注14 多利・前田遺跡に関しては、兵庫県埋蔵文化財研究所の加古千恵子・平田博幸の両氏に多大なる御教示をいただいた。西町遺跡の瓦器碗は、多利・前田よりも若干先行するとみられる。
- 注15 平良泰久他「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980)』京都府教育委員会) 1980
- 注16 伊野氏が「京都北部の中世土器について」(『中近世土器の基礎研究』中世土器研究会 1985)において、丹波地方の中世土器編年試案を示されている。それによると、出土の瓦器碗はⅠ期に位置づけられるが、口径・器高・形態などに差異がみられ、詳細な検討は今後の課題である。
- 注17 黒色土器が出土したピットはいずれもⅠ期の建物で、Ⅱ期の建物からは全く出土しなかった。あるいは、この時期が当地域の黒色土器の消滅の時期を示しているかとも考えられる。
- 注18 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国製陶磁器について」(注10文献) 28~33は、白磁碗Ⅳ類、12世紀後半に位置づけられる。
- 注19 『青野西遺跡』 p. 75~78
- 注20 第6・9・10トレンチに関しては p. 16~18を参照。
- 注21 『綾部市文化財報告』第1~13集 『京都府遺跡調査概報』第6・18冊 『青野西遺跡』
- 注22 西町北大坪遺跡(中村孝行「西町北大坪遺跡」(『綾部市文化財報告』第13集 綾部市教育委員会) 1986)では、弥生時代中期の溝が検出され、同様な点が指摘されている。また、中村氏には多方面にわたる御協力・御教示をうけた。改めて、謝意を表したい。
- 注23 伊野近富「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡(1)大内城跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 注24 小山雅人「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡(6)城ノ尾城館跡」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注25 竹内理三編『鎌倉遺文』(東京堂出版)
- 注26 『鎌倉遺文』 5315号文書



4. 府営ほ場整備関係遺跡

昭和60・61年度発掘調査概要

(正垣遺跡・谷内遺跡)

はじめに

京都府農林水産部耕地課は、農業基盤整備事業の一環として、京都府下各地においてはほ場整備を実施中である。昭和59年度から開始された京都府中郡大宮町内のは場整備対象地域については、周知の遺跡として遺跡地図に記載された部分がいくつか存在した。近年、京都府では遺跡台帳整備のため新たに遺跡の分布調査が各地で実施されている。大宮町内では、昭和57・58年度の分布調査で新たに数百か所の遺跡が確認された。昭和61年はほ場整備事業対象地内では、新たに確認された正垣遺跡が奥大野工区に含まれていたことから、各関係諸機関での協議により、ほ場整備事業に先行して発掘調査を実施することが決定された。谷内工区内では、当初、遺跡の存在は確認されておらず、事業が着工されていたが、工事途中において多量の遺物の出土をみたことから、新たに谷内遺跡の発掘調査も実施することになった。

現地調査は、京都府峰山地方振興局から委託された(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施することになった。現地調査は正垣遺跡(京都府中郡大宮町字奥大野小字正垣、他)を当調査研究センター主任調査員長谷川達・同調査員竹原一彦の両名が担当し、昭和60年10月1日から昭和61年3月25日の間実施した。調査の結果、正垣遺跡は遺跡の内容・性格・遺物の出土量等において一級の遺跡であることが判明した。この時点で関係諸機関の間で再協議が行われ、昭和61年4月14日から7月3日の期間で引き続き調査地の一部拡張を含む発掘調査を実施した。4月以降の発掘調査には、当調査研究センター主任調査員水谷寿克が加わった。谷内遺跡(京都府中郡大宮町字谷内小字古苗代田)の現地調査は当調査研究センター主任調査員長谷川達・同調査員藤原敏晃の両名が担当し、昭和61年5月6日から6月30日の期間で実施した。

調査の実施にあたっては、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府立丹後郷土資料館・大宮町教育委員会をはじめとする各関係諸機関、地元地区、学生諸氏の方々により種々御協力を賜わった。ここに記して感謝する。

位置と環境

中郡は、府北部丹後半島の基部中央に位置し、大宮町・峰山町が含まれる。丹後半島最大の河川、竹野川が郡内中央を北流し、中流域部の中郡には平野(中郡平野)が開ける。正垣・谷内の両遺跡とも、中郡平野の南端部丘陵裾の台地上に位置している。正垣遺跡は、中郡平野から少し奥まった竹野川の支流である常吉川左岸の台地上に営まれている。谷内遺跡は、竹野川と常吉川合流部の東、竹野川右岸に営まれている。両遺跡は約2kmの距離を測る。

竹野川流域は丹後地方でも遺跡が集中する地域であり、重要な遺跡も数多く認められる。河口部には日本海側最大の前方後円墳である全長190mの神明山古墳があり、流域にも大形の前方後円墳が多数存在している。弥生時代の遺跡も多く、河口部には前期の代表的な遺跡である竹野遺跡^(注1)がある。中流域部では鉄器・管玉・ガラス等の出土をみた前期末～中期初頭の高地性集落である扇谷遺跡^(注2)や途中ヶ丘遺跡^(注3)、七尾遺跡^(注4)、古殿遺跡^(注5)等の重要な遺跡が存在する。

『続日本紀』によれば丹後国は、和銅6(713)年に丹波国から分国されている。現在の中郡は旧郡名を「丹波郡」と称し、峰山町内には「丹波」の地名が現在まで残ることから、古代においてこの地が丹波国の中心地であったことがうかがえる。

大宮町内では、従来から知られていた遺跡は数少なく、主要遺跡には祭祀用土器の出土



第24図 調査地位置図(1/25,000)

1. 正垣遺跡 2. 谷内遺跡 3. 裏陰遺跡 4. 新戸古墳
5. 宮ノ森古墳群 6. 黒田古墳群 7. 平太郎古墳群

をみた大宮売神社遺跡、巨石を用いた横穴式石室に石柵を設けている新戸古墳が注目されていた。近年、大宮町内では、各地で遺跡分布調査、発掘調査が実施され、数多くの調査成果が得られてきている。今回調査を実施した正垣遺跡・谷内両遺跡のほぼ中間には裏陰遺跡^(注6)があり、昭和53年の調査では縄文～平安時代にわたる遺構・遺物が発見されている。常吉川上流部には坂谷遺跡・上野遺跡がある。上野

遺跡は昭和51年に大型石庖丁が出土したことで知られるようになった遺跡である。正垣遺跡の所在する奥大野地区背後の丘陵部には数多くの古墳群が存在し、なかでも丹後地方最大の横穴式石室を内部主体とする前方後円墳である新戸^(注7)古墳は、当地域を代表する古墳である。谷内遺跡の北には昭和61年の調査で鏡・玉類・鉄刀が出土した大谷古墳^(注8)が存在する。三坂地区の丘陵部では昭和59年～61年にかけて、丹後地区国営農地開発事業に伴い、帯城墳墓群・大田ヶ鼻横穴群・有明古墳群・里山遺跡の発掘調査が実施され、大きな成果が得られている。

(1) 正 垣 遺 跡

1. 調 査 経 過

奥大野工区調査対象地面積は約4.5haにおよび、現在は水田部と畑地部に分れている。畑地部分は調査対象地内中央部の台地上に営まれ、水田は背後の丘陵から流れる小河川の扇状地部分に営まれていた。調査開始にあたり、調査対象地内に30か所のグリッドを設定し、土層観察・遺構の有無・遺物出土状況等、遺跡の概要把握をめざし、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、正垣遺跡は縄文時代～鎌倉時代にかけての遺跡であることが判明した。グリッド20(以下G記号を使用)では弥生時代後期の河川跡を検出し、この流路を境いに調査地の東部と西部はその様相を異にしていた。G20・G23を結ぶライン以東の各グリッドからは柱穴・土壇等の存在を確認した他、各時期に属する遺物が多量に出土した。対する西部域では、遺構・遺物の出土がほとんど認められない状況であった。その成果をもとに、正垣遺跡の集落は、調査対象地内の畑地を中心とする台地上に営まれたものと判断した。本調査にあたり、調査地の設定は掘削工事予定部分を対象とし、特に遺構・遺物の集中度の高いグリッドを中心に拡張する方法をとった。調査地は当初3か所を設定して調査を実施した。その後一部地域で工事が着手され、調査地外での表土除去作業に伴い古墳の存在を確認したことから、新たに2か所の地区でも発掘調査を実施した。

昭和60年度は第2・第3トレンチの発掘調査と、第1トレンチの一部を調査した。翌61年度は第1トレンチの拡張を実施するとともに、新たに第4・第5トレンチの発掘調査を行った。

2. 検 出 遺 構

今回の発掘調査では、弥生時代後期の竪穴式住居跡1基・小河川跡2か所、古墳時代後期の竪穴式住居跡8基・円墳1基、奈良～鎌倉時代の掘立柱建物跡20棟及び柱穴群・井戸



■ 試掘坑

第25図 正垣遺跡調査地位置図



第26図 調査地地区割り図

・土壇・溝等、各時期に属する遺構群と多量の遺物の出土をみた。出土遺物には縄文時代早期に属する押型文土器、後期に属する沈線文土器片を採集していたが、その土器に伴う遺構は確認できなかった。

弥生時代 弥生時代後期の竪穴式住居跡1基と同時期の小河川跡2か所を検出した。いずれも第3トレンチ内で検出したものであり、他地区では土器の出土をみることはない。

竪穴式住居跡(SH08)は第3トレンチのほぼ中央部で検出した。平面プランは方形であり、住居跡の南東コーナー部分を検出した。壁高は約20cmを測り、住居跡に伴う直径約30cmの柱穴跡1か所を検出した。住居跡内からの出土遺物は少なく、畿内第V様式に属する土器片が少量出土したのみであった。

河川跡(SD05)は第3トレンチの西南端で検出した。幅約5m・深さ約60cmを測る。トレンチの関係上、3mの長さ分を調査したのにとどまった。流路内から多量の土器の出土をみた。それらの土器はすべて弥生時代後期(畿内第V様式)に属するものであり、壺・甕・蓋・高杯・器台等の各器種の出土が認められた。流路内からは多量の土器に混って木製遺物の出土もみた。木製遺物は琴形木製品・舟形木製品・匙形木製品・その他計7点が出土した。この流路は遺跡の西南端部に位置する。遺跡を画する溝とも考えられるが確定するには至らず、現時点では背後の丘陵から流れ出た小河川跡とみ

ている。第3トレンチ東北部でも流路とみられる有機物包含層が若干認められ、畿内第V様式の土器の出土もみている。この遺物包含層は比較的薄く、小河川の氾濫原的性格をもつものとも考えられる。

ほ場整備着手後、調査対象地内全域で立会調査を実施したところ、遺跡範囲の外とみていた南側丘陵裾部で小河川跡を検出した。この流路内には弥生時代後期の土器が多量に含まれることが判明している。

古墳時代 古墳時代に属する遺物は各トレンチで出土しているが、量的には少ない。円墳1基・堅穴式住居跡7基を検出したのにとどまった。

円墳は台地の中央部山裾の畑地下に存在した。旧地形では古墳の存在を示すものは無く、立会調査中に周溝を検出し、初めて古墳の存在が判明した。この古墳は直径約15mの円墳であったとみられる。山裾側に幅約2.5m・深さ約30cmの溝(SD02)を設けていた。古墳の東半分は大きく削られていた。出土遺物等から墳丘の大部分は鎌倉～室町時代にかけて大きく破壊されたものと判断する。墳丘中央部に木棺直葬とみられる埋葬主体部1か所を検出した。主体部掘形の東半分は破壊されていた。現存部は長さ約3.7m・深さ約55cmを測る。主体部の主軸は東へ約24°振り、台地の主軸方向とあわせている。主体部掘形の西コーナー部に須恵器杯身・杯蓋が1セットで納められていた(第31図46・47)。また、SD02から須恵器壺の出土をみている。出土した土器の年代観からみて、この古墳は古墳時代後期(6世紀中葉)に属すると判断する。

堅穴式住居跡は、すべて第2トレンチで検出し、他地区での検出は認められなかった。堅穴式住居跡7基の平面プランはいずれも方形を呈する。SH03・SH04、SH05～07はそれぞれ切り合い関係にある。住居跡の多くは部分的な検出に終るものが多く、全容がつかめる住居跡はSH05・07の2住居跡である。SH05は長さ4.7m×4mの長方形プランをもつ。床面は東南方向に下る緩傾斜をもつ。焼土等はない。床面上からの出土遺物は小破片のものが多く、6世紀末～7世紀の年代観が得られる。SH07は東南コーナー部をSH05に切られる。検出した住居跡の中では最小の住居跡であり、3.2m×4mの規模をもつ長方形プランの堅穴式住居跡である。SH05と同様、南西方向に緩やかに下がる傾斜をもち、焼土等はない。SH01は壁高を約50cm残しているが、他の住居跡は15～20cmの壁高を残すだけであった。SH02は今回検出した住居跡中最大規模をもち、一辺約5m前後の規模をもつとみられる。床面中央付近に一部焼土痕跡を認めた。床面はほぼ水平を保つ。出土遺物から6世紀末～7世紀の年代観が得られる。検出した各住居跡は、風化花崗岩質の地山の性質上、遺存状況は悪い。出土遺物は各住居跡とも小破片の須恵器・土師器が大部分を占めているが、ほぼ6世紀末～7世紀に比定されるものであり、各堅穴式住居跡は古墳時代



第27図 第1・第4・第5 トレンチ平面図

後期に属するものである。

歴史時代 歴史時代の遺構は、東北～西南方向に延びる台地部分全域に分布していた。この台地は中央付近が谷状に窪むことから、大きく2地区に分けることができる。台地の北地区には第1・第4・第5トレンチを設け、南地区には第2・第3トレンチを設けた。北地区では奈良時代～鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡13棟・柵3条・土壇1基・溝・柱穴群を検出した。南地区では同一時期の掘立柱建物跡7棟・井戸1基・土壇1基・柱穴群を検出した。

掘立柱の建物・柵等に伴う柱穴群には方形プラン・円形プランの2形態がみられる。前者は奈良時代～平安時代後期、後者は平安時代後期～鎌倉時代にかけての年代観が共伴遺物から得られた。

SB01 調査地最北端F3区で検出した南北棟の建物跡である。建物は2間×2間以上の規模をもち、東側に廂を設けている。柱間心間間は桁行・梁間とも約1.8m等間である。廂部分は約1.5mを測る。柱穴掘形は一辺約60cmの方形プランをもつ。建物の主軸は北から東へ約30°振る。建物に伴う出土遺物には細片が多く年代確定には至っていない。

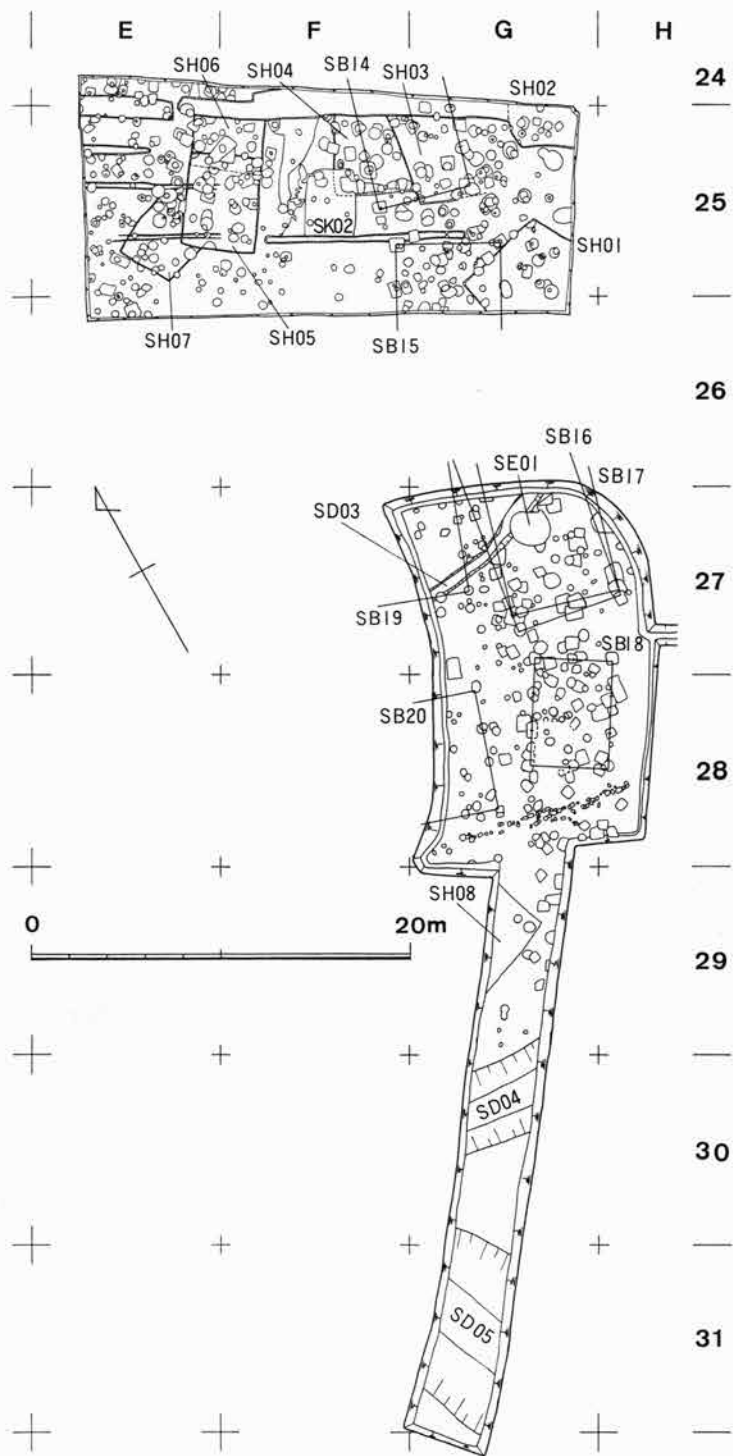
SB02 F5区で検出した東西棟の建物跡である。建物は2間×3間以上の規模をもつ。柱間心間間は桁行2.4m・梁間1.5mを測る。柱穴掘形は一辺約80cmの方形プランをもつ。建物主軸は西から北へ約30°振る。柱穴内の出土遺物には第31図62と同様の遺物の出土をみている。

SB03 F4区で検出した2間×2間の総柱建物跡である。建物の主軸は西から北へ約26°振る。柱間心間間は東西方向2.1m・南北方向1.8m等間を測る。柱穴掘形は一辺約70cm前後の方形プランをもつ例が多い。建物中央の柱穴内には拳大の礫を直径約40cmの範囲で入れていた。この礫群は根石とみることができよう。柱穴内から第31図64と同様の杯の出土をみている。

SB04 F4・F5区で検出した東西棟の建物跡である。建物は2間×3間以上の規模をもつとみられる。柱間心間間は桁行・梁間とも約2.4m等間を測る。柱穴は一辺約60cm前後の方形プランをもつものと、直径約60cm前後の円形プランをもつものが認められる。建物の主軸は西から北へ約27°振る。

SB05 E4区を中心に検出した2間×2間の総柱建物跡とみられるが、西端部の柱列を検出していない。柱間心間間は東西方向1.7mを測り、南北方向は2.1m等間であった。柱穴掘形は方形プランで一辺約50cm前後の規模をもつ。建物の軸線は東西方向から約45°振れている。時期決定できる遺物の出土はみられなかった。

SB06 F5区を中心に検出した2間×2間の総柱建物跡である。建物規模は3.4m×



第28図 第2・第3トレンチ平面図

4.0mを測る。柱穴掘形は一辺約60～80cmで方形プランを示すものが多い。建物の軸線はSB05と同様に各方位から45°振る。南端コーナー部の柱穴内に直径約30cmを測る柱根を残していた。柱穴内の出土遺物には平安時代前期に属する遺物の出土をみた。

SB07 F5区を中心に検出した2間×4間の規模をもつ南北棟の建物跡である。桁行8.4m・梁間4.6mの規模をもつ。柱穴掘形は隅丸方形および円形で、直径約40～50cmの規模をもつ。6か所の柱穴内には柱根の遺存が認められた。建物の主軸は北から東へ約28°振る。この建物は柱穴内の出土遺物からみて、平安時代後期～鎌倉時代にかけての時期に属するとみられる。

SB08 F9・F10区を中心に検出した2間×4間の東西棟の建物跡である。桁行約6.0m・梁間約3.6mの規模をもつ。柱穴掘形は一辺約60cmの方形プランをもつ例が多い。建物の主軸は西から北へ約20°振っている。柱穴内から土師器片の出土がみられたが、時期を決定するには至っていない。柱穴掘形の切り合い関係からSB09より新しく、SB11より古いことが判明している。

SB09 F10区で検出した1間×3間の規模をもつ建物跡である。桁行約4.2m・梁間約3.6mを測る。梁間筋は精査をくり返したが中央部での柱穴の検出はみられなかった。柱穴掘形は一辺約50～60cmの方形プランを示す。建物の主軸は北から東へ約40°振っている。SB08より古い建物跡であり、出土遺物からみて平安時代前期に属する建物跡である。

SB10 G11区で検出した建物跡である。梁間2間(3.0m)を測るが桁行は1間分1.5mしか検出していない。柱穴掘形は一辺約40～60cmで方形プランをもつ。建物の主軸はSB09の主軸に直交する。出土遺物からみてSB09と同様に平安時代前期に属する。

SB11 F10区で検出した2間×7間の南北棟の建物跡である。桁行約10.7m・梁間約4.5mの規模を測る。柱穴掘形は方形プランをもつが、一辺約40～50cmを測る小規模な柱穴が多い。建物の主軸は北から東へ約25°振っている。切り合い関係をもつSB08より古く、SB09より新しい時期に属する。平安時代中期頃の年代観を得ている。

SB12 SB11の南に隣接して存在する2間×3間の東西棟の建物跡とみられる。桁行約6.9mを測る。梁間は1間分(約2.0m)を検出した。柱穴掘形はSB11と同様に小規模な柱穴が多い。また建物の主軸もSB11と同一である。

SB13 F12区で検出した2間×3間の規模をもつ南北棟の建物跡である。桁行約6.6m・梁間約3.6mを測る。柱穴掘形は方形プランであり、一辺が40cmと70cm前後のものが混在する。建物の主軸はSB11と同様に北から東へ約25°振っている。柱穴内の遺物からみてこの建物は平安時代中期に属するとみられる。

SB14 第2トレンチF25区を中心に検出した南北棟の建物跡である。梁間2間(約4.9

m)・桁行2間分(約4.2m)を検出したのにとどまった。柱穴掘形は一辺約80cmと大形の方形プランをもち、深さも約60cm程度を測った。建物の主軸は北から東へ約16°振っている。柱穴掘形内の出土遺物には第31図69の須恵器碗の出土をみている。平安時代後期に属するとみられる。

SB15 F25・26区にかけて検出した総柱建物とみられる建物跡である。東西2間(5.6m)・南北1間分(2.4m)を検出した。柱穴掘形は方形プランで、一辺約60~80cmを測るものが多く、深さも60~70cmを測る。建物の軸線は西から北へ29°振っている。柱穴内の出土遺物は細片が多く時期の確定にいたっていないが、平安時代前期頃に相当するとみられる。

SB16 第3トレンチG27区を中心に検出した南北棟の建物跡である。桁行2間(6.6m)以上、梁間2間(5.4m)の建物規模をもつ。柱穴掘形は一辺約50~80cmの方形プランをもつ。SB17とはほぼ同一地点に存在するが、切り合い関係ではSB17より新しい。建物の主軸は北から東へ約8°振る。この建物は出土遺物からみて平安時代後期に入る頃の年代観が得られる。

SB17 SB16とはほぼ同一地点で検出した南北棟の建物跡である。建物規模はSB16と同規模であるが、主軸の方位はSB16より東へ約6°振る。この建物はSB16より古い建物であるが、時期的にはほぼ同一の年代観を得ている。

SB18 G28区で検出した南北棟の建物跡である。建物規模は2間×3間であり、桁行5.7m・梁間4.4mを測る。柱穴掘形は一辺約60cmで方形プランをもつ。5か所の柱穴内には直径約20~25cmの柱根が遺存していた。柱根のうち最も長いものは約60cmであった。建物の主軸は北から東へ32°振っている。この建物は出土遺物から平安時代初頭の年代観が得られる。

SB19 F27・F28区にかけて検出した南北棟の建物跡とみられる。建物の東南コーナーから桁行2間(4.7m)・梁間1間(約1.8m)分を検出した。柱穴掘形は円形プランで、直径約40cmを測る。建物の主軸は北から東へ約20°振る。平安時代後期の土器の出土をみている。

SB20 SB19の南西部F28・G28区で検出した南北棟の建物跡である。この建物は2間×3間の規模をもつとみられる。桁行3間(6.6m)を測るが、梁間は1間分(1.8m)を検出したのにとどまった。SB19とはほぼ同一規模を取っていると考えられる。建物の主軸はSB19と同じく北から東へ約20°振っている。

SA01 第4トレンチ北端部F6区で検出した東西方向の柵列である。柱穴掘形は一辺約50cmの方形プランを示す。柵列の軸線はSB02と同一方位を取り、両遺構は約8mの距離を保つ。また柵列は東西方向に延びるとみられ、西側延長部は第1トレンチ西側の丘陵南

柵を並走するものとみられる。柱間はほぼ2.7m等間を測る。

SA02 F7区で検出した柵列である。SA01の南約14m付近で並列状態で検出した。柱穴掘形は一辺70～90cmの方形プランをもち、検出した2間分の柱穴内には直径約40cm前後の柱根が遺存していた。この柱根は今回検出した数多くの柱根の中でも最大規模のもつものであり、建物に伴う柱とみられたが他の柱穴跡が認められないため柵列遺構と判断した。柱根心間間は2.1m等間を測った。

SA03 F12区で検出した東西方向に延びる柵列であり、6間分を検出している。柱穴掘形は一辺約40cm前後で、方形プランを示すものが多い。軸線は西から北へ29°振っている。柱穴掘形内の出土遺物は平安時代中頃の年代観を示している。

その他の柱穴 今回の調査では数百にのぼる柱穴を検出した。それらの柱穴は建物と柵列に伴うものが大半を占めると考えられる。柱穴掘形プランは方形・円形の2形態が認められる。方形プランをもつ柱穴は一辺約50cm前後を測るものが多いが、一辺約1m前後を示すものも存在する。調査地の中で柱穴跡は群を構成しており、F3区～F6区・F9区～F12区・E25区・G25区・G27区～G29区を中心に集中する傾向がみとれる。

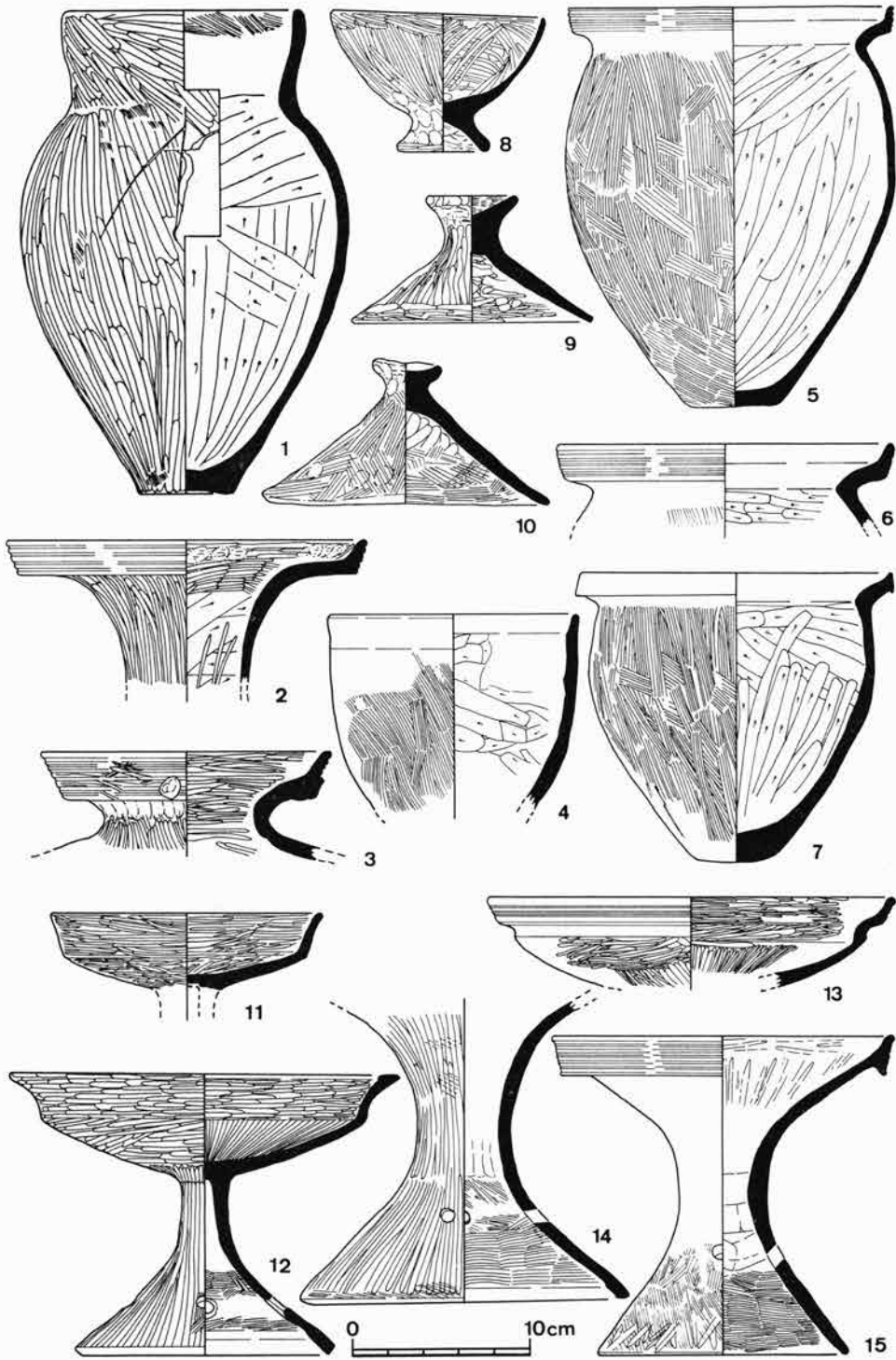
SE01 第3トレンチG27区で検出した井戸である。検出面では直径約2mの円形プランをもつ。井戸の深さは約1.2mを測り、底から上方約40cmまでは直径約1mの範囲でほぼ垂直に立ちあがる壁面をもつ。井戸内埋土中には人頭大～長径約70cm大までの花崗岩が混入していたことから、井戸の上部施設として石組みがあった可能性がある。それらの大型石に混って第30図33・34にみる土師器碗(11点)のほか、第31図35と同様な須恵器碗の出土をみている。平安時代中期に属する井戸と考えられる。

SD01 F8区で検出した平安時代後期～鎌倉時代の溝である。東北から西南方向に流れる幅約0.5～1m・深さ約20cmの浅い溝である。この溝に近接して支流とみられる幅約20～30cmの溝が数条存在している。この溝内からは黒色土器碗(第30図43)・下駄(第32図87)等の出土をみている。

SD03 第3トレンチG27区で検出した幅約80cm・深さ約30cmの溝である。溝内の出土遺物は少なく、土師器片が若干みられた程度であった。また溝内には拳大の礫が比較的多く認められた。地山層は花崗岩のバイラン土であることから、この礫は流れ込みによるものとみられ、流れの急な溝であったと判断される。出土遺物から平安時代後期の年代観が得られる。

SD04 第3トレンチG30区で検出した溝である。幅約4m・深さ約40cmを測る。出土遺物が認められず、時期を決定するに至っていない。

SK01 第4トレンチF8区で検出した一辺約2mの方形プランをもつ土坑であり、深さ



第29図 弥生土器実測図

1~3. 壺 4. 鉢 5~7. 甕 8. 台付鉢 9・10. 蓋 11~13. 高杯 14・15. 器台

は約10cm前後を測った。出土遺物には黒色土器・土師器・輸入陶磁器・木製品が認められ、平安時代後期の年代観が得られる。遺構検出段階では井戸とみられたが、坑底が浅く平坦であることから井戸の可能性は少ない。

SK02 第2トレンチF25区で検出した方形土坑である。一辺約2.8m×3.6mを測る。坑底は中央部が坑底周囲部分より深くなり、最も深い地点は検出面より約40cmの深さをもっていた。坑内から土師器碗の出土をみたが、出土遺物量は概して少量であった。埋土には比較的多量の灰が含まれていた。土坑に接する西北部分は周囲の地山面とは硬度が異なり、部分的に硬く締まっていた。地山面が焼けた状況は検出面にみられなかった。土坑内に多量の灰層がみられたことから、この地に何らかの工房的施設が存在した可能性が考えられるが、現段階では工房の存在を示す遺物の出土をみていない。出土した土師器碗の年代観から平安時代中期頃の土坑と考えられる。

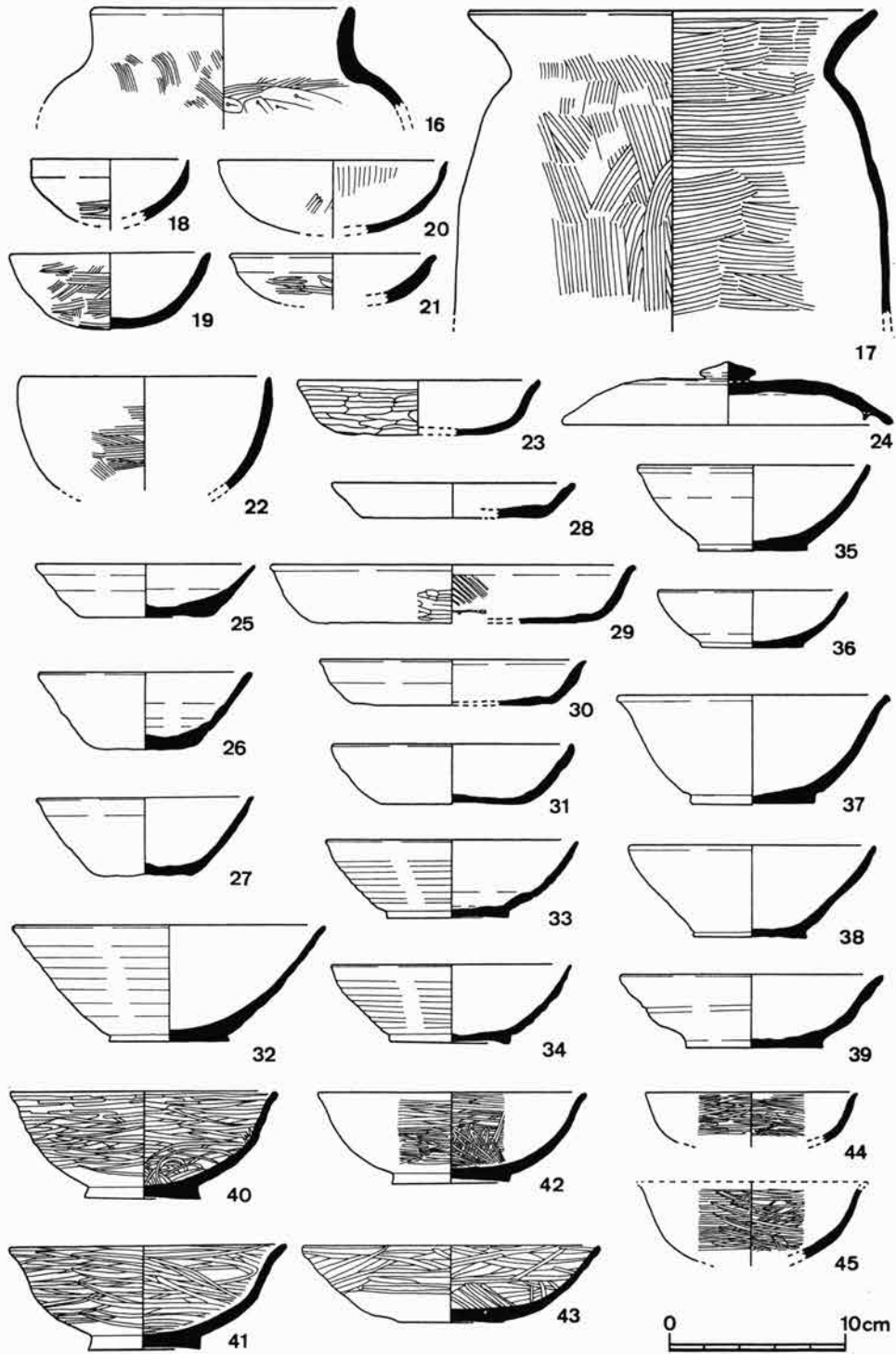
4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は縄文時代早期～鎌倉時代に属するものである。整理箱約50ケースが出土した。遺物は遺構の存在した台地上からの出土が大多数を占める。

縄文時代 第2トレンチの遺物包含層中から縄文早期に属する押型文土器が17点出土している。器壁は1cm前後の厚みをもち、色調は全体に暗茶褐色を呈する。体部外面に7mm前後の楕円押型文を施文している。器種は深鉢とみられる。

弥生時代 弥生時代後期の土器・木製品が台地の南端を流れるSD05から多量に出土した。弥生時代に属する遺物は台地の南端付近に集中し、他地区における出土はみられなかった。SD05内から土器・木製品に混って濃紺のガラス小玉1点が出土している。

弥生土器(第29図) SD01から出土したものであり各器種が認められる。壺(1～3)は精製品であり、外壁部分は丁寧にヘラミガキを行う。体部内面はヘラケズリを行う。1の長頸壺の肩部にヘラ記号が認められる。2・3は受口状口縁に擬凹線文を施す。3の口縁部には円形浮文が認められる。甕(5～7)のうち5・6は受口状口縁部外面に擬凹線を施す。体部外面はハケ目、内面はヘラケズリを行う。鉢(4・8)のうち台付鉢(8)は精製品であり、体部内外面とも丁寧にヘラミガキを行う。蓋(9・10)にも精製品(9)とそうでないもの(10)が認められ、壺の蓋とみられる9は内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。甕の蓋とみられる10は内外面とも粗いハケ目調整を行い、外面には多量のススが付着する。出土した甕の蓋にはススの付着状況に2様の変化が認められる。一部の蓋の口縁部内側にススが付着する例が認められることから、甕の受口部に納めるもの・口縁上に乗せたものの使用状況における2様が認められる。高杯(11～13)は精製品であり、杯部の内外面は特に



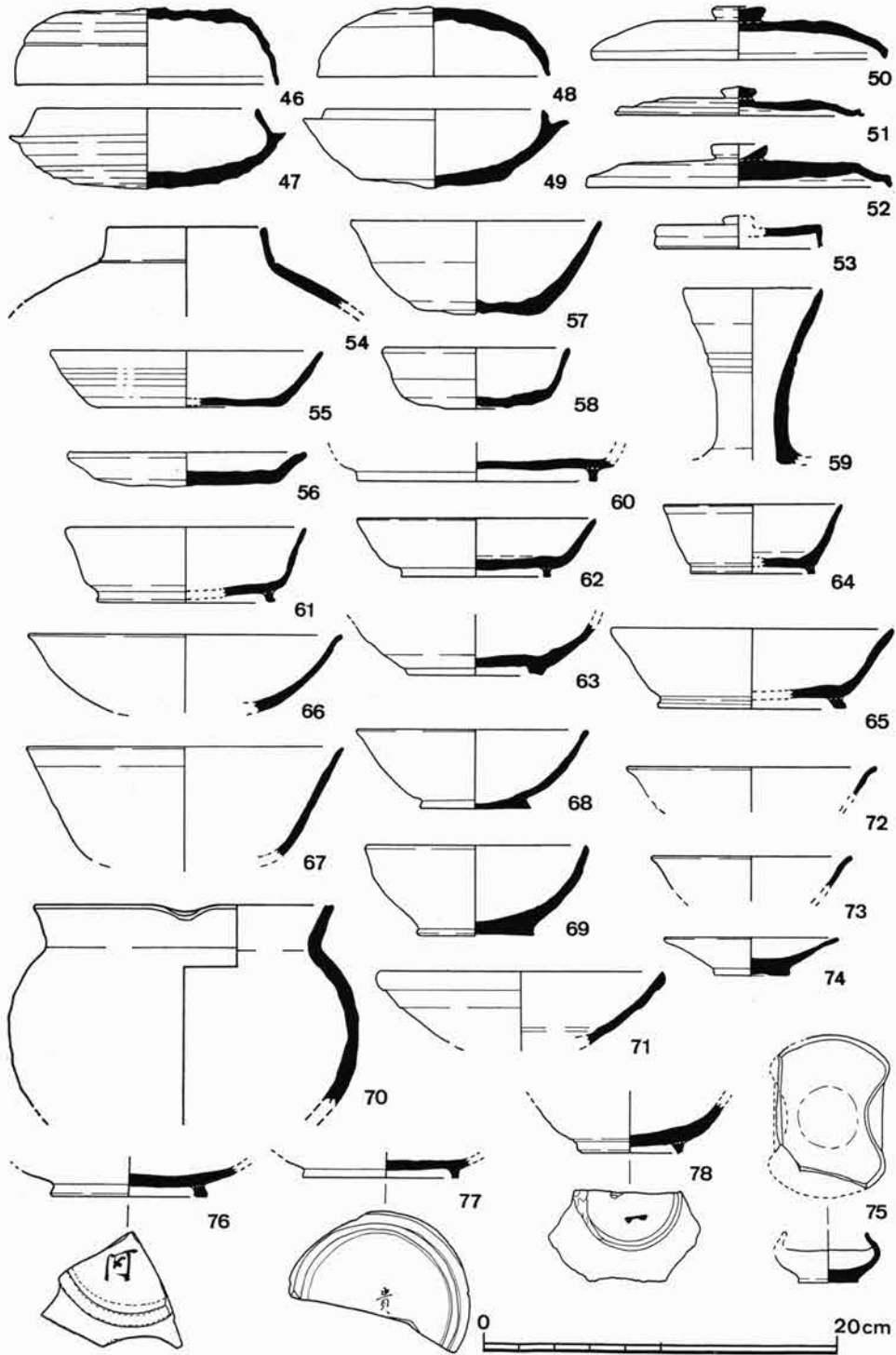
第30図 土師器・黒色土器実測図

16. 壺 17. 甕 18~22・25~27. 杯 23・29~31. 皿 24. 蓋 32~39. 碗 40~45. 黒色土器碗

緻密にヘラミガキを施す。口縁部の変化により大きく3形態が認められる。器台(14・15)にも精製品とそうでないものの2様が存在する。15の口縁部は下端を大きく垂下させ、幅広い施文帯部に擬凹線を施文する。器台にはこのほか、装飾的なスカシ孔をもつ装飾器台の存在も認められた。全器種を通じて精製品の焼成は堅く仕上げ、色調は淡褐黄色を呈している。

木製品(第32図79~86)はすべてSD05内から出土している。琴形木製品(79)は全長46.4cm・現存幅5.6cm・最大厚み1.1cmを測る。琴頭から7cm程度の琴幅中央部分に絃孔とみられる孔が存在する。琴尾には長さ3.3cm・幅2~1cm前後の突起が削り出される。琴表は平滑に仕上げられ、琴尾の突起は表裏両面とも特に丁寧に仕上げられる。琴尾の突起先端部は中央部に鋭い切り込みを入れている。現時点では3本の突起を残し、真中の突起部先端の切り込み部分には絃を掛けたとみられる痕跡が認められた。琴身は年輪の状態からみて琴頭が琴尾より幅が狭い形態をもっていたとみられる。琴身の現形は中央で縦方向に割れたとみれば琴尾の突起は6突起が復元でき、元来の琴は全長46.4cm・琴頭幅9cm・琴尾幅11cm前後を測るものと推定する。琴尾の突起基部琴表には一条の細線が切られている。この細線は突起の削り出し計画線とみられる。槽を取り付けたとみられる紐綴孔等が琴身にみられないことから、この琴は板作りの琴とみられる。舟形木製品(81・83)は両者とも丸木舟型(鑿節型)を呈する。81は全長38.1cm・幅7.3cmを測る。舟の前後両端を方形に1.5cm程度削り出し、それぞれ舳先・鱧を形作る。舳先・鱧とも紐等を通したとみられる一対の小円孔を穿っている。舟底は弓状に強い円弧を描く。83は現存長14.9cm・幅2.6cmと小型である。舟底は直線形を取るが、舳先・鱧は81と同様な加工を行う。有頭木製品(82)は全長21.9cm・頭部直径7.7cmを測る。棒状部は幅2.5cm前後で方柱状を呈し、先端は尖りぎみに終る。頭部から2.0cm程のところ長さに2.8cm・幅1.2cm前後の方形孔を穿つ。頭部は丁寧に面取りを行う。板状木製品(84)は楕円形の扁平な板であり、杓子様製品の一部とみられる。匙形木製品(85)は全長15.1cm・匙部幅3.2cmを測る。匙部は丁寧に加工が施され、中央に方形のくり込みと両端部に大きな切り込みを加えている。80は円筒形容器の一部とみられる。器壁の厚みは1.1cm・現存長16.3cmを測る。円弧の状態から、直径18cm前後の容器が復元できる。上端から2.9cm程下がった内面に階段状の受け部を削り出す。盤(86)は全長36.7cm・深さ6.1cmの規模を測る。底部幅は5.2cm程度と狭く、口縁部が外上方へ強く開く器形をとる。平面は長方形を呈するが横断面は逆台形状をなす。

古墳時代遺物(第30図16, 第31図46~49) 第2・第5トレンチを中心に出土がみられたほか、他の地区でも若干の出土をみる。堅穴式住居跡と古墳からの出土が中心であるが、多くは細片であり、数も少ない。出土遺物には土師器の壺・甕、須恵器の杯身・杯蓋・壺



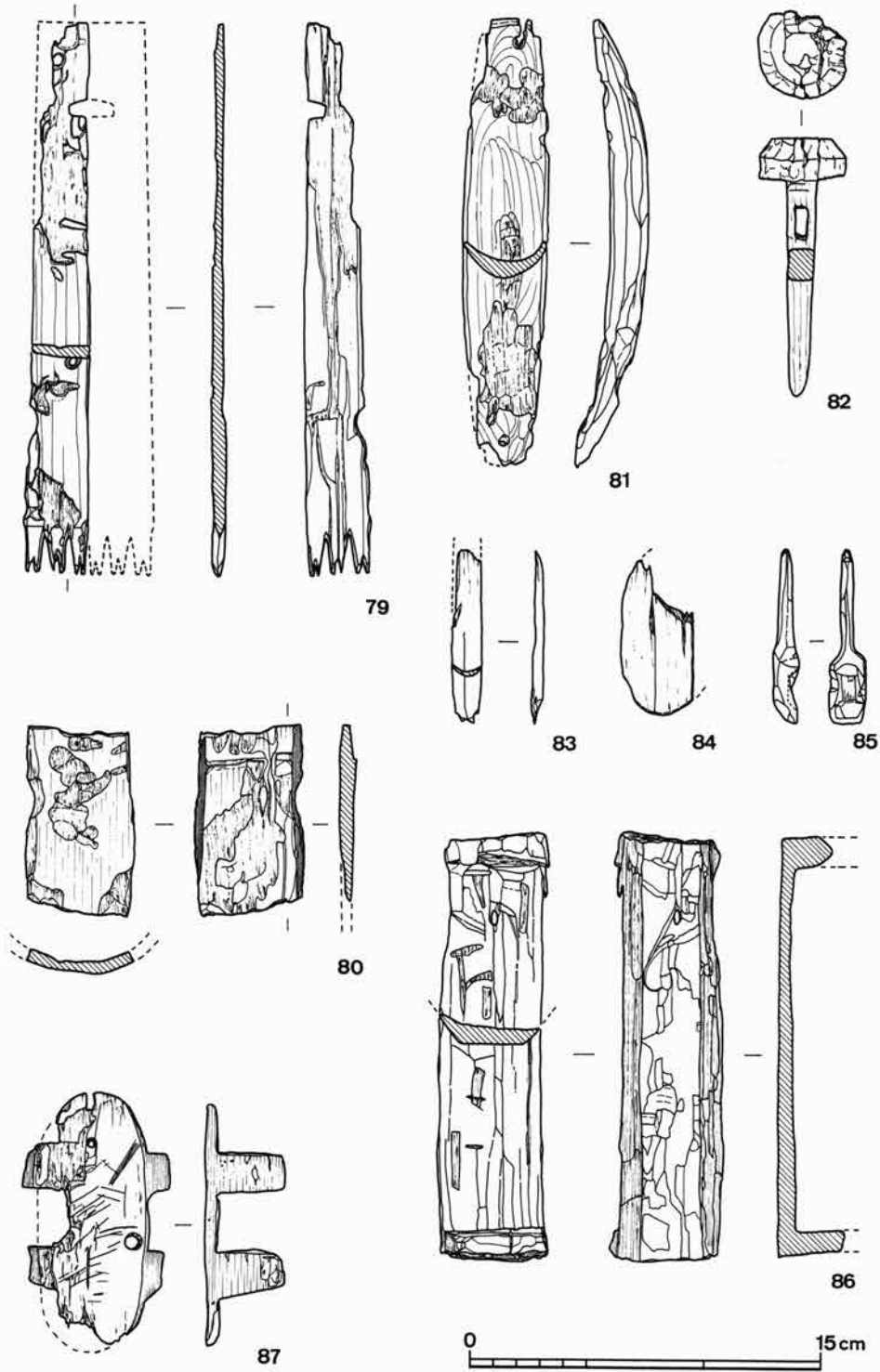
第31図 須恵器・施釉陶磁器実測図

46・48. 杯蓋 47・49. 杯身 50~53. 蓋 54. 直口壺 55~58・60~65・76~78. 杯 59. 長頸壺
66・67. 灰釉碗 68・69. 碗 70. 鉢 71. 白磁碗 72・73. 緑釉碗 74・75. 緑釉耳皿

などがある。また、古墳の周辺より管玉の出土をみている。土師器直口壺(16)はSH03出土である。須恵器杯身(47)と杯蓋(46)は古墳の埋葬主体部内からの出土である。その他、古墳の周溝内からの須恵器壺・土師器甕も出土している。6世紀中葉に比定されるものである。

奈良時代遺物(第30図17~24, 第31図50~62, 76・77) 土師器・須恵器が出土している。土師器には杯(18~22・25~27)・甕(17)・蓋(24)・皿(23・29)がある。杯は丸底であり、21を除きすべて丹塗土師器である。18・19・22は外面がハケ目調整, 内面はナデ仕上げを行う。20・21は外面をヘラミガキするが, 20では内面に放射状の暗文が認められる。甕(17)は長胴型の甕である。「く」字形の口縁をもち, 内外両面ともハケ目調整を行う。蓋(24)は深い身の口縁部内側に返りをもち, 宝珠つまみをつけるものである。皿(23)は口縁端部をやや外反させ, 外面はヘラミガキを行う。須恵器には蓋(50・51)・壺(54・59)・杯(55~58・60~62・76・77)が出土している。蓋は扁平つまみをもつもの(50)と宝珠つまみのもの(51)があり, 51の内面はよく磨かれていることから転用硯とみられる。壺には長頸壺(59)と短頸壺(54)の2種類が認められる。短頸壺に対し長頸壺の出土が量的に多い傾向を示す。杯には高台を有するものと平底のものが認められる。高台をもつものは全体的に高台のしっかりしたものが多く, 口縁部と底部の境が比較的明瞭なものが多い。76・77は底部内面に墨書を有するもので, 76は「阿」・77は「貴」と判読できる。また, 高台底部内面が磨かれた例や墨痕が認められる例もあり, それらは転用硯とみられる。転用硯は5点が出土している。

平安時代遺物(第30図29~45, 第31図63~75・78・79) 台地上全域の調査地からの出土が認められる。土師器・須恵器・施釉陶器・黒色土器・輸入陶器・石製品・木製品が出土している。土師器には杯(25~27)・皿(28~31)・碗(32~39)・黒色土器(40~45)等が出土している。杯(25~27)はヘラ切りによる平底をもち, 色調は淡灰黄色を呈する。26・27は底部から口縁にかけてまっすぐたちあがり, 深い身をもつ。平安時代前期に比定されるものであり, 26はSB04柱穴掘形内出土である。皿(28~31)は胎土は比較的精良で, 色調は淡褐色系のものが多い。29は外面ヘラミガキ・内面には暗文が認められる。平安時代初頭に属し, SB06柱穴内からの出土である。28は平安時代前期, 30・31は平安時代後期後半の年代観を得る。土師器碗(32~39)はすべて糸切り痕を残す平高台をもつ。32は胎土・焼成とも特に良好な碗である。色調は淡橙褐色を呈する。ほぼ9世紀中葉に比定される。33・34はG27区SE01内出土のものである。底部から口縁にかけて丸みをもってたちあがる身部外面には, ロクロ回転による明瞭な稜が多数認められる。色調は淡褐黄色を呈する。井戸内から同一碗は約11点が出土した。ほぼ10世紀代に比定されよう。37はG27区SB16柱



第32図 木器実測図

穴内出土であり、11世紀代に比定される碗である。39はE25区柱穴内出土の碗で白磁碗(71)と共伴している。12世紀代の年代観を得る。糸切り痕を底部にもつ黒色土器碗(40～45)のうち40～43は内面のみ黒色化する。小型碗(44・45)は内外面とも黒色化する。40・41は体部中央に弱い稜を認め、身の深い器形をもつ。焼成は土師質で橙褐色を呈する。内外面のヘラミガキは緻密に施す。43は口径17.0cmと大きく、浅い身の器形をもつ。ヘラミガキは内外面とも粗くなり、焼成は瓦質に近くなる。底部は平底となる。40・41は11世紀前半代、42・44・45は11世紀後半代、43は12世紀代の年代観をもつ。43の体部外面には判読不明の墨書が認められる(図版第20)。この碗はF8区のSD01から出土している。須恵器杯(63～65・78)は底部と体部の境に輪高台を付ける。焼成は一般に良好である。78の底部外面に「一」の字の墨書をもつ。灰釉陶器碗(66・67)の出土をみている。器壁は薄く内湾ぎみにたちあがる66は、口縁端部を小さく外反させる。深い身をなす67は体部が直線的に外上方へたちあがる。須恵器碗(68・69)は平高台の碗であり、底部には糸切り痕を残す。68の平高台は端部が強く外方に張り出し、内湾ぎみの口縁端部は丸く終わる。69は68より器面全体が粗い仕上げとなり、器壁も厚みを増す。70は片口をもつ須恵器鉢である。白磁碗(71)は土師器碗(39)と共伴したものである。緑釉碗(72・73)・緑釉皿(74・75)の出土もみている。碗(72・73)は口縁端部を小さく外反させるものである。緑釉碗には須恵質と土師質の焼成をもつものが認められる。75は耳皿である。糸切り痕を残す平高台をもつ。外底面を除き、内外両面に黄緑色の施釉を行う。74も耳皿とみられるが、耳部分を欠いている。74・75とも第3トレンチH26区のピット内からの出土である。

木製品として平安時代後期～鎌倉時代に属する下駄(第32図87)が出土している。黒色土器碗(43)と共にSD01からの出土である。表面は長さ21.5cm・幅約9cmを測り、平面形は楕円形を呈する。鼻緒孔は前歯に接して中央付近に穿たれている。長期間の使用があったとみられ、指頭による磨耗痕から、この下駄は右足用であったとみられる。表面には細かい直線状の切り痕が多数認められる。

今回の調査では特殊な遺物として石帯のうち巡方が1点出土している(図版第22)。一辺約5cm(表面では一辺約4.6cm)・厚さ約5mmを測る。裏面の各コーナー付近に2孔一對の紐綴り孔を設ける。

5. ま と め

今回の発掘調査では、正垣遺跡の一部を調査したにもかかわらず、多数の成果を得ることができた。正垣遺跡は当初、奈良時代に属する遺跡とみられていたが、縄文時代早期～鎌倉時代にかけての集落跡であることが判明した。正垣遺跡の東北約1kmの対岸台地上に

は、縄文時代早期、弥生時代後期の遺物・遺構の出土に代表される裏陰遺跡（縄文時代早期～平安時代）が存在する。正垣遺跡も裏陰遺跡と同一時期に営まれていた集落であり、両遺跡は遺構・遺物の内容および立地等から、相互に密接な関係をもっていたものと判断される。正垣遺跡の調査で出土した縄文時代早期の押型文土器は、裏陰遺跡出土の押型文土器と胎土・焼成とも同一であることが判明した。正垣遺跡、裏陰遺跡とも遺構の検出をみていないが、土器片に磨滅等がみられないことから、互いに流入したものは考えられず、これらの台地上が生活の場であったことが十分予想される。正垣遺跡は縄文時代早期の後、後期段階でも一時的集落が営まれた可能性が残るが、出土した縄文土器片は少量であったことから、現段階では推定するのにとどまった。

正垣遺跡では縄文時代以降、弥生時代後期に入るまでの空白の時期が続く。弥生時代後期に入ると、台地の南端部付近に集落が営まれたとみられ、竪穴式住居跡1基（SH08）を検出した。住居跡の南約12m付近、遺跡の立地する台地の南端を流れる水路（SD05）は住居跡と同一時期のものであり、水路内には多量の土器（畿内第Ⅴ様式）とともに木器・ガラス小玉等豊富な遺物を包含していた。出土した弥生土器は山陰系とされる受口状口縁部に擬凹線を施文する土器が多数みられる。この擬凹線文をもつ土器は丹後地方の弥生時代後期遺跡で多数認められるものであり、裏陰遺跡でも多量の出土をみている。正垣遺跡の土器は形態・施文の点からみて裏陰遺跡出土の土器よりやや古式に属しているものと判断する。土器とともに出土した木製品は比較的少量であったが、琴形木製品と判断される木製品の出土をみている。現在、全国的にみて琴の出土は限られており、10数例の出土が知られているだけである。これらの琴のうち古式に属する弥生時代の琴は大阪府巨摩庵寺遺跡から中期に属する琴が出土している。後期に入ると静岡県登呂遺跡^(注10)・福岡県辻田遺跡^(注11)（4例）から出土がみられ、正垣遺跡出土の琴形はこれに続くものである。正垣遺跡出土の琴形は巨摩庵寺遺跡例とともに現在最も古式段階の琴とみられているものである。

続く古墳時代では後期段階に入り集落が形成される。古墳時代後期に属する竪穴式住居跡7基はすべて方形プランをもち、カマド等の施設は築かれていない。住居跡内の出土遺物の中に移動式カマドの破片が少量みられたことから、各住居跡ではこれらの移動式カマドが使用されていたものと判断する。また、台地中央部のC12区付近の畑部分で直径15mの円墳を立会調査で検出したことは幸運であった。工事着手前の現地踏査では墳丘は削平され、古墳は耕作土の下に埋没していた。背後の丘陵上には3基の古墳が存在しているだけであったが、台地の平坦部にも古墳が存在したことが明らかになった。新検出の古墳の周辺部にも他の古墳が存在した可能性が残るが、その後の立会調査では確認できなかった。

今回の正垣遺跡の発掘調査で代表される遺構は奈良時代～平安時代後期・鎌倉時代初頭

頃にかけての掘立柱建物跡群である。掘立柱建物跡群には建物跡16棟・総柱建物跡4棟が認められる。検出した掘立柱建物跡群は台地全域に分布している。台地は50m前後の幅をもち、全長は約300mを測る狭長な台地である。台地の長軸は北から東へ30°前後振っている。台地は21～23地区にかけて谷状の窪地が現地地形に現われ、試掘調査(G4・G14)でも遺構・遺物の検出をみていない。この窪地を挟む南北2か所の台地上に掘立柱建物跡群が存在していた。北部台地上ではF3～F6区・G10～G13区の地区に掘立柱建物跡群の集中がみられ、中間部では柵列と溝が存在するだけで建物の配置は全時期を通じて認められない。南部台地上では全域で柱穴跡の密集をみていることから、今回の調査では大きく3か所に分散して建物が配置されていたものと判断する。

検出した掘立柱建物跡群は柱穴内から出土した遺物の年代観から、奈良時代～平安時代初頭(I期)・平安時代前期(II期)・平安時代中期(III期)・平安時代後期～鎌倉時代初頭(IV期)に時代区分できる。第I期に属する建物跡はSB01・02・15・18の4棟、第II期はSB05・06・09・10の4棟、第III期はSB03・04・11・12・13の5棟、第IV期はSB07・08・14・16・17・19・20の7棟である。柵列はその主軸の方向性・出土遺物からみて、SA01・02が第I期に、SA03が第II期にそれぞれ属するものと判断する。検出した柱穴群(建物に伴う柱穴を含む)のうち、半数を越える柱穴は方形プランをもっていた。丹後地域における調査で検出する柱穴は円形プランを示す例が多く、方形プランをもつ柱穴の存在は特異な事例とみられよう。

検出した掘立柱建物跡には建物跡と総柱建物跡がみられる。建物跡には全容は不明であるが、片面に廂をもつ中心的建物(SB01)が存在する。総柱建物跡は倉庫跡とみられ、柱穴掘形もしっかりしたものが多く、各掘立柱建物跡の他には、柵列の検出もみられ、柵列は各掘立柱建物跡群を画する施設であったとみられる。掘立柱建物跡群の方位は各時期でほぼ一定する傾向がみてとれる。掘立柱建物跡の規模は概して小規模の柱間間隔を取っているが、柱間寸法は5～7尺など完数尺をとるものが多い。

出土遺物のうち大部分を占める遺物は、奈良時代～平安時代に属する土器である。土器には須恵器・土師器・施釉陶器等が認められ、器種構成は甕・壺等の調理・貯蔵用土器が少なく、食器類(杯・碗・皿等)の供膳用土器の出土が多数みられる。また、灰釉・緑釉・白磁等の貴重な陶磁器類も他遺跡に比べ多数出土している。土器の中には墨書土器・転用硯等の文字関係の遺物の出土も多い。また、特殊な遺物として、役人を象徴する革帯を飾る石帯の出土もみている。このように、正垣遺跡の調査で判明した遺構・遺物の内容は、この地に地方官衙的施設が存在した可能性を高めた。

遺跡の立地する台地には「正垣」の小字名が残る。中世の文献である『丹後国田数帳』

には、遺跡の所在する奥大野地区を「倉垣庄」の地と記されている。倉垣庄に関しては、どのような性格をもつ荘園であったか不明な点が多いが、この地区における最古の名称を残すものである。従来から官衙施設が存在した地にはそれらの施設に関連する地名が残る場合が多い。「正垣」・「倉垣」の名称は、中世以前の段階までさかのぼることはできないが、官衙の施設の存在を思わせる地名のうちの一つである。古代においては、この地は『和名抄』にみる丹後国丹波郡大野郷に比定されていることから、今回の調査で検出した掘立柱建物跡群は、この大野郷に置かれていた地方官衙の施設であった可能性が高い。

(竹原一彦)

(2) 谷 内 遺 跡

1. 調 査 経 過

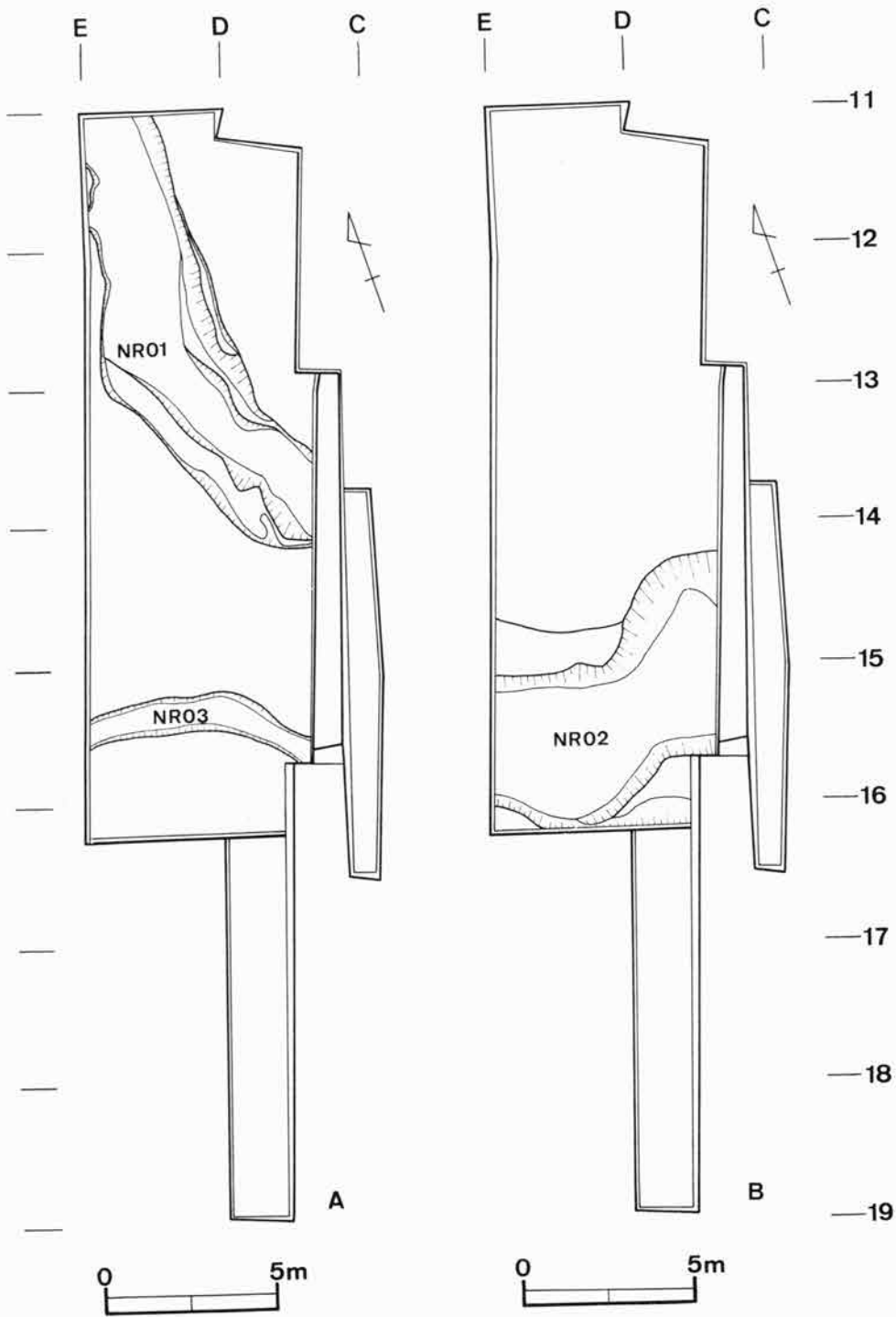
当地は、竹野川右岸の低位丘陵間に形成された扇状地上の水田である。昭和60年度の立会調査において、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての多量の土器が出土した所であり、調査前はこうした時代の集落の存在が予想された。今回の調査は、昭和60年度に引き続き、当地における京都府営ほ場整備事業に伴う調査である。

調査は掘削に先立ち、まず地区割りをを行った。軸方向を、事業終了後の改変を予想し、この事業で完成した水路方向にあわせ、一辺4mごとの方眼に地区割りをした。調査地は扇状地であるため、複雑な土層の堆積状況を示していることが予想された。そこで、調査は、幅約1m・長さ約11mの試掘トレンチを設定し、層序の観察を行った。その結果、溝状の遺構が3条存在することが判明したので、調査地を溝状遺構上面まで掘り広げ、本格的に調査を開始した。

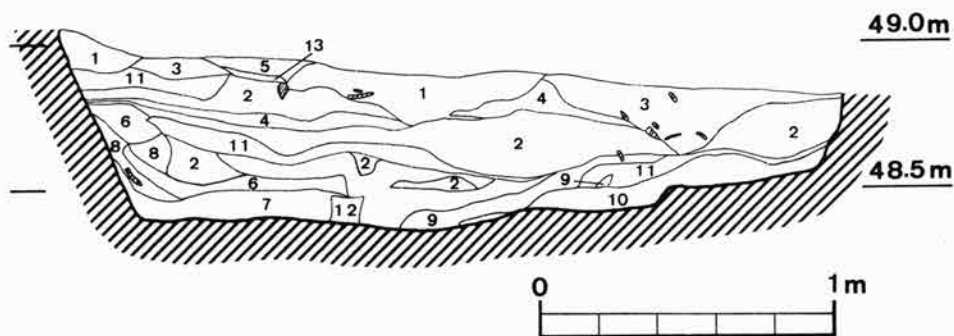
調査の結果、住居跡等の遺構は検出されなかったものの、自然流路が3条検出された。

2. 検 出 遺 構(第33図)

自然流路NR01 幅約1.5m・深さ約0.5mを測る自然流路である。南東から北西へと流れていたもので、流路内からは、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が多量に出土した。土層は、11層に細分が可能と考えられる(第34図)が、大まかに5層に分けて考えたい。黒褐色土層・濁淡茶褐色砂礫層・暗黄褐色砂礫層・黄褐色砂礫層・黒褐色粘質土層の5層である。特に黒褐色粘質土層中からは、土器のほかに木製品や植物遺体が出土した。木製品の中には、木製穂摘み具が1点含まれており注目される。加えて、稲稈等と推定される種



第33図 検出遺構図(A;上層 B;下層)



第34図 自然流路NR01断面図

1. 黒褐色土 2. 暗黄褐色砂礫 3. 濁淡茶褐色砂礫 4. 暗黄灰色砂質土 5. 暗灰色シルト
 6. 黄褐色砂質土 7. 黒灰色粘質土 8. 淡黒灰色粘質土 9. 黒褐色粘質土 10. 乳白色砂礫
 11. 暗灰色粘質土 12. 暗黄褐色砂質土 13. 乳白色砂質土

子部を含む茎等の植物遺体が幅1.5m・長さ3mの範囲に堆積していたが、これらは、当時の環境を知る上でも貴重な資料といえる。

自然流路NR02 幅6m前後・深さ約1.3mの自然流路である。流路内からは、縄文土器、弥生土器の細片が数片出土したほか、自然木が出土した。中でも、樹種の同定は行っていないので不明であるが、流路南岸で出土した径約1mの木株は、ほぼ立っていた位置に近い状況と考えられる。

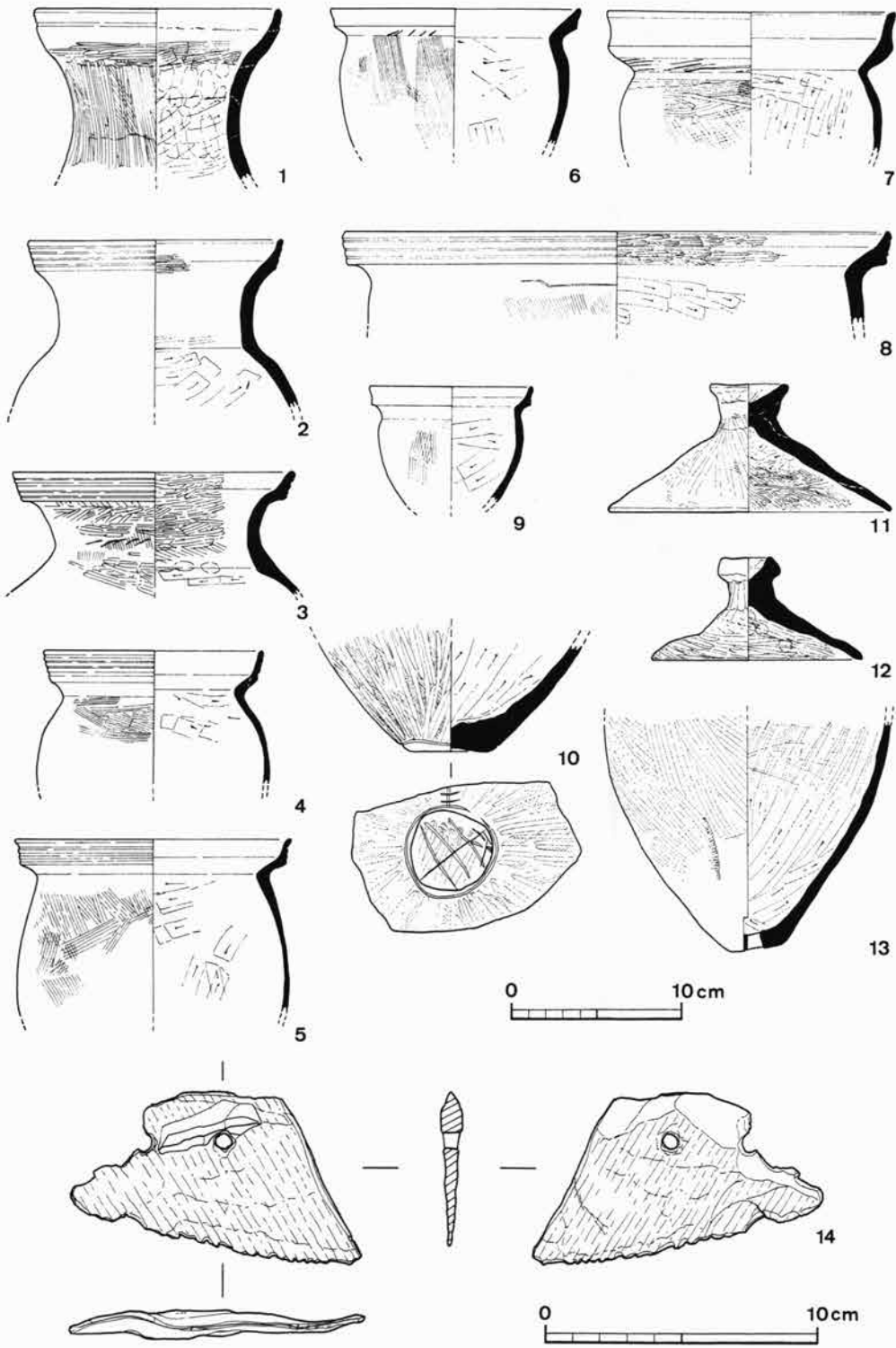
自然流路NR03 幅0.5m・深さ0.4mを測る。NR02が埋まった後に、NR02に重なるように流れた自然流路である。流路には粗い砂のみが堆積していたが、これはNR03が急な流れで短時間に埋まったことを推察させる。流路内から遺物等は全く出土しなかったので時代は不明であるが、土層の切り合い状況から流路中最も新しいことが確認された。

3. 出土遺物

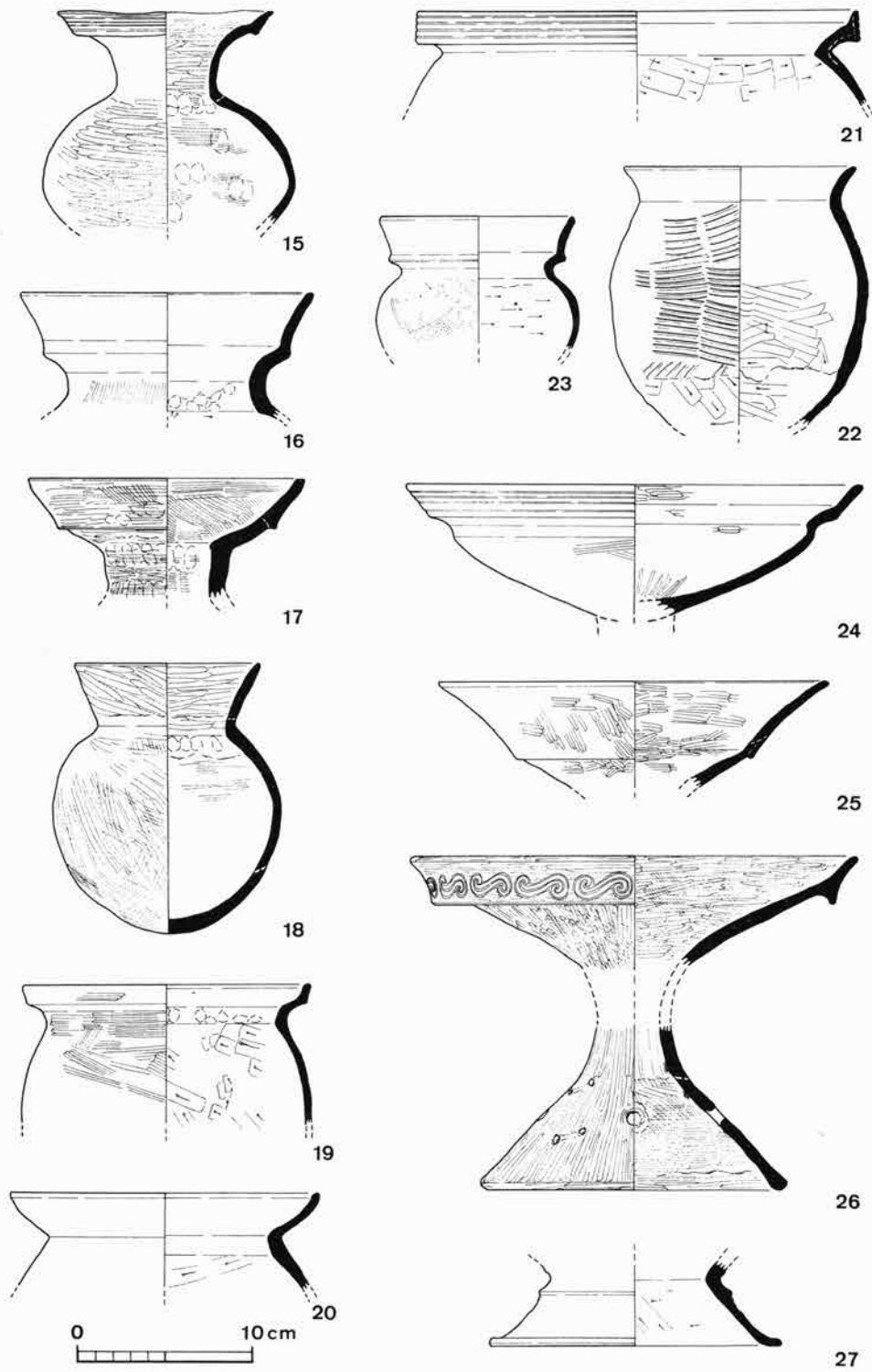
今回の調査で出土した遺物は、整理箱約50であるが、そのほとんどが弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物である。遺物の大部分は土器であるが、その他、木製品、石製品等がある。今回は、特に遺物の多いNR01を中心に報告することにする。NR01は、大まかに5層に分けて考えることは先に述べたが、ここで報告するもの(第35・36図)は、暗黄褐色砂礫層・黒褐色粘質土層より出土したもののみである。

1. 黒褐色粘質土層出土遺物(第35図)

1～3は、壺形土器である。1は筒状の頸部から内湾気味に口縁部に至るものである。口縁端部に沈線をめぐらす。2・3は筒状の頸部から内湾気味にのびる口縁部を持ち、口縁端部を上方に拡張するものである。口縁端部には擬凹線が施されている。1～3はすべ



第35図 遺物実測図(黒褐色粘質土層出土遺物)



第36圖 遺物実測図(暗黄褐色砂礫層出土遺物)

て、外面には丁寧なヘラミガキが施されている。

4～9は、甕形土器である。「く」の字に外反する口頸部を有し、口縁端部を拡張するものである。4・5・8は口縁端部に擬凹線を有し、外面はハケ調整、内面はヘラ削りである。6・7・9は口縁部に擬凹線を有さないものである。6は、口縁部外面にナデによる面を持つ。外面はハケ調整、内面は、頸部以下をヘラ削りする。7は、擬凹線を施さない二重口縁の甕である。

10は、外面をハケ調整の後にヘラミガキした土器(壺?)の底部である。底面にヘラ記号文を有している。

11・12は蓋形土器である。内外面ともヘラミガキされている。

13は木製穂摘み具である。^(注12)残存長10.8cm・幅5.7cm・厚さ1cmを測る。柁目板を平行四辺形に木取りしたものである。刃部は、鋸歯状を呈しているが、これは使用の際に歯こぼれしたあとと考えられる。背部には紐通孔が2孔穿たれている。2孔間は2.8cmを測る。樹種にかんしては、同定しておらず不明である。

2. 暗黄褐色砂礫層出土遺物(第36図)

15～18・22は壺形土器である。15は、外反気味に立ち上がる頸部が鋭く屈曲して外反する口縁部に至るものである。口縁端部に擬凹線を施す。16・17は、口縁が2段に外反する二重口縁壺である。18は外上方に直線的に延びる口縁部を有するものである。外面が不定方向にハケ調整された壺である。

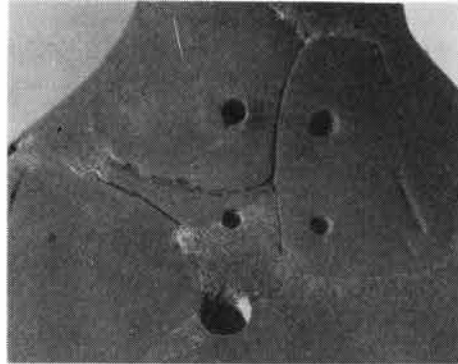
23は二重口縁の小型丸底壺である。

19～22は甕形土器である。19・21は頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部を上方に拡張したものである。19は口縁端部に擬凹線を有するが、21は口縁端部がナデ仕上げである。22はやや外反気味ではあるが「く」の字の口縁を有する。外面はタタキが施され、内面はヘラ削りである。20は、「く」の字状に外反する口縁部の端部内面を肥厚させる、いわゆる布留式甕である。

24・25は高杯形土器の杯部である。24は体部がゆるやかに立ち上がり、短く屈曲して口



第37図 スタンプ文



第38図 補修孔

縁端部に至るもので、擬凹線を有する。25は斜め上方にひらいた体部が屈曲して稜をなし外上方に真っすぐのびて口縁部にいたるものである。

26・27は器台形土器である。26は大きく外上方にのびる受部を持つもので、口縁端部を拡張したものである。口縁端部にはS字状渦文が施されている(第37図)。

これらは、形状、大きさなどが同一であることから「スタンプ」状の原体で施文されたものと推定される。こうした施文土器は、橋爪遺跡^(注13)・青野遺跡^(注14)・石本遺跡^(注15)などで知られている。脚部は「ハ」の字にひらくもので、径約9mmの円孔を4方に有すると推定される。その他、径3～5mmの円孔が、残存している物で9個、対にして穿孔してある。円孔を観察すると紐ずれ痕らしきものもみられ、紐等を使って割れたのを修復した補修孔とも考えられる(第38図)。杯部は内外面とも、脚部は外面が丁寧なヘラミガキである。

27はいわゆる山陰地方通有の鼓型器台である。

以上、遺物の概要について簡単に述べた。遺物としては、弥生時代後期～古墳時代前期の土器のほか、縄文土器片、木器類、石器類、玉類がある。土器類は、扇状地の資料であったので比較的状态の良いものが多い。特に、NR01から出土したものは、層位的に確認できたもので、今後資料整理を進めるなかで貴重な指標となる遺物である。現段階でいうならば、黒褐色粘質土層出土の土器類は、一つの傾向があるように思われる。それは、口縁に擬凹線を有するものや壺の平底底部など、弥生時代後期的な土器と、擬凹線を有さない土器が混在するという様相である。こうした様相は、これまで指摘されたように弥生時代^(注16)から古墳時代への過渡的な状況を示していると思われる。

木器類は、木製穂摘み具、板状木製品のほか目立ったものはない。しかし、木製穂摘み具は、全国的にも20数か所の遺跡で知られるだけの貴重な資料である。本例は、実際の使用が推定される資料であり、今後遺存しにくい木器が実際果たした役割といった面も考慮しなければならないことを示すものではないであろうか。

石器類、玉類は、全体的に少ない。石器類は、砥石など数点であり、玉類は、管玉が1点出土したのみである。

4. ま と め

今回の調査においては、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺物を豊富に包含する自然流路1条のほか計3条の自然流路を検出した。住居跡等集落に直接かかわる遺構は検出されなかったが、これらの豊富な遺物から考えて、近隣にこの時代の集落跡が存在することは確実であるといえる。

丹後地域において、弥生時代後期～古墳時代前期に属する遺跡は、久美浜町橋爪遺跡^(注18)、

峰山町古殿遺跡^(注19)、大宮町裏陰遺跡^(注20)などが知られる。本遺跡もこうした時期に属するものである。これらの遺跡は、当地域の弥生時代～古墳時代を知る上で欠くことのない遺跡であり、豊富な出土遺物を有する点でも同様である。今回の調査によって、また一つ貴重な資料を付け加えたことになる。

また、当地周辺では、正垣遺跡^(注21)、有明遺跡^(注22)、裏陰遺跡^(注23)など、谷内遺跡が立地するような小さな谷ごとに同様な時代の集落跡^(注24)が知られる。このように、この時代においては、当地では谷ごとに集落が点在したとも考えられ興味深い。

加えて、今回の調査では、縄文土器が出土しており、裏陰遺跡^(注25)に加えてまた一つ当地での縄文遺跡の分布を広げたことになる。(藤原敏晃)

注1 丹後町教育委員会編『丹後竹野遺跡』1983

注2 釋 龍雄他『扇谷遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1975

田中光浩『扇谷遺跡発掘調査概要』峰山町教育委員会 1983

田中光浩『扇谷遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1983

注3 釋 龍雄『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1975

注4 田中光浩・林 和廣『七尾遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1982

注5 平良泰久他「古殿遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1978

戸原和人「古殿遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983

注6 杉原和雄他「裏陰遺跡調査概報」(『大宮町文化財調査報告』第1集 大宮町教育委員会) 1979. 3

注7 注6に所収

注8 大宮町教育委員会編『大谷古墳現地説明会資料』1986

注9 『巨摩・瓜生堂』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1982

注10 日本考古学協会編『登呂・本編』日本考古学協会 1954

注11 井上裕弘他「辻田遺跡の調査」(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第12集 福岡県教育委員会) 1979

注12 藤原敏晃「谷内遺跡出土の木製穂摘具について」(『京都府埋蔵文化財情報』第22号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

注13 石井清司他「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1982-1)』京都府教育委員会) 1981

注14 田代 弘「青野遺跡出土の渦巻文のある土器」(『京都府埋蔵文化財情報』第20号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986. 6

注15 田代 弘「石本遺跡出土の渦巻文のある弥生土器について」(『京都府埋蔵文化財情報』第21号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986. 9

注16 石井清司「丹後地域・編年案」(『シンポジウム「月影式」土器について報告編』石川考古学研究会) 1986. 9

注17 工楽善通「木製穂摘具」(『弥生文化の研究5』雄山閣) 1985. 10

注18 注2に同じ

注19 注5に同じ

注20 注6に同じ。

注21 竹原一彦「正垣遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第20号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986. 6

注22 増田孝彦「有明古墳群・横穴群について」(『京都府埋蔵文化財情報』第21号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986. 9

注23 注9に同じ

注24 有明遺跡の竪穴式住居跡は、時代については不明であるが、方形の平面プランと考えられ、古墳時代以降であるのかもしれない。

注25 注19に同じ。

結 語

近年、丹後地域の各地で実施されている府営ほ場整備事業に伴う多数の遺跡調査は、丹後の歴史を考える上で数々の貴重な成果をもたらせている。今回の調査は当調査研究センターが初めて実施した府営ほ場整備関係の調査であったが、当初の予想を超える成果を得ることができた。正垣遺跡の調査では縄文時代早期から鎌倉時代初頭にかけての集落跡を検出し、歴史的に空白の時期であった奈良時代～平安時代の集落跡の良好な資料を得ることができた。検出した建物群は官衙的性格が強いものであることから、律令制下における丹後の地方行政組織を考えていく上で一つの指標となる資料であろう。谷内遺跡は弥生時代後期の遺跡であり、今回の調査では住居跡等の遺構は確認できず、多量の遺物を包含する河川跡を検出したのにとどまった。周辺の地形・遺物の内容等から、近接する山脚の裾に広がる台地上に集落が営まれていたものと予想される。

今後周辺の調査が進むにつれ、大宮町を含む丹後の古代の様相が明らかになるものと思われる。

(竹原一彦)

5. 長岡宮跡第172次発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、京都府向日町警察署庁舎の新築工事に先立って実施したものである。当該地(向日市上植野町上川原, ほか)は、長岡宮の西南部に位置し、西方官衙域にあたり周辺には長岡宮に関連する「馬立」、「島坂」、「滝ノ町」等の地名が残っている。また、近年の発掘調査の成果から、小畑川の旧河道が向日丘陵の間際まで及んでいることが予想される。このような知見をもとに、長岡宮に関連する遺構・遺物の検出、旧小畑川の確認等を目的として実施した。

調査は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課主任調査員辻本和美、同調査員竹井治雄の両名が担当し、昭和61年4月17日から同年6月30日までの期間を費した。

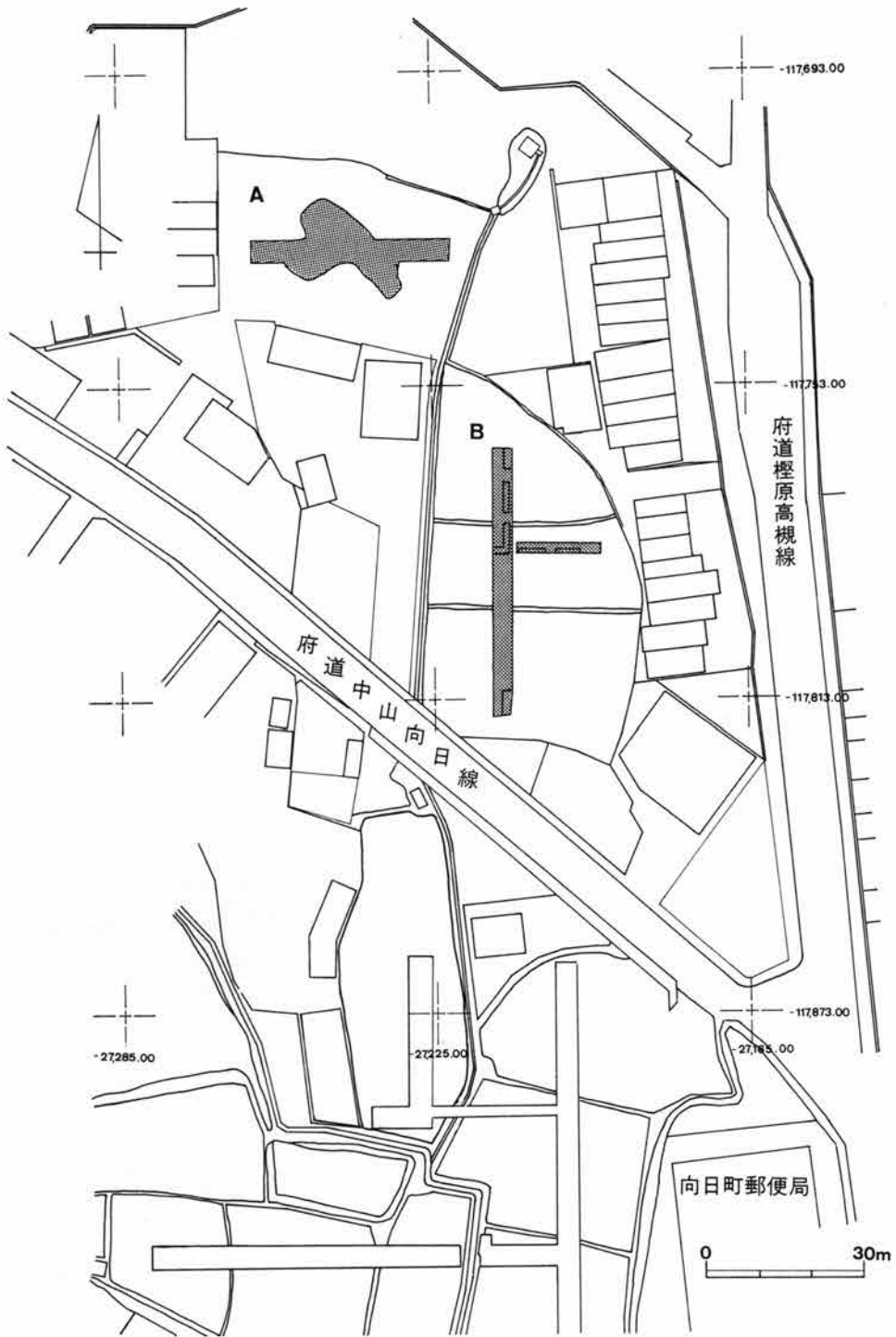
2. 調査経過

調査は、敷地全体(約5,000m²)を対象とし、北部に東西方向のトレンチ(A区)、南部に南北方向のトレンチ(B区)の試掘坑を設定し行った。この設定および掘削以前には、第Ⅵ座標系を用いた基準点測量をもとに調査地周辺の地形図を作成し、トレンチの位置・方位を定めた。掘削面積は、約400m²である。

調査地は、小畑川の谷底平野に位置しており、現状は標高26m前後の水田、「さら地」である。周辺をみると、特に南西では現小畑川に近づくにつれ、水田の畦畔は大きく乱れ、自然堤防上にも認められる。現在、宅地化が著しいが、昭和28年当時の地形図では、ほとんど水田地帯であった。このようなことから、調査地は旧河道内あるいは、その氾濫原であることが予想された。さらに、旧河道の肩部(北限)が検出されることが期待された。



第39図 調査地位置図(1/25,000)



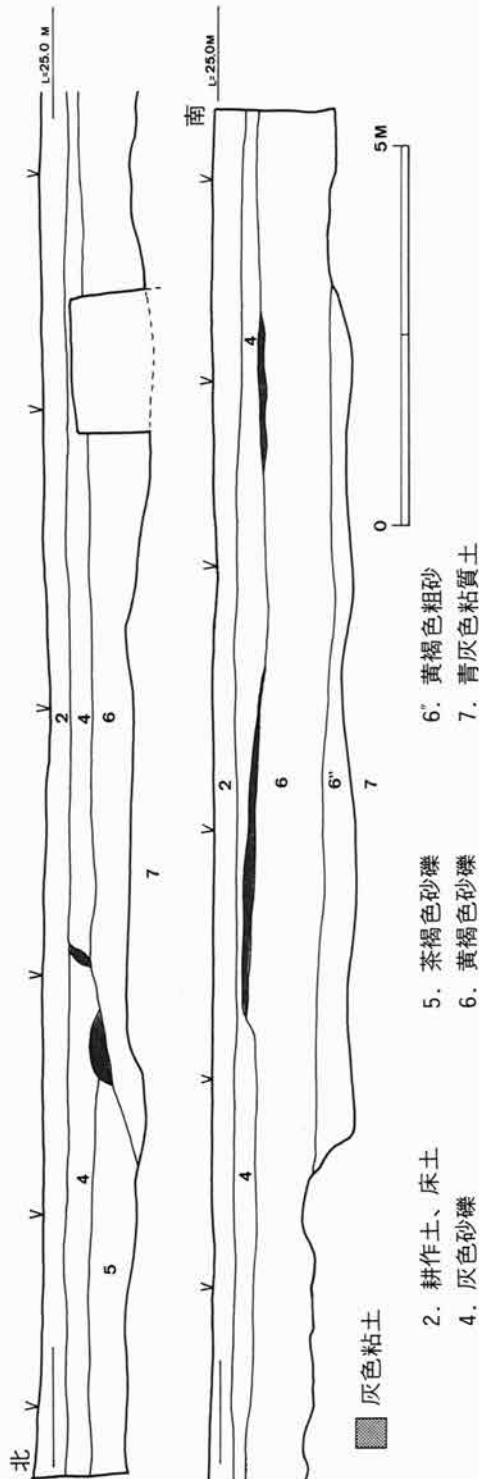
第40図 調査地周辺地形図

A地区は、幅4m・長さ36mの東西トレンチである。掘削は昭和50年頃の造成による盛土(厚さ2m)を重機で行い、旧耕作土、床土以後、砂礫を人力によって取り除いた。トレンチ中央付近で砂礫の中から直径0.4mの大木の一部が発見され、この全容を出すため斜方向に15m拡張した。砂礫の厚さは1mを超え、移植ゴテで遺物の採集に努めた。地表下約4mで青灰色粘質土の地山に達した。この層の上面は凹凸が少なく、河床面としてはおだやかな流れを示している。

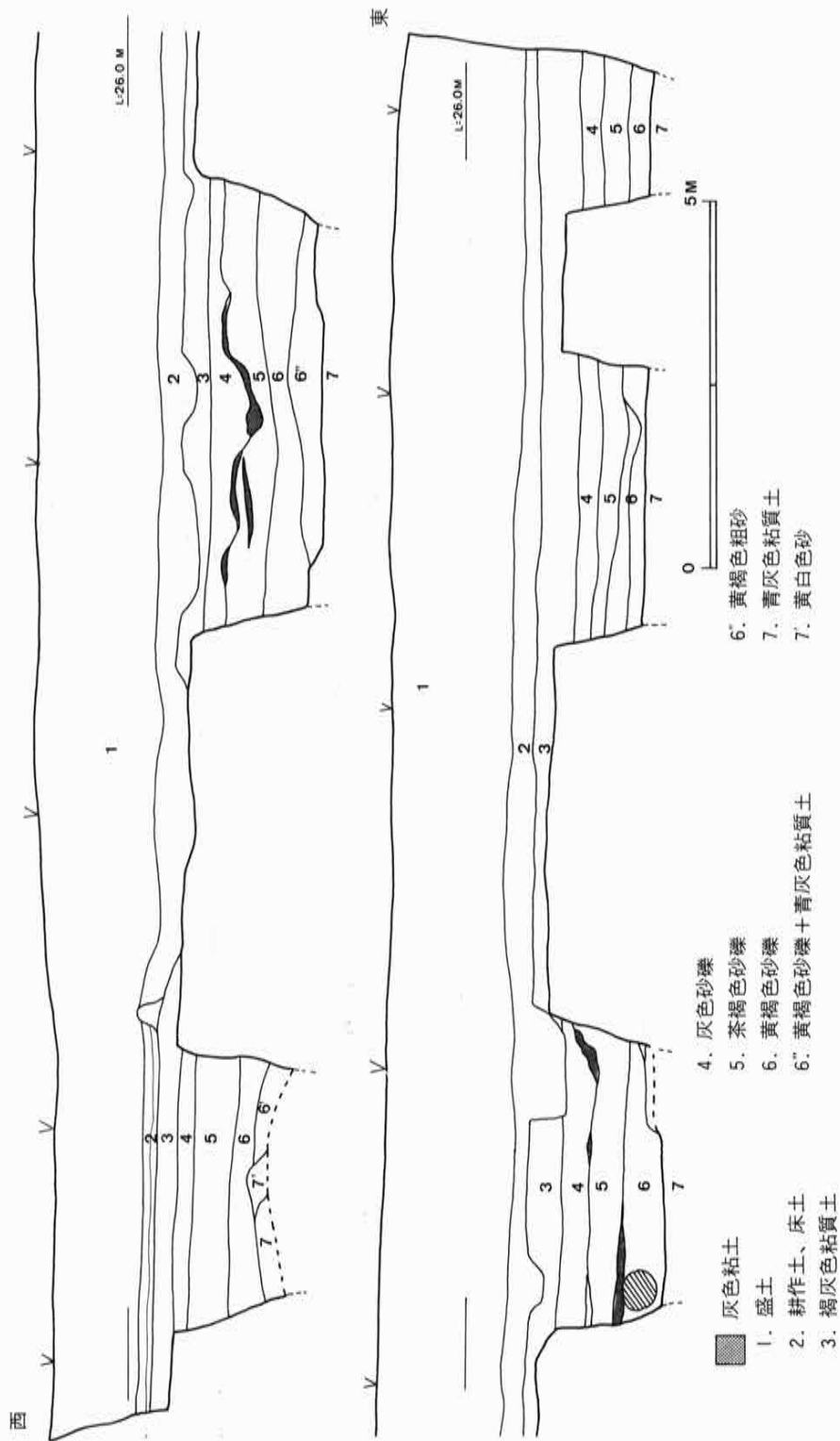
B地区は、幅4m・長さ50mの南北トレンチである。A地区と異なって盛土はなく、耕作土、床土を排除すると細かな灰色の砂礫が現われた。以下人力をもって行った。砂礫は灰色砂礫、褐色砂礫等3層程に分かれ、1~2mの厚さで堆積している。この層を移植ゴテで遺物の採集を重点に掘削し、細片ではあるが磨耗の少ない土器を検出した。地表下1.2~2.2mで青灰色粘質土が現われた。旧河道の河床面である。この面は凹凸が激しく北西から南東方向に低くなっている。

A地区、B地区を通じて、トレンチ壁面の崩落の危険に注意しながら、平面実測、断面実測、写真撮影等の作業は順調に進んだ。

以上の調査では、長岡宮に直接関連する遺構等についての成果は得られなかったが、旧河道(旧小畑川)、及び氾濫原と思われる砂礫層を確認した。この砂礫層について、次に詳しく述べたい。



第41図 B地区東壁断面図



3. 層 序

調査地は、現在A地区が造成地、B地区は水田が営まれている。標高は、25～26mで南へだんだんと低く傾き、基本的には、両地区の層序が相似しているものであり、かつ一連のものと考えられる。

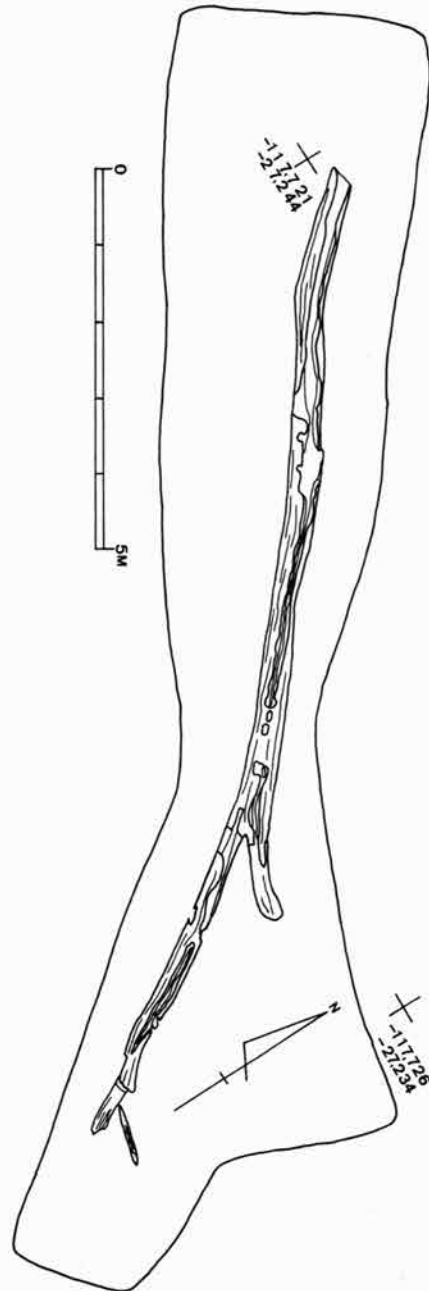
第1層(第42図-2)は、耕作土、床土からなる暗灰色あるいは黒灰色泥土である。厚さ0.15～0.2mを測る。この層はA地区では畑地、B地区では水田として利用されていたと推察される。

第2層(第42図-3)は、A地区のみで認められる安定した褐灰色粘質土層で、厚さ0.3mを測る。やはり旧耕作土であろう。瓦器片が出土した。

第3層(第42図-4)は、灰色を呈する小砂礫層でA、B両地区で確認した。礫の長軸方向は定まらない。瓦器、須恵器片が若干含まれる。

第4層(第42図-5)は、茶褐色を呈する砂礫層で、直径1～5cmの中礫が主成分であり、厚さ0.3～0.4mを測る。礫の長軸方向は、北西及び北方向を示すものが多い。瓦器片、土師器片等が含まれるが、なかにはそれほど磨耗していないものがある。

第5層(第42図-6)は、黄褐色を呈する砂礫層で直径1～10cmで、なかには人頭大の礫があり、厚さ0.18mを測る。礫の長軸方向は、北西方向が多い。自然木の出土は、この層からである。土師器、須恵器、瓦器片が第4層に比して多い。A地区の6'は、第7層と第6層の混合層である。また6''は、粗砂を主成分



第 43 図 自然木出土状況実測図

とした砂礫層である。

第6層(第42図-7)は、青灰色を呈する粘質土で厚さは2m以上を確認した。過去のボーリング調査では、地表下10mであることが判明している。腐植質が含まれているが、洪積層(大阪層群)であり、地山と考えられる。この層の上面は、とくにB地区では、砂礫の堆積作用によって凹凸が激しく、北西から南東方向の溝状を呈している。A地区の西端では、青灰色粘質土にかわって黄白色砂層(7')が堆積しているが、遺物は含まれない。

「自然木」(第43図)は、Aトレンチ中央部の黄褐色砂層(6')から出土した。長さ13m・直径(最大)0.35mを測る。腐食が激しく、表皮は部分で残るのみで、中心に空洞がみられる。全体に北西から南東方向に横たわり、砂礫の方向と一致する。

4. 出土遺物

A地区、B地区とも平均して土師器、須恵器、瓦器片が出土しているが、砂礫層に包蔵されていたにもかかわらず、土器表面の磨耗が少ないものもある。これらは、旧河道の埋没した時期を示す重要な資料であるばかりか、周辺に遺構(長岡京期)が遺存したことを想起させるものである。

A区出土土器(第44図)

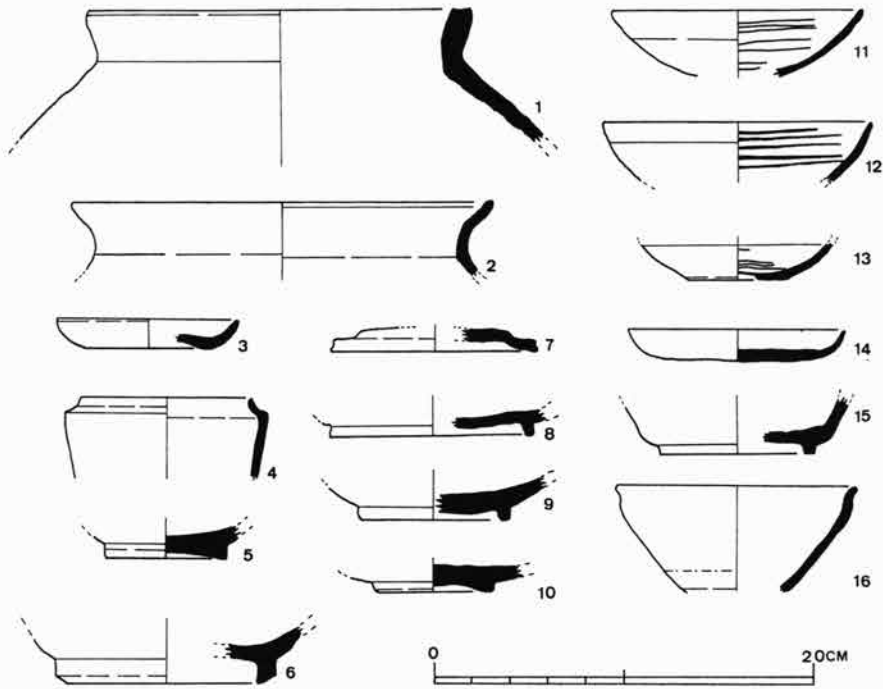
第1層(床土)から出土した口径12.7cmの天目茶碗である(16)。高台付近まで内外面に褐釉が施されている。第3層では図化できない土師器、瓦器の破片がある。第4層では、瓦器碗(11)、須恵器の底部(5)がある。11は、口径13.3cm、内面に数条の暗文が施され、第5層では土師器壺(4)、須恵器(6)がある。4は口径9cmの短頸壺で、外面は丁寧なナデ調整で仕上げている。

B区の出土土器(第44図)

第3層では、瓦器碗(12)の他土師器の細片がある。11は口径13.5cm、内外面は黒灰色を呈し、内面には数条の暗文がみられる。第4層には、土師器甕(2)、須恵器高台(8)・(9)、土師皿(3)がある。2は淡褐色を呈し、口径22cmを測り、口縁端部は内側にやや肥厚する。3は、口径11cmを測り、淡褐色を呈している。第5層には、須恵器甕(1)、須恵器杯の蓋(7)、須恵器(10)、土師器皿(14)がある。1は口径20cmを測り、端部は水平の平坦面をもつ。7は11cmを測り、やや小振りである。14は、口径11.5cm・器高1.6cmを測る。

5. ま と め

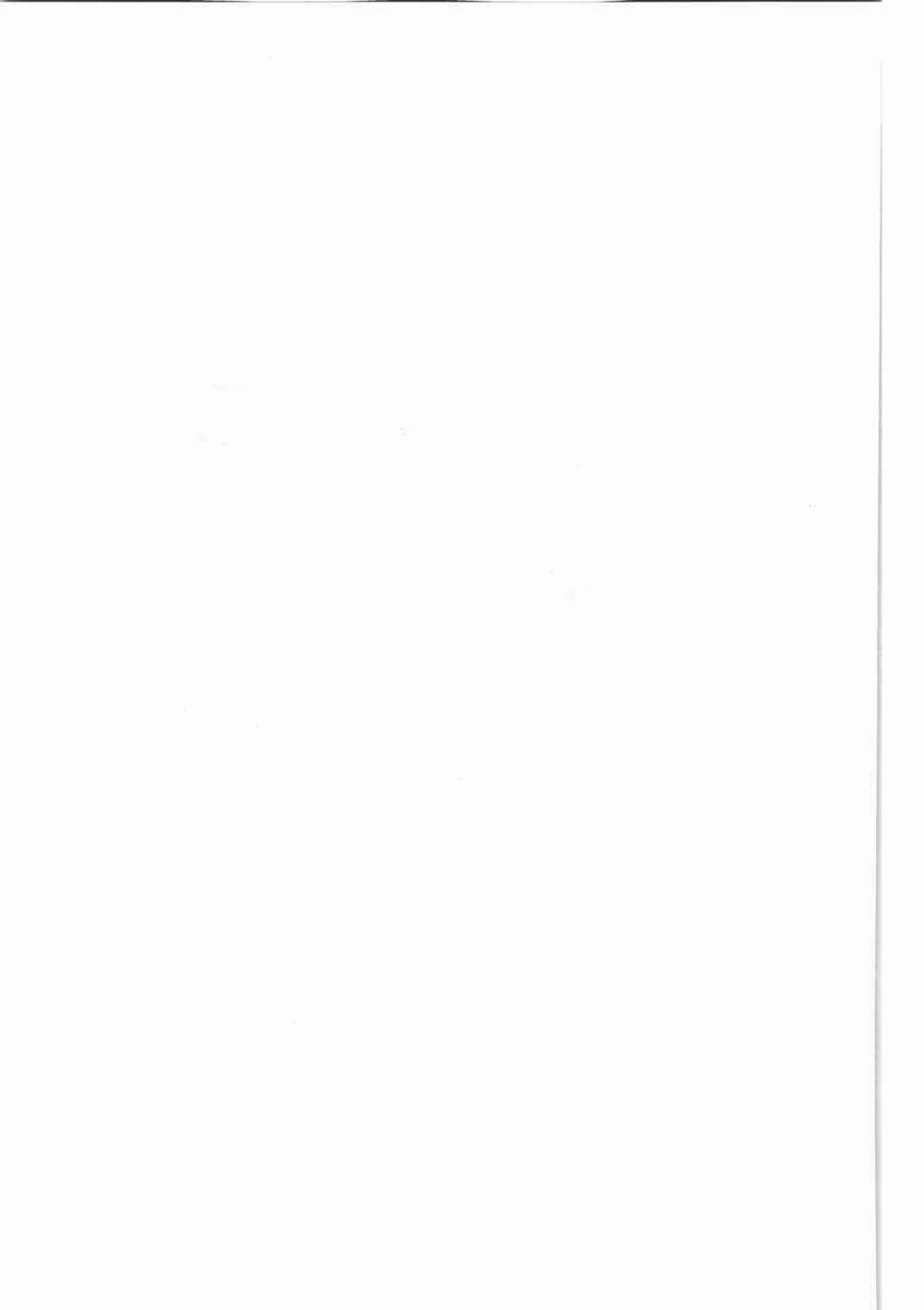
本調査では、長岡宮に関連する遺構は検出されなかったが、調査地全域に分布する砂礫層の確認によって、旧河道(旧小畑川)の埋没過程を如実に実見できた。しかし、この砂礫



第44図 出土遺物実測図

層は、大きく3層に分けられたものの、各層の方向、堆積順序が複雑に変化しており、「全体」として北西から南東方向に流れていたと考える。また埋没時期についても全層一様に出土する瓦器、土師器等から14世紀に求められる。かなり急速に埋没したものと思われる。この旧河道が向日丘陵の裾部にまで及んでいたとすれば、長岡宮の地割りに不都合であっても、宮城の景観としては実に壮観なものであったと想像される。

(竹井治雄)



6. 長岡京跡左京第151次発掘調査概要

(7ANEKZ-6 地区)

1. はじめに

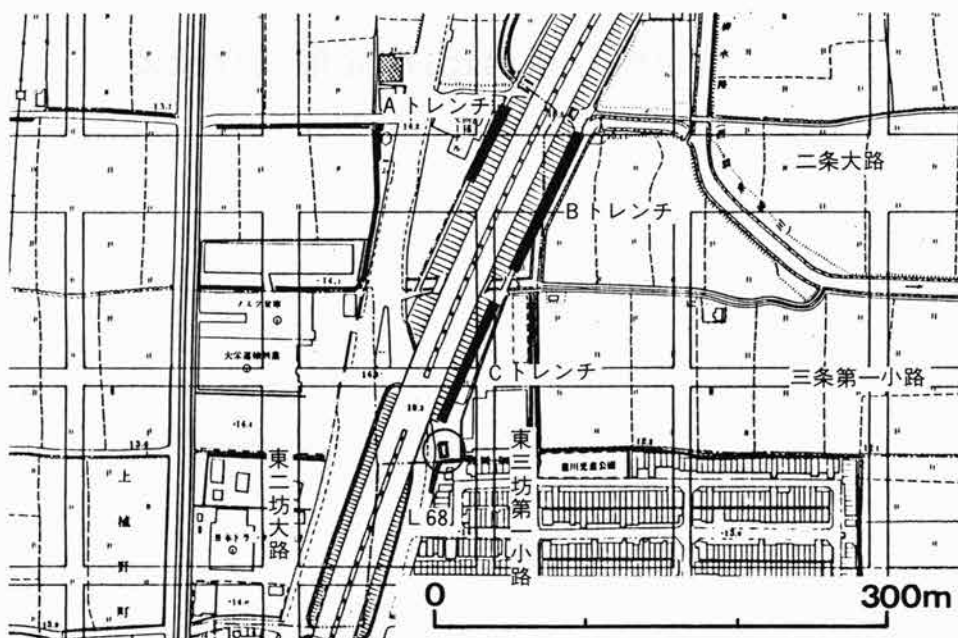
今回の調査は、名神高速道路羽束師川改修(下部工)工事に伴い、日本道路公団大阪管理局の依頼を受けて実施したものである。調査対象地は、向日市鶏冠井町南金村・清水、京都市伏見区久我町井手浦・井戸田地区にまたがる延長約70m部分であるが、そのうち基礎工事が地下深部におよぶ鶏冠井町清水地区の約1,000m²を対象に発掘調査を行った。また他の工事か所については工事の進展に応じて適時立会調査を行った。

調査地は、長岡京の条坊復原研究によれば左京三条三坊一町・同二町・同八町および二条三坊四町・同五町にあたり、長岡宮朝堂院のすぐ南を東西方向に走る二条大路、その一町南側を並行する三条第一小路、南北方向に走る東三坊第一小路等が通過する地点に該当する。また周辺地では従前の調査により長岡京以前に遡る弥生時代中期の遺構・遺物が確認されており、今回調査地の南側に位置する左京第68次調査^(注1)では、弥生時代中期前半の土壇等が検出されている。また西側に位置する左京第47次調査^(注2)においても弥生時代の遺物が出土している。付近には弥生時代中期初頭の集落遺跡として著名な鶏冠井遺跡が所在しているが、遺跡・遺構の分布状況のあり方からみてそれらとは分離する独立した集落跡として認識されるため、当遺跡については鶏冠井清水遺跡の名で呼称されている。今回の調査においても、それらに関する遺構・遺物の検出が期待された。

現地調査は、昭和61年4月30日に開始し、昭和61年8月20日まで実施した。なお、調査に当たっては工事工程の関係上、トレンチを順次開けていく方法を取ったため、各トレンチの調査終了ごとに関係者に対する現地説明会を行った。

現地調査は、当調査研究センター調査課・主任調査員 辻本和美、同調査員 村尾政人が担当した。

現地調査に際しては、京都府教育委員会・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所・矢作建設工業株式会社・木原建設株式会社等から御援助・御協力を賜った。また、調査補助員・整理員として有志学生の参加・協力があつた。記して謝意を表したい。



第45図 調査地位置図

2. 調査概要

調査は、名神高速道路上り車線側(Aトレンチ)、下り車線側(Bトレンチ・Cトレンチ)の3地区に分けて実施した。また、今回調査地は工事の性格上道路法面に当たるため斜面高位側にシートパイルを打ち込み掘削壁面の保護を図った。調査地の基本層序は、最上層に名神高速道路構築時の盛土約1.2mとサンドマットと呼ばれる砂層があり、以下旧耕作土約0.2m、黄褐色粘土層(床土)約0.1m、明灰褐色土層ないし青灰色・暗灰色粘土層約0.4m、黒褐色粘土層約0.3m、緑灰色粘土層(地山)の順である。付近の標高は約13mを測る。

今回の調査は、まずAトレンチから重機によって盛土および旧耕作土・床土までを除去したのち人力によって遺構の検出作業を行った。その結果、黄褐色粘土層(床土)下から中世の素掘り溝・柱穴等を検出し、さらにそれらの下層から古墳時代～平安時代にわたる溝・柱穴・土坑等を検出した。後者の遺構面では部分的に黄褐色土混じりの砂礫層がレンズ状に堆積しており、小規模な河川氾濫のあったことが推定される。地山面では弥生時代中期前半に属する土坑・溝および住居跡と思われる遺構等を確認した。地山を構成する緑灰色粘土層は断ち割り調査を行った結果、2m下位まで続くことが判った。以上のように、今回検出した遺構群は層位上3時期に大別される。すなわち、第1期(弥生時代中期～古墳時代初頭)・第2期(長岡京期)・第3期(中世・近世)である。

3. 検出遺構

各トレンチで検出した主な遺構の種類・所属時期については概ね次のとおりである。

Aトレンチ第1期(水田畦畔跡・足跡)、第2期(二条大路北側溝)、第3期(柵列・耕作溝群)

Bトレンチ第1期(土壇群・水田畦畔跡・足跡・溝)、第2期(二条大路南北側溝・掘立柱建物・柵列)、第3期(耕作溝群)、羽束師川旧河道

Cトレンチ第1期(水田畦畔跡・足跡・土壇・柱穴・住居跡・溝)、第2期(三条第一小路南北側溝・東三坊第一小路西側溝・柱穴)、第3期(耕作溝)

次に各時期ごとに主要な遺構について記述する。

第1期の遺構

SD15101 東西方向溝。幅1m、断面U字形で深さ60cmを測る。埋土に黒色土を含む。弥生時代。

SX15104・15105 北東から南東方向に延びる幅1.2m・残存高約10cmの水田畦畔状遺構。SX15104の西側に平坦面が張り出し、また北辺部に沿って杭列が走る。畔の微高地周辺部には多数の足跡が見られる。足跡は、X=-118,035mからX=-118,060mまでの約25mの間に分布しており、方向は不規則である。

SX15106・SX15107 上記と同じく水田畦畔状の高まり。島状に広がり、北から南方向にやや振る。

SK15114 長方形土壇。長軸1.5mを測る。埋土から須恵器甕の体部破片が出土した。

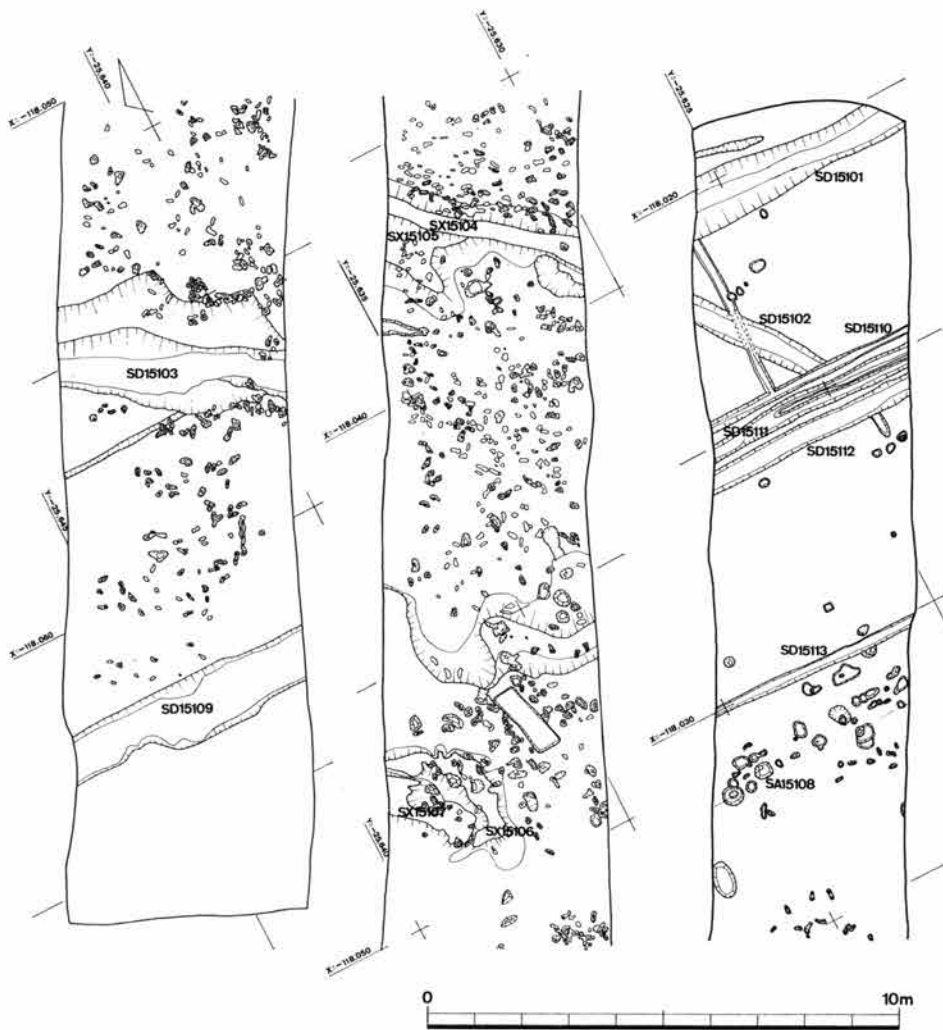
SK15115 土壇状遺構。幅80cm、長さ不明。

SD15122 東西方向溝。東側でやや南に振る。幅1.2m・深さ40cmを測る。断面U字形で黒色粘土を包含する。第V様式壺形土器片出土。

SK15123 北東から南西方向に長軸を置く長方形土壇。幅45cm・長さ1.3m以上を測るが、南辺をSK15124によって切られる。

SK15124 長さ2.3m・幅40cmの長方形土壇。周辺部に円形状土壇があるが時期等は不明である。なお方形土壇の所属時期は、須恵器片等の出土から古墳時代後期と考えられる。

SX15133・15134・15135・15136 いずれも水田畦畔状遺構。畦上面の平均幅70cm・残存高10cmを測る。SX15134は西側部分で北方向に屈曲する。SX15133・15134の周辺部には足跡群が見られる。特にSX15134の南辺に沿って走るものには規則性が認められる。SX15135と15136の間の距離は約4mを測る。



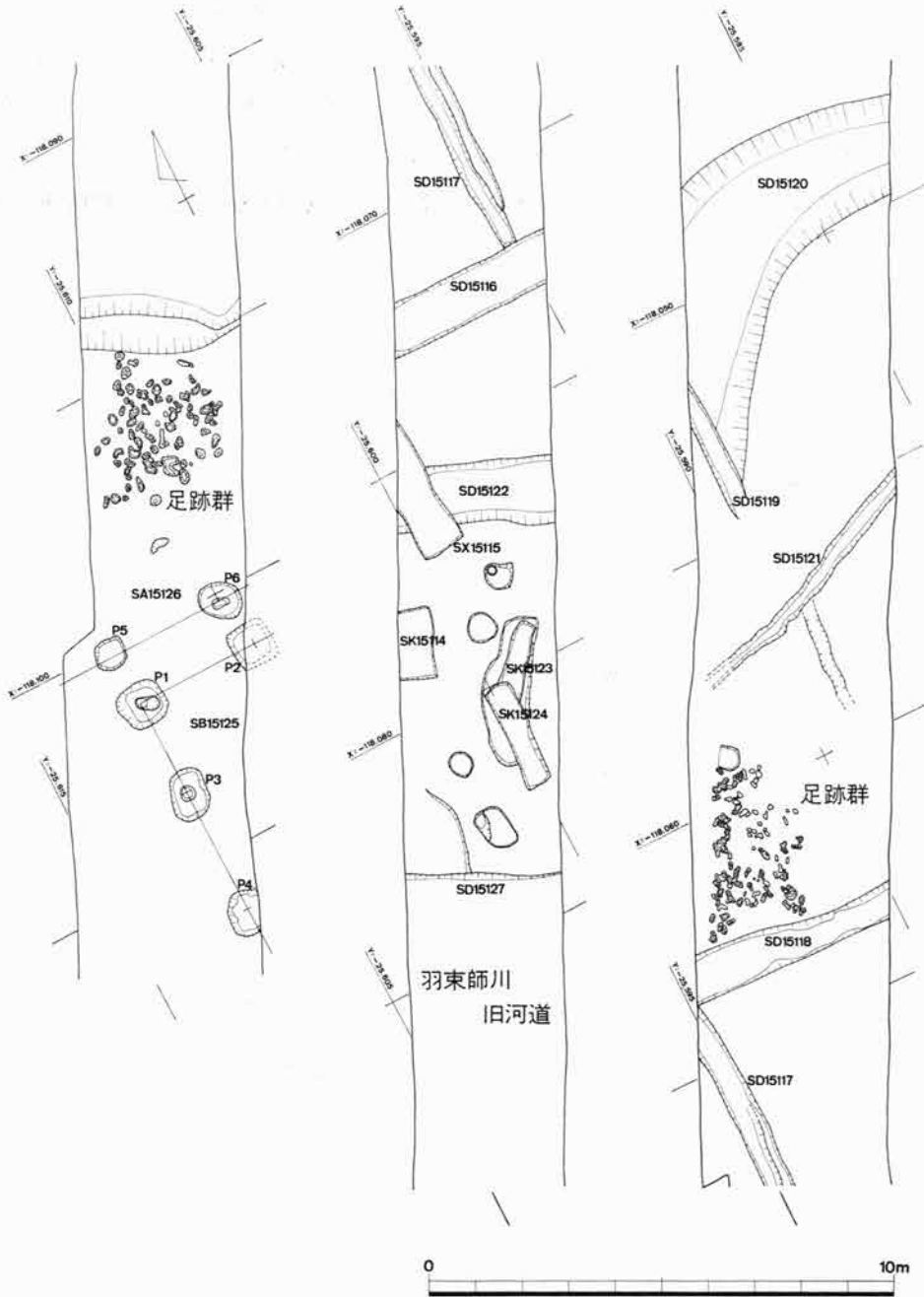
第46図 Aトレンチ遺構平面図

SK15142 トレンチ西壁面で検出した土坑。全体の規模・形状等は不明であるが残存部の長軸約1.6m・深さ80cmを測る。土坑埋土は暗灰褐色粘土であり、弥生時代中期の土器片に混じり石製品が出土した。

SD15145 北西から南東方向に走る溝。幅約1.4m・深さ40cmを測る。弥生時代。

SB15146 Cトレンチ南端で検出した弧を描く幅30cmの細い溝状遺構。上面は大きく削平されているが弥生時代の円形竪穴式住居跡になるものと思われる。復原径は約8mを測る。柱穴については不明な点が多いが、P9～P12の各ピットが想定される。

(Aトレンチ：SD15101～SX15107 Bトレンチ：SD15122～SK15124 Cトレンチ：SX15133～SB15146)



第47図 Bトレンチ遺構平面図

第2期の遺構

SA15108 東西方向の柵列。柱穴の規模は最大で径40cmを測るが、柱間間隔等不揃いであり同じ場所での建て替えが窺える。

SD15109 東西方向に走る溝。幅約1.2m・深さ15cmを削り、溝の断面は底の広いU字形を呈する。埋土は暗青灰色粘土である。溝内から長岡京期の土師器・須恵器・木片等が出土した。溝心の国土座標は、 $X = -118,062.8\text{m}$ で二条大路の北側溝に想定されるが、従来の座標値($X = -118,060.0$)に比べ約2.8m程南にずれている。

SD15116 東西方向溝。幅約1.1mで溝断面は浅いU字形を呈する。埋土に長岡京期の土師器・須恵器・木片等を含む。SD15109およびSD15118に対応する二条大路南側溝に比定される。国土座標値は $X = -118,072.3\text{m}$ であり、北側溝とは溝心々の距離約9.3mを測る。

SD15118 東西方向溝。幅約80cm・深さ20cmで溝断面はU字形を呈する。溝埋土は暗灰褐色粘土である。溝心の国土座標値は $X = -118,063.0\text{m}$ を測りAトレンチで検出したSD15109の延長である二条大路の北側溝に想定される。

SB15125 Bトレンチ南端で検出した掘立柱建物跡。建物北東隅を確認できたのみであり規模・方向等は不明。建物方位は、ほぼ真南北を示す。一辺約1mの隅丸方形の柱掘形を持つ。柱跡は4か所で検出した。東西方向の柱間(P1~P2)は約2.7m(9尺)を測る。南北方向の柱間はP1~P3が約2.1m(7尺)、P3~P4が約2.76m(9尺強)を測る。北側の柱通りが底に相当すると思われるので東西方向の建物になる可能性がある。柱穴には柱抜き取り跡が残るものが認められ、そのうちP1の抜き取り穴埋土からは木簡が出土した。

SD15132 南北方向溝。幅約1.2m・深さ約20cmで断面は浅い逆台形状を呈する。確認延長約12mを測る。東三坊大路第一小路西側溝に比定される。溝心の座標値は、北端で $Y = -25,651.2\text{m}$ 、南端で $Y = -25,651.1\text{m}$ を測る。

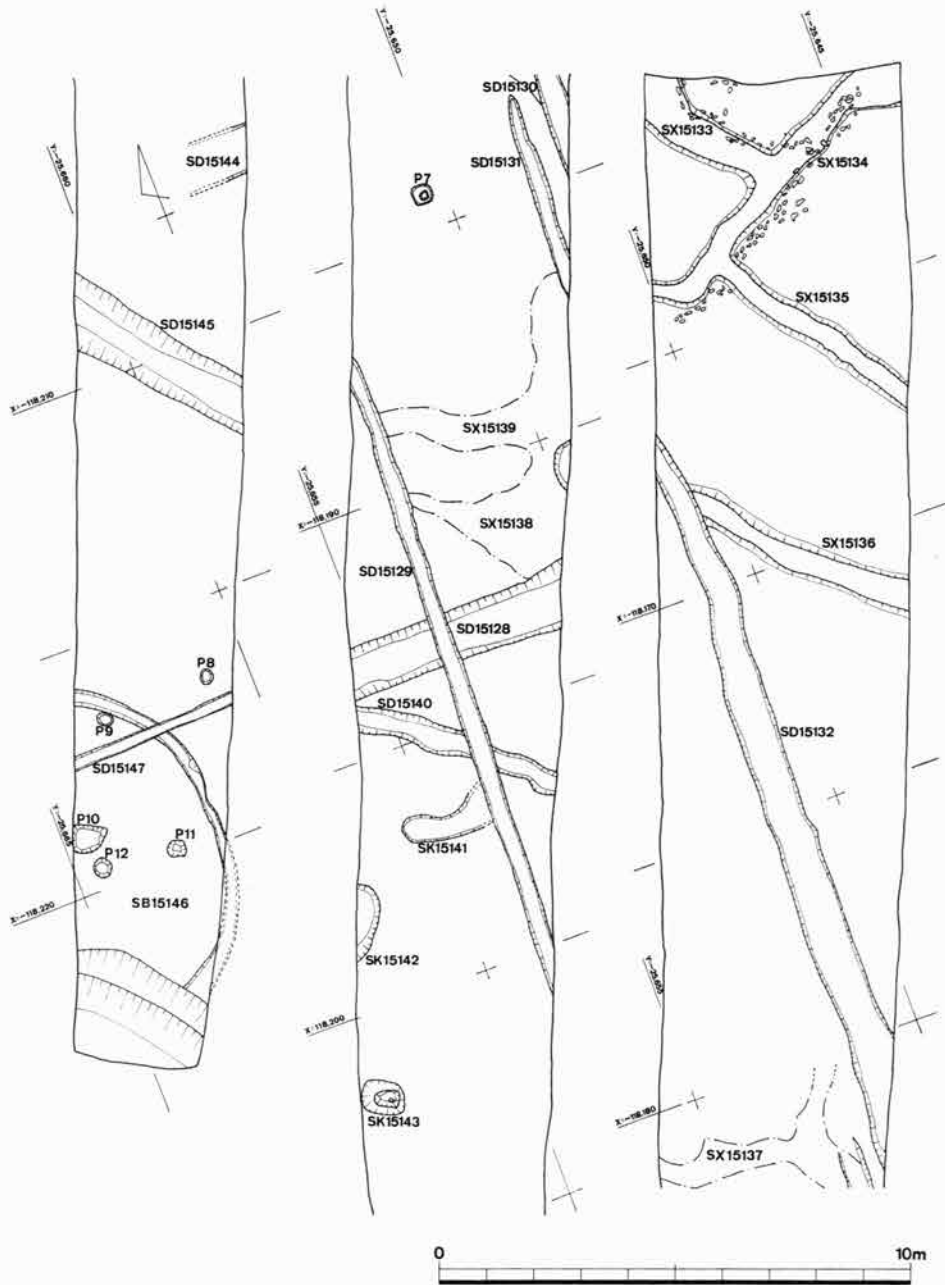
SD15128 東西溝。幅約1.1m・深さ約20mを測る。三条第一小路北側溝に相当する。溝心の座標値は $X = -118,193.200\text{m}$ を測る。

SD15144 東西溝。東側の約1m部分のみ確認できただけであり、西側は削平されていた。SD15128に対応する三条第一小路南側溝に相当するものと思われる。座標値は $X = -118,206.6\text{m}$ で、北側溝との距離は、溝心々で約13.4mを測る。

(Aトレンチ：SA15108~SD15109 Bトレンチ：SD15118~SA15126 Cトレンチ：SD15132~SD15144)

第3期の遺構

第3期の遺構の多くは水田耕作溝である。東西および南北方向のものがあり、数条が単位となるものがみられる。埋土は灰褐色粘土であり瓦器片を含む。当時期の主要な遺構として次のものがある。Aトレンチ：SD15110~15113 Bトレンチ：SD15119~15121 Cトレンチ：SD15129~15131 SD15127は羽束師川旧河道である。



第 48 図 C トレンチ遺構平面図

4. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は縄文時代から中世・近世までのものを含むが、その多くは包含層からの出土であり、遺構に伴うものは少ない。遺物の種類としては、土器類のほか石器・石製品・土製品・瓦・木簡等がある。土器には縄文土器と思われる小片がみられる

ほか、弥生土器・須恵器・土師器・緑釉陶器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・陶磁器類等の各種がある。いずれも断片的な資料であるが、ここでは特に遺構面との関連を持つ弥生土器および長岡京期のものを中心にふれておきたい。

弥生土器(1～5) 甕(1)(2)は、外反する口縁部の端面が平坦面をなすもの。(1)は端部下半に刻み目文を施す。(3)は口縁端部を上方に強くつまみあげる。口縁部内面はヨコハケを行う。(4)(5)は壺体部の破片である。(4)は縦方向のハケのあと櫛描きによる直線文を施す。(5)は大型の無頸壺で同じく櫛描きの直線文と波状文を施す。櫛描き直線文は7条を一帯とする。(1)(4)(5)はCトレンチ土坑SK15142, その他はCトレンチ包含層より出土した。いずれも畿内弥生土器編年の第Ⅱ様式に属するものである。このほか同時期の出土遺物としては石包丁の未製品(図版33-2長さ9cm・幅4.5cm)・碧玉原石(同-3長さ7cm・最大幅4cm・厚さ2.2cm)・石鋸・サヌカイト剥片等がある。

須恵器(6～11) (6)は低平な蓋受け部をもつ杯Aである。復原口径は13cmを測る。7世紀前葉のもの。(7)は擬宝珠形つまみをもつ杯蓋。(8)(9)は杯B類で高台を有するものである。長頸壺(10)は頸部上半および肩部以下を欠失するが広口のものになるものと思われる。(11)は高台をもつ壺底部。

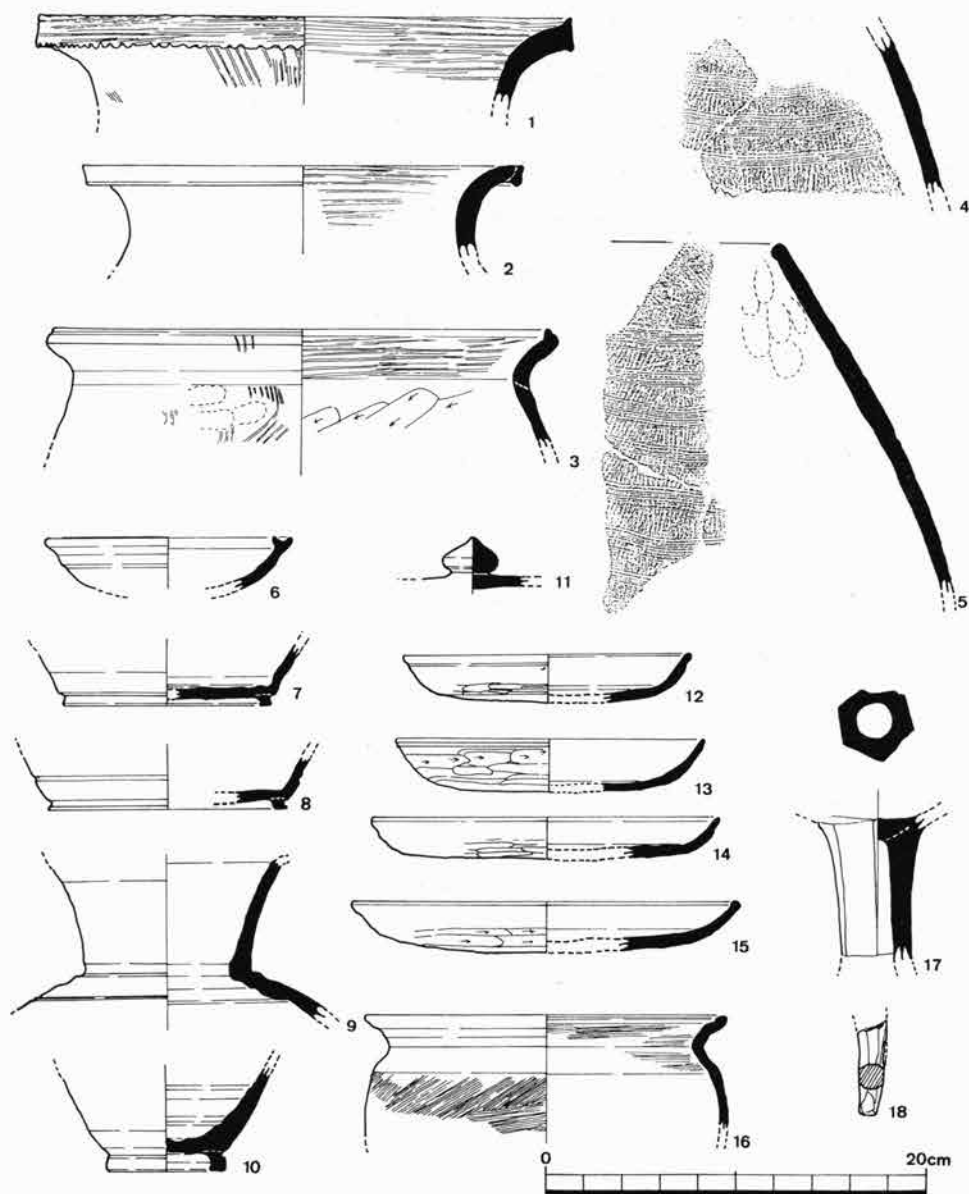
土師器(12～17) (13)(14)(15)はこれまで長岡京期の土器研究においては皿AⅠに分類されるものである。口径15.2～20.5cmを測る。(12)(13)は口縁端部を内側に巻き込む。甕(16)は「く」字状に強く屈曲する口縁部を有する。体部外面はハケによる調整を施している。高杯(17)は六角柱の脚部をもつ。(18)は土馬脚部の破片と思われる。各側面を面取りして整形する。(9)はSD15116, (12)はSA15126, (13)はSD15128からの出土。他は各トレンチ包含層から出土した。

木簡(第50図) 残存部長さ18.7cmを測る。下端部は腐食のため痩せ細っているが、先端を尖らしていた形状を残すものであろう。上端は角を斜めに削る。越前国大野郡不明郷名以下不詳の墨書があり物資貢進の荷札と推定される。裏面には墨の跡は認められない。遺構の稿で述べたように掘立柱建物SB15125の柱抜き取り穴から出土した。

その他出土遺物としては、中世の横櫛(図版33-1長さ8cm)・牛骨と思われる動物遺体や樹木片等の自然遺物が含まれる。

5. ま と め

今回の調査では各トレンチから弥生時代から中世に至る各種の遺構・遺物が検出された。すなわち、名神高速道路建設時においても地下の構築物が深く及んでいない部分については遺構等が良好に遺存することを明らかにできたことは、今回調査の大きな成果である。



第 49 図 出 土 遺 物

調査内容については多岐にわたるが、ここではその要点と今後の課題等について簡単に列記し、まとめにかえたい。

(1) 今回調査地内から出土した弥生土器は中期前半の第Ⅱ様式に所属するものであり、鶏冠井清水遺跡の時期と広がり等について新たな資料を加えることができた。また今回調査によって玉生産に関する遺品が出土したことは、乙訓地方の弥生時代の玉造遺跡の例として極めて重要であり、銅鐸鑄型が出土した隣接する鶏冠井遺跡との関連性等についても

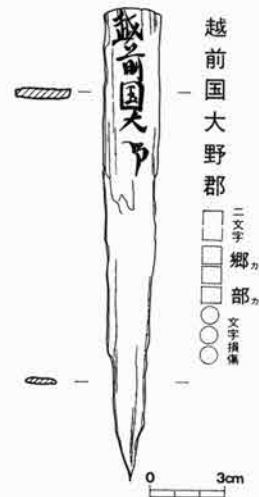
注目される。また、当地域は長岡京以前には低湿地状を呈しており、今回検出した水田跡における多数の足跡は、当時の農作業の一端をかいまみせるものである。足跡内には砂が充填しており、洪水等により一気に埋没したものと想定される。

(2) Bトレンチ出土の木簡は建物跡(SB15125) 廃絶時に柱抜き取り穴に廃棄されたものである。越前国の国名のある木簡は長岡京では他に数例知られているが、当地域における建物跡の性格を考えるうえに重要な資料となろう。

(3) Cトレンチにおいて検出した推定東三坊第一小路および三条第一小路は、向日市教育委員会・京都市埋蔵文化財研究所の調査によっても確認されている。その位置は今回調査で検出したものとはほぼ一致する座標値を示しており、当時の測量技術の精度の高さを物語るものである。

(4) 二条大路については、A・B両トレンチにまたがって検出することができた。その規模は南北両側溝溝心々間の距離が約9.3mを測ることが明らかになった。この数値は従来平城京等で復原されている大路の路面幅17丈(51m)と比較し極端に狭く、また、延喜式に記載される通常の大路幅8丈(24m)よりもなお狭いことが判明する。すなわち、今回検出した推定二条大路の規模は条間の小路クラスのものであり、宮域の南限を画する重要な役目を帯びる大路としてはふさわしくない。この問題については従来三条条間小路とされてきた道路をこれに当てて説明する案も出されている^(注3)。つまり、長岡宮域をもう二町分南に下げることにより解決しようとするものである。これについては長岡宮の地形上の制約や従前の具体的な調査資料からみて魅力ある説と言えるが、当否はいずれにせよ今回の調査結果は今後の長岡京個有の条坊復原に貴重な資料を提供しえたものと思われる。

(辻本和美)



第50図 木簡

- 注1 高橋美久二・國下多美樹「長岡京跡左京第68次調査(7ANEKZ-IV地区)発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1982
- 注2 石尾政信「長岡京跡左京第47・49次発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第7集向日市教育委員会) 1981
- 注3 高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会) 1980

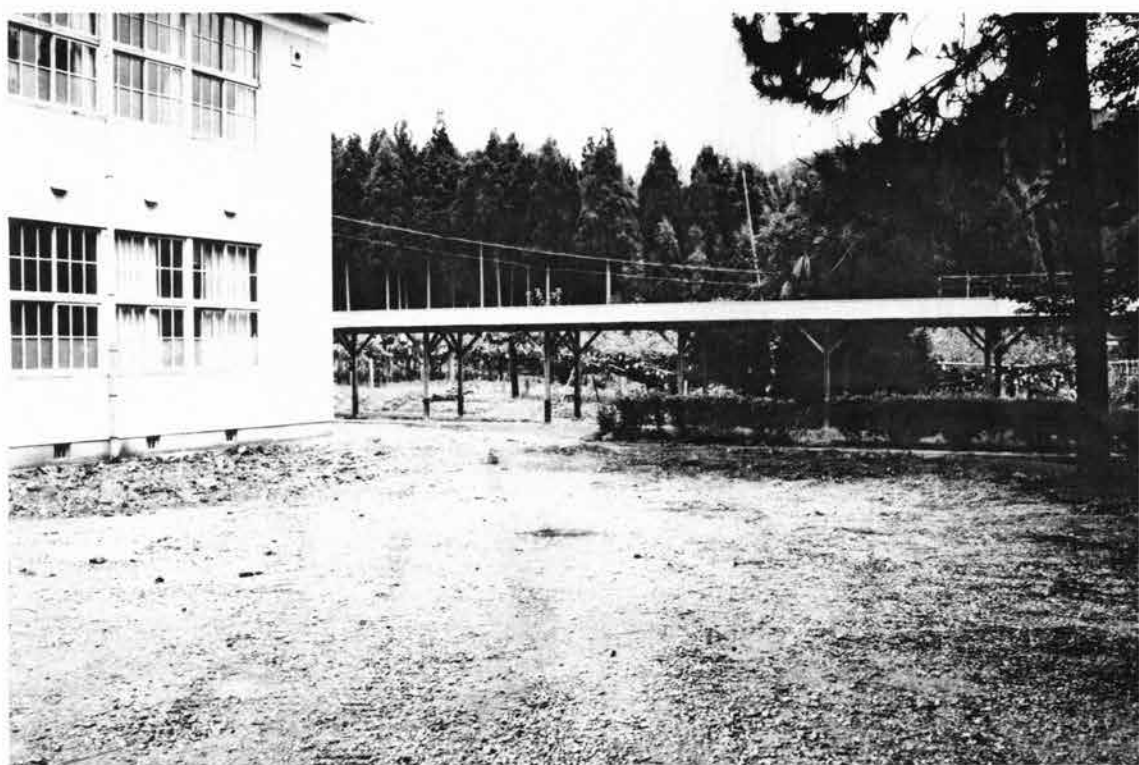
图

版

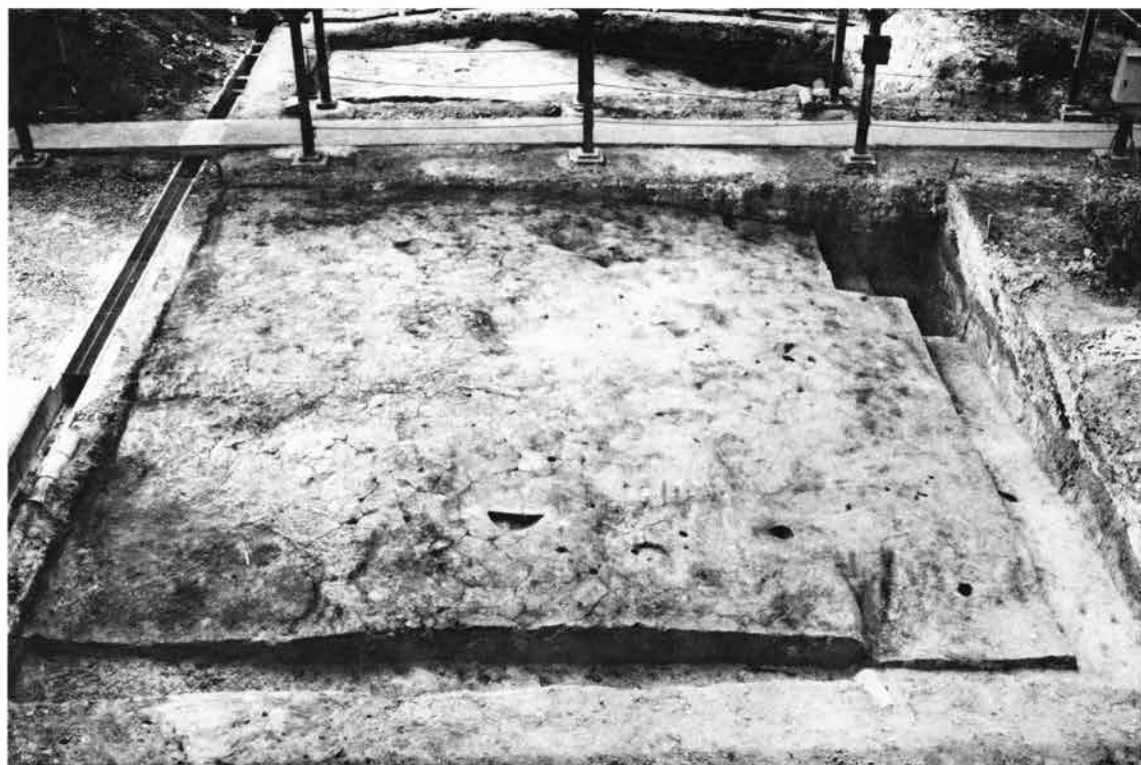
図版第1 上 中 遺 跡



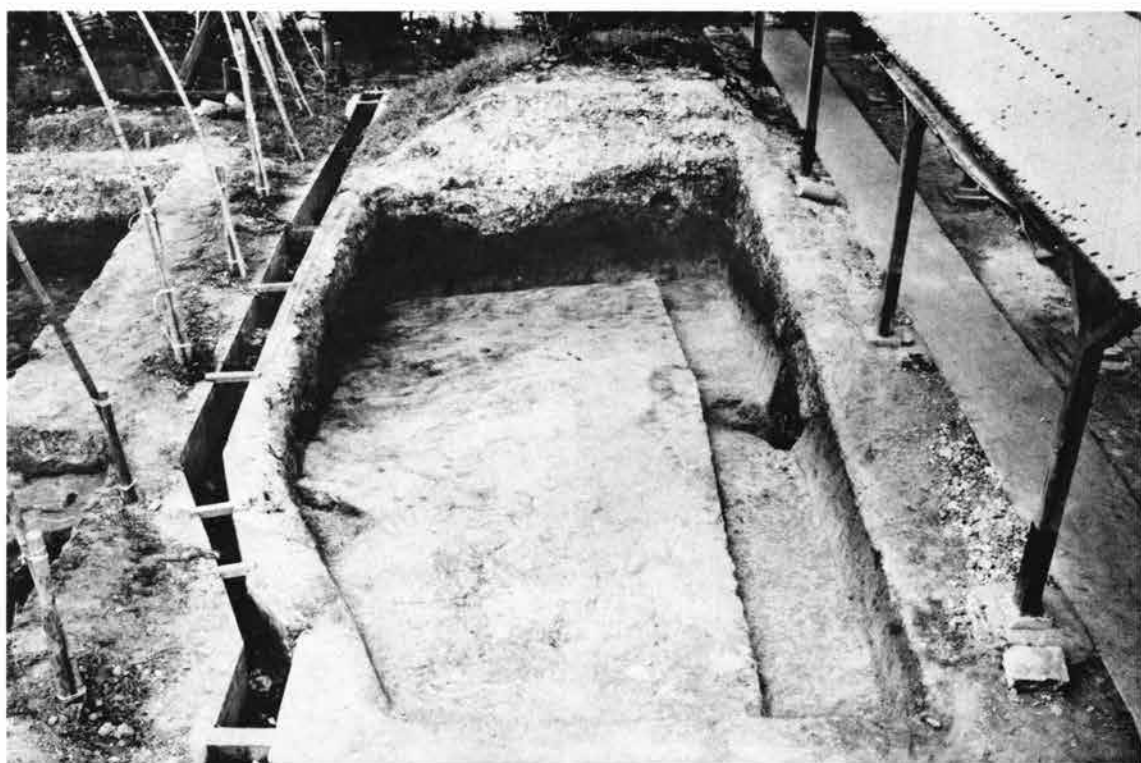
(1) 調査地西側近景 (南西から)



(2) 調査地東側近景 (南東から)



(1) A区調査地掘削状況 (南東から)



(2) B区調査地掘削状況 (西から)

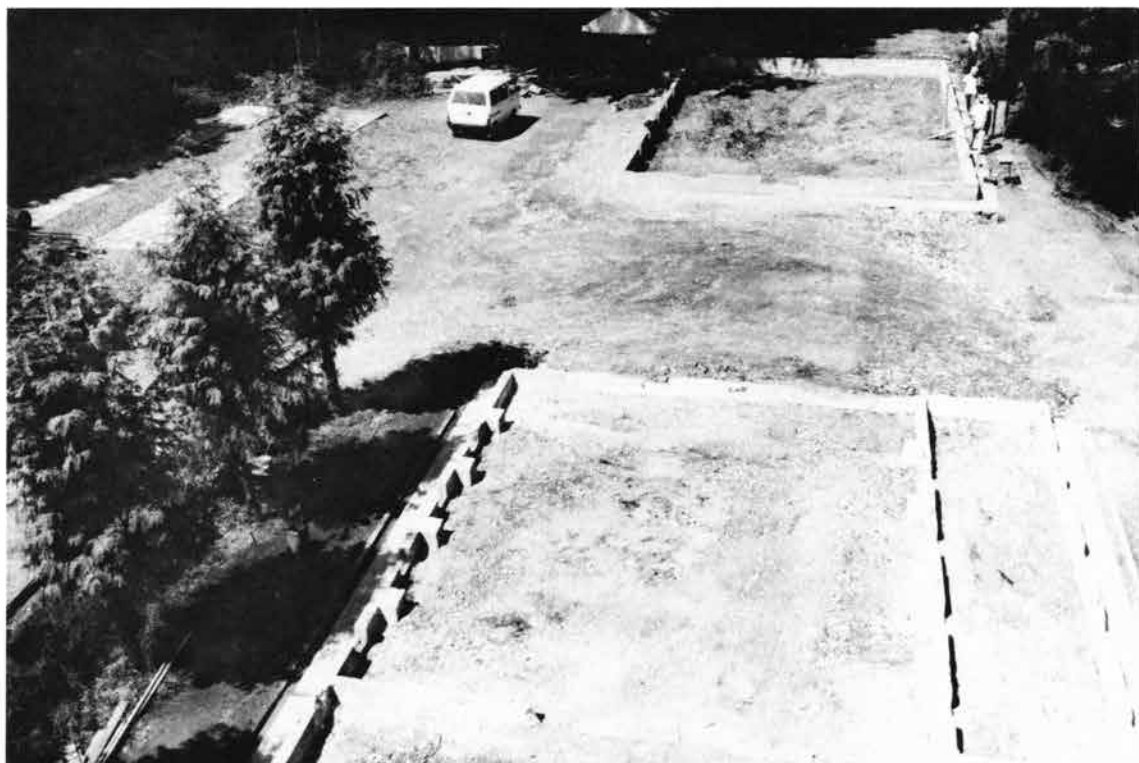


(1) C区調査地掘削状況(西から)



(2) 溝状遺構(北西から)

図版第4 蒲生遺跡



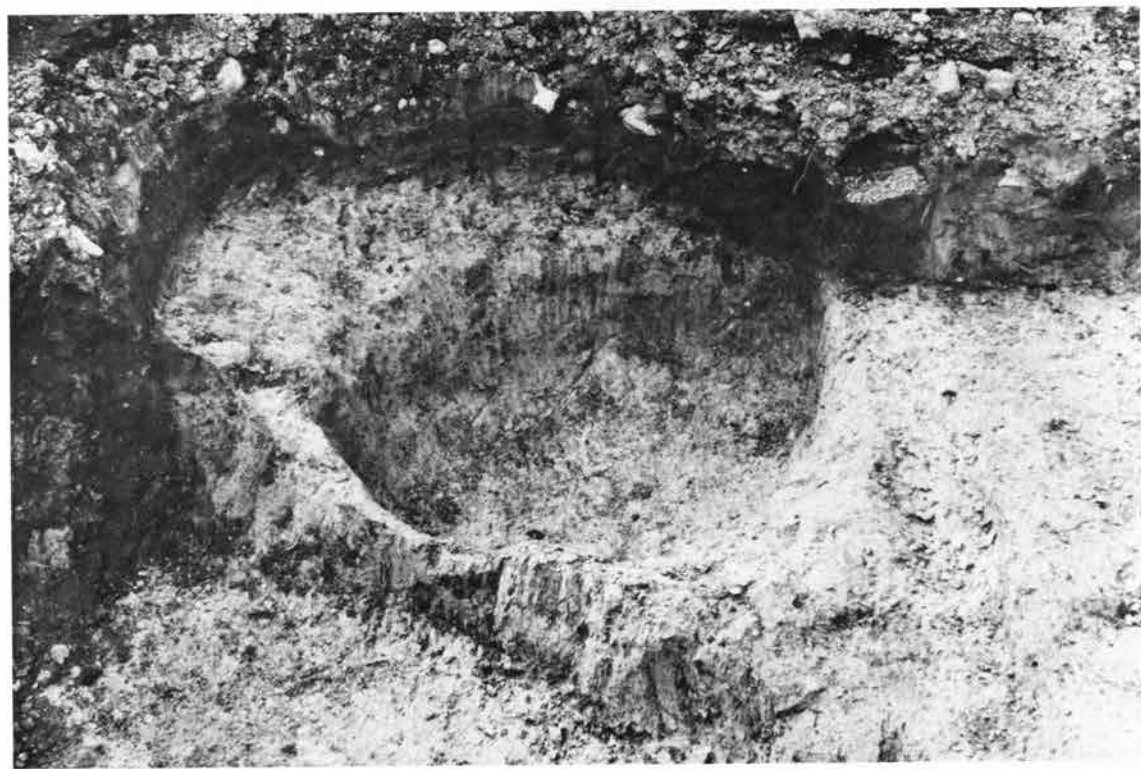
(1) 調査前全景



(2) 1トレンチ全景(東から)



(1) SK01・SD01遺物出土状況

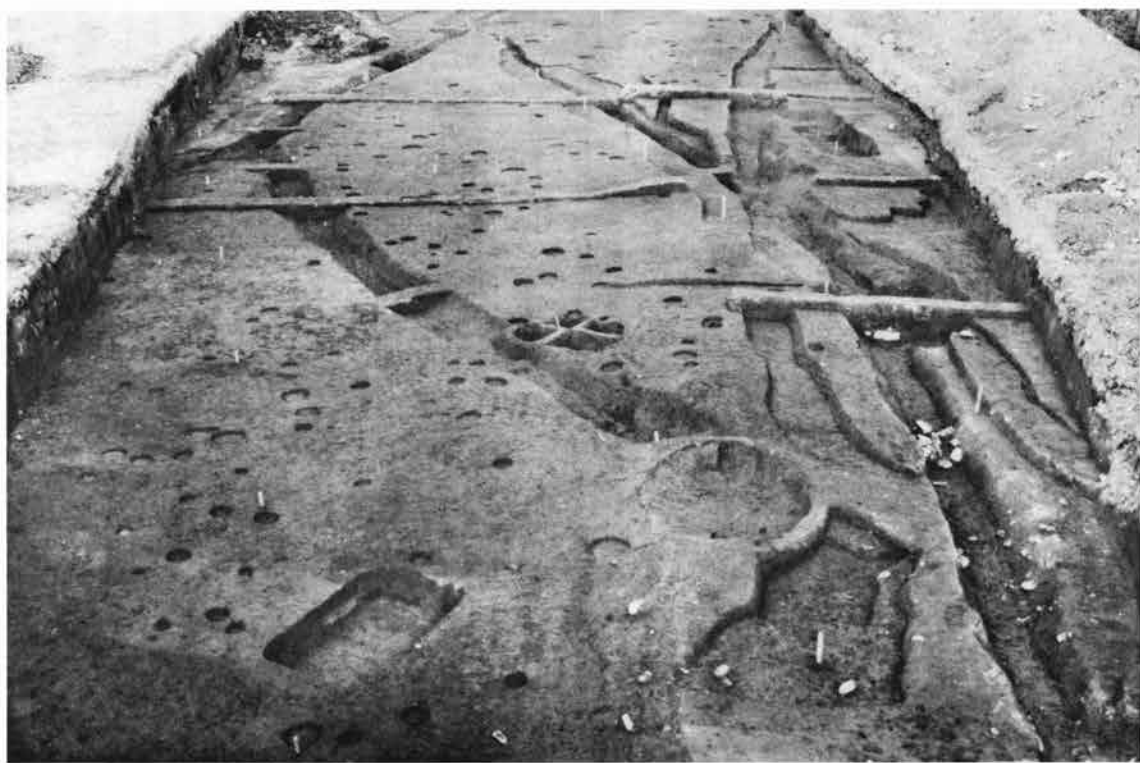


(2) SK01・SD01完掘状況(東から)

図版第6 西町遺跡



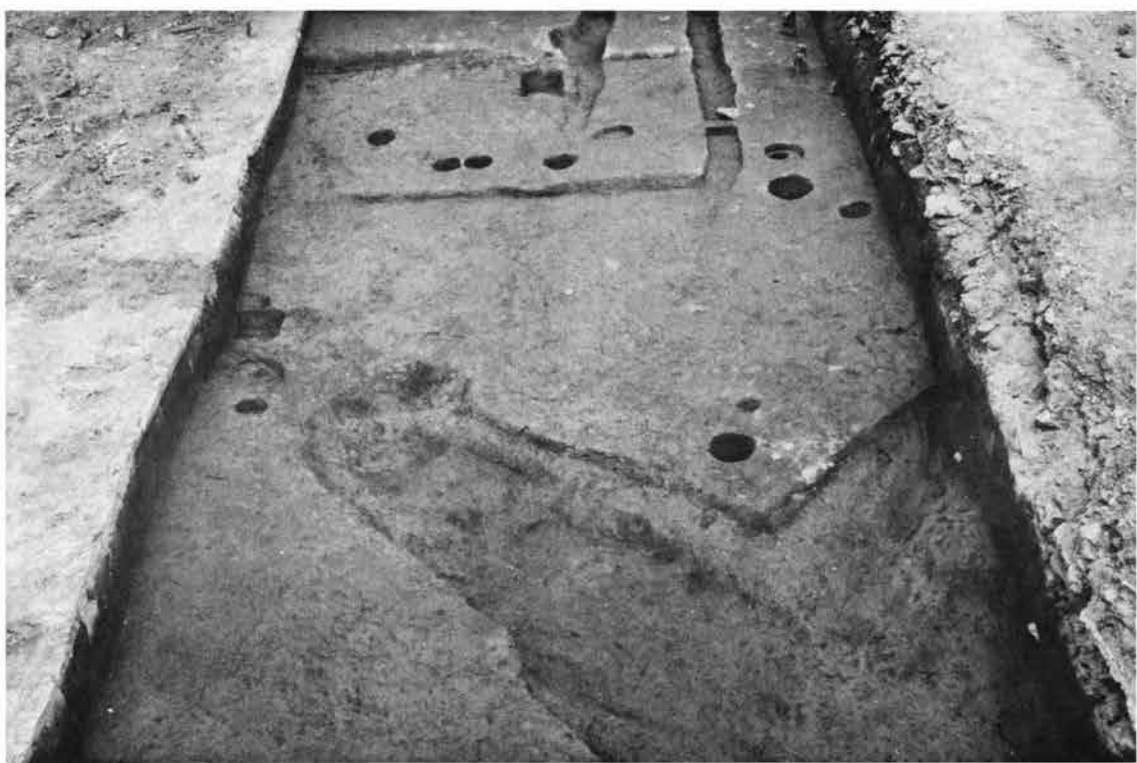
(1) 第1トレンチ(第1面)全景(西から)



(2) 同 (第2面)全景(西から)



(1) 第2・3トレンチ全景 (西から)



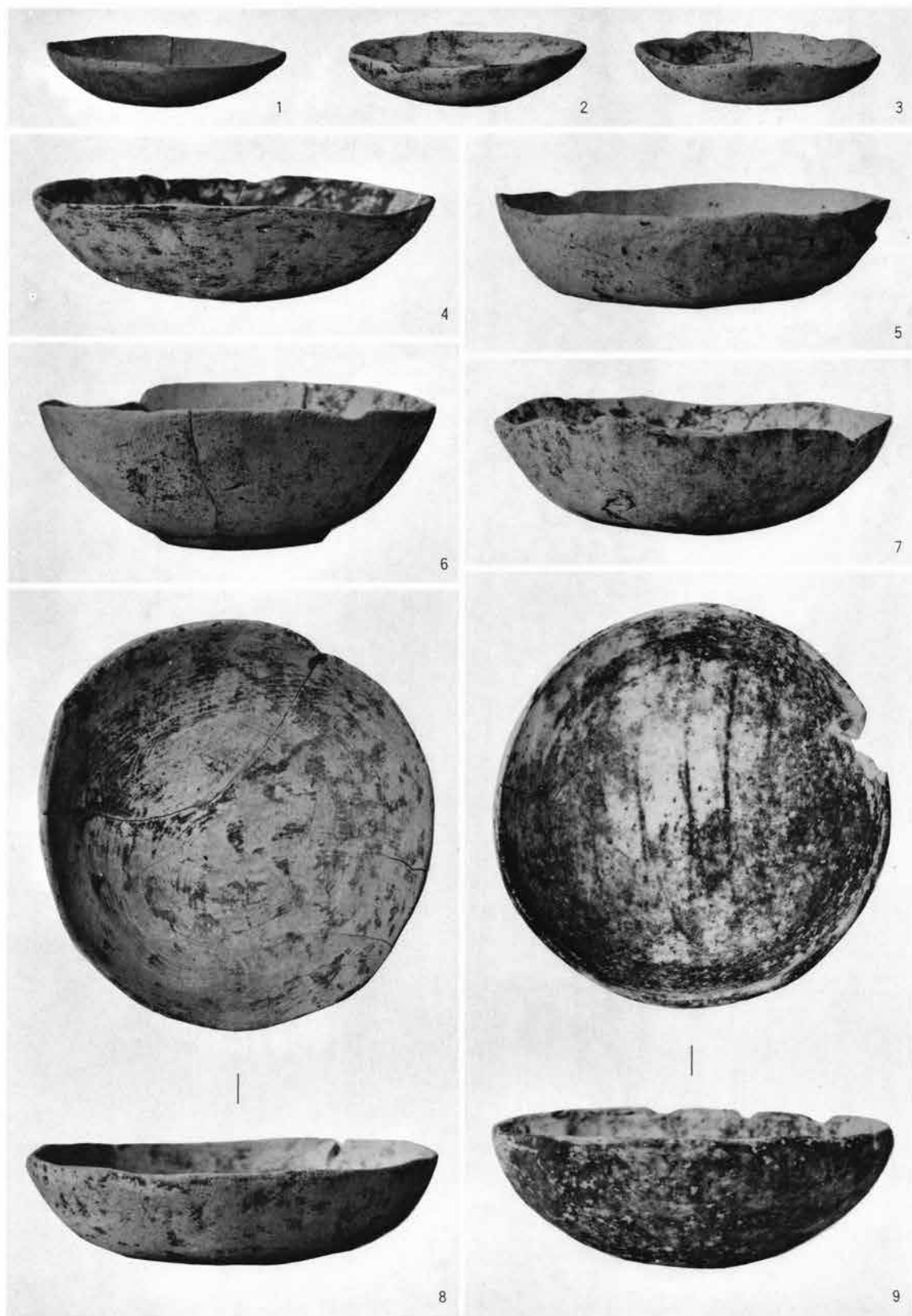
(2) 第5トレンチ全景 (南から)



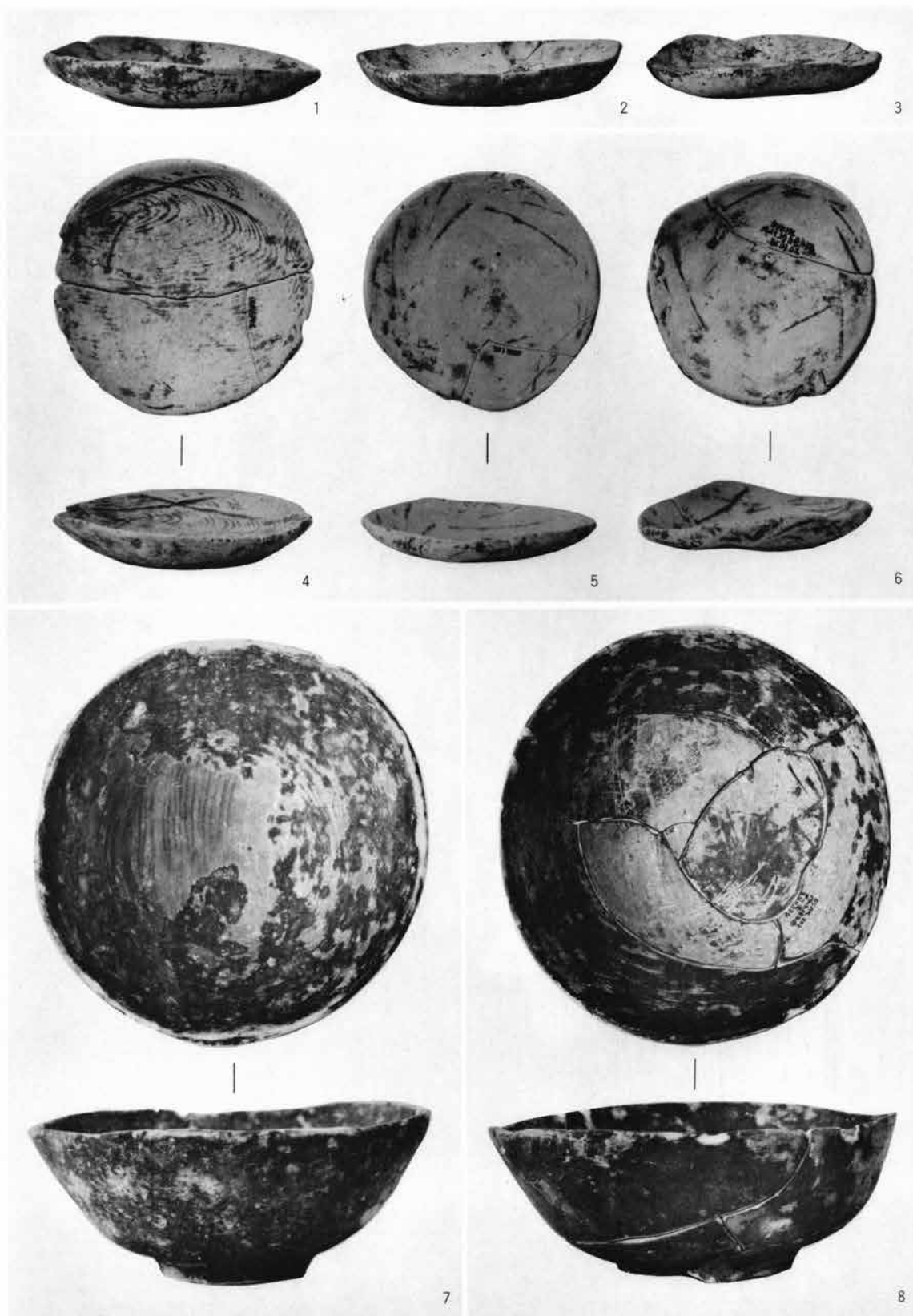
(1) 第6トレンチ遺構検出状況（南から）



(2) 第8トレンチ遺構検出状況（南から）



立会調査(1~8)・第8トレンチ(9)出土遺物, 1~5・7・8:土師器皿, 6:土師器碗, 9:瓦器碗



立会調査出土遺物。1~6：土師器皿，7・8：瓦器碗

図版第11 西町遺跡



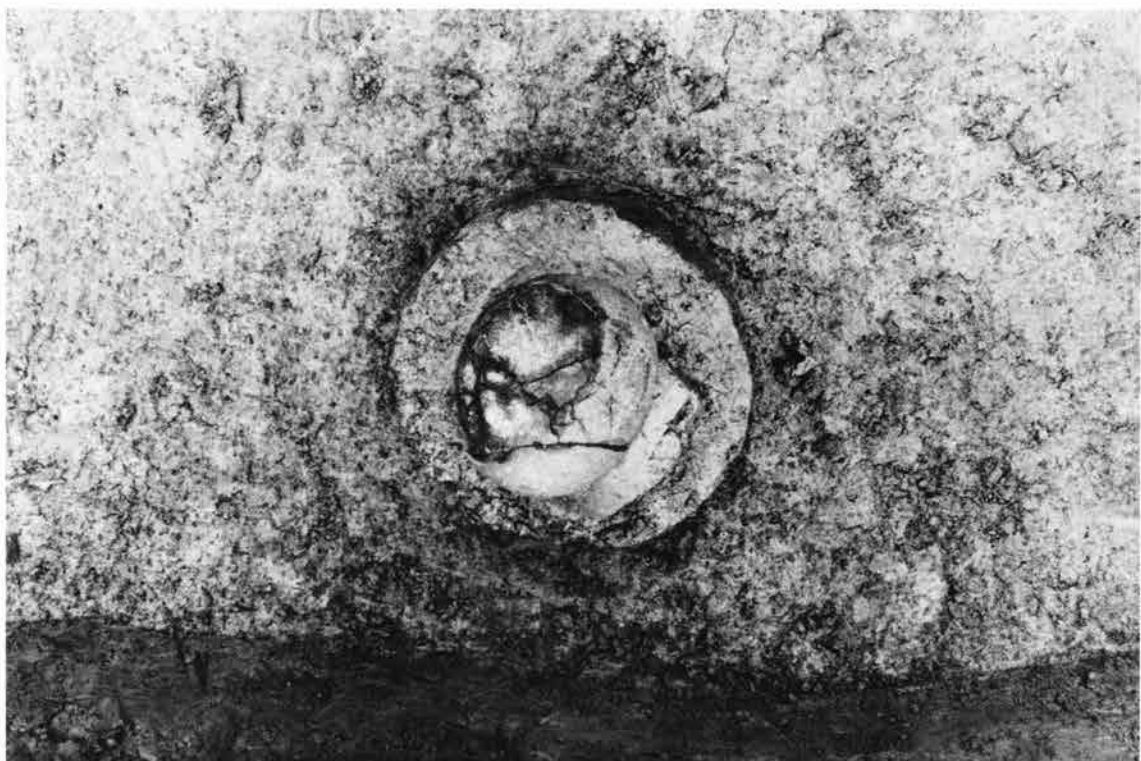
(1) 8トレンチ全景 (西から)



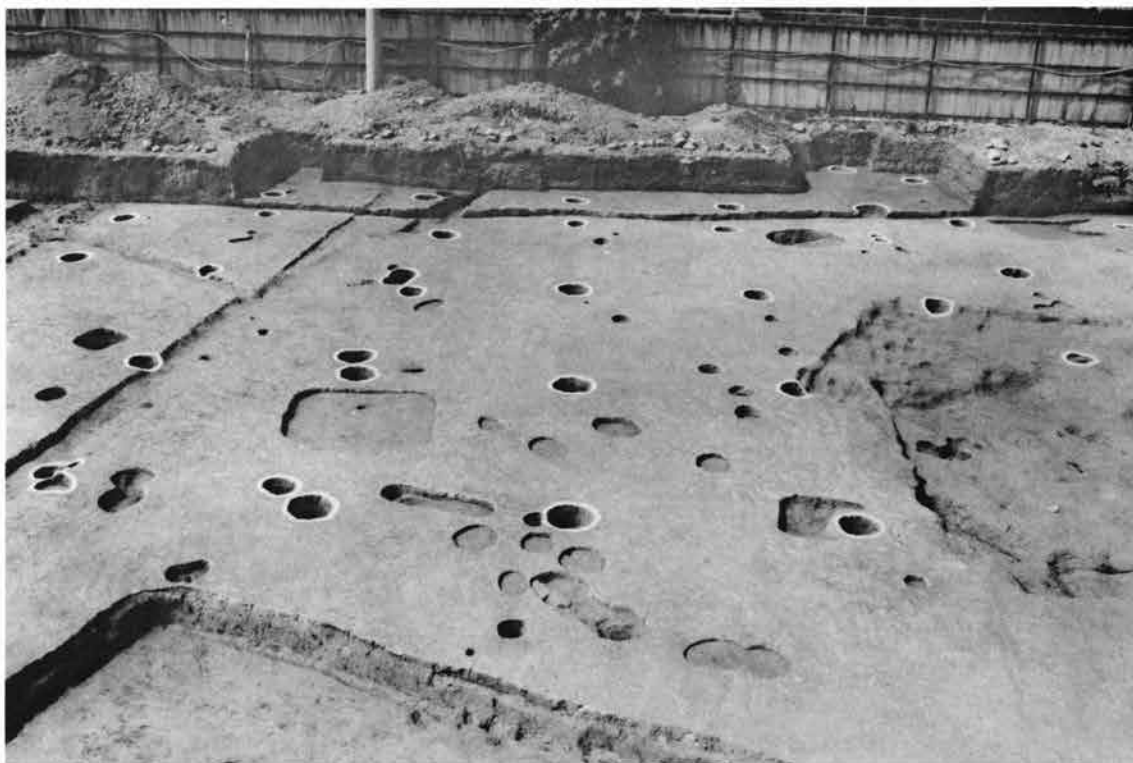
(2) 7トレンチ全景 (西から)



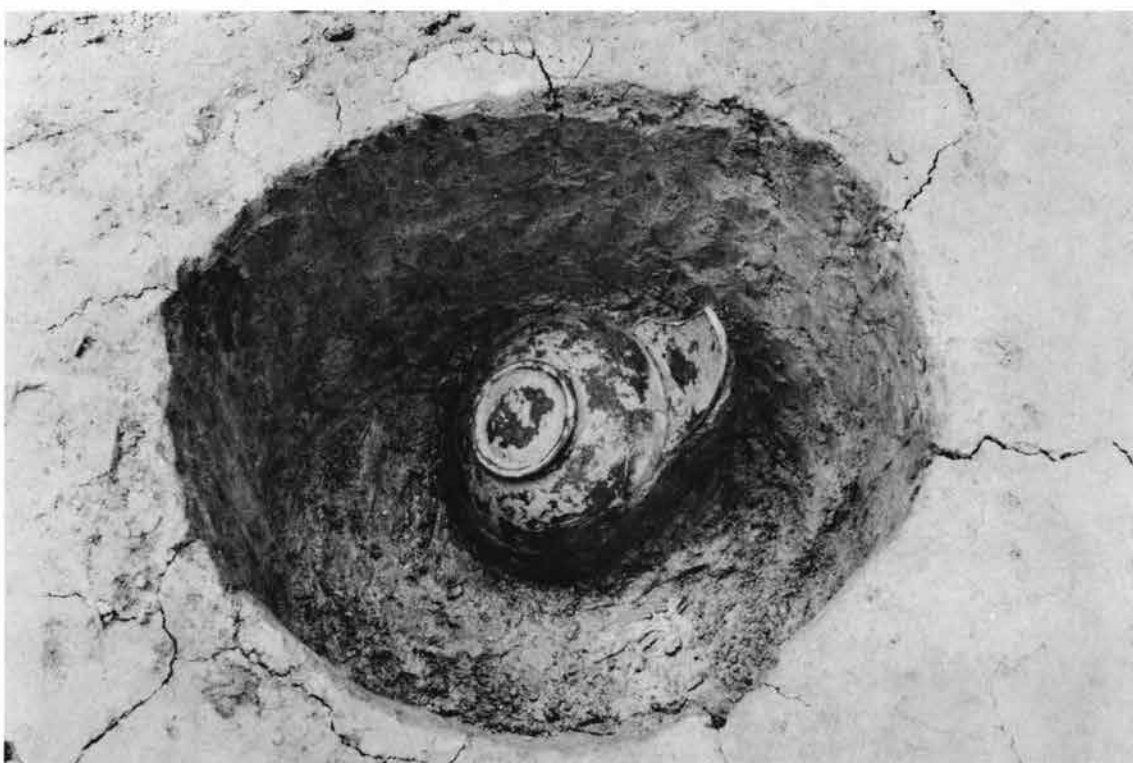
(1) S B01 (南から)



(2) S B01遺物出土状況



(1) S B04・S B08 (南から)



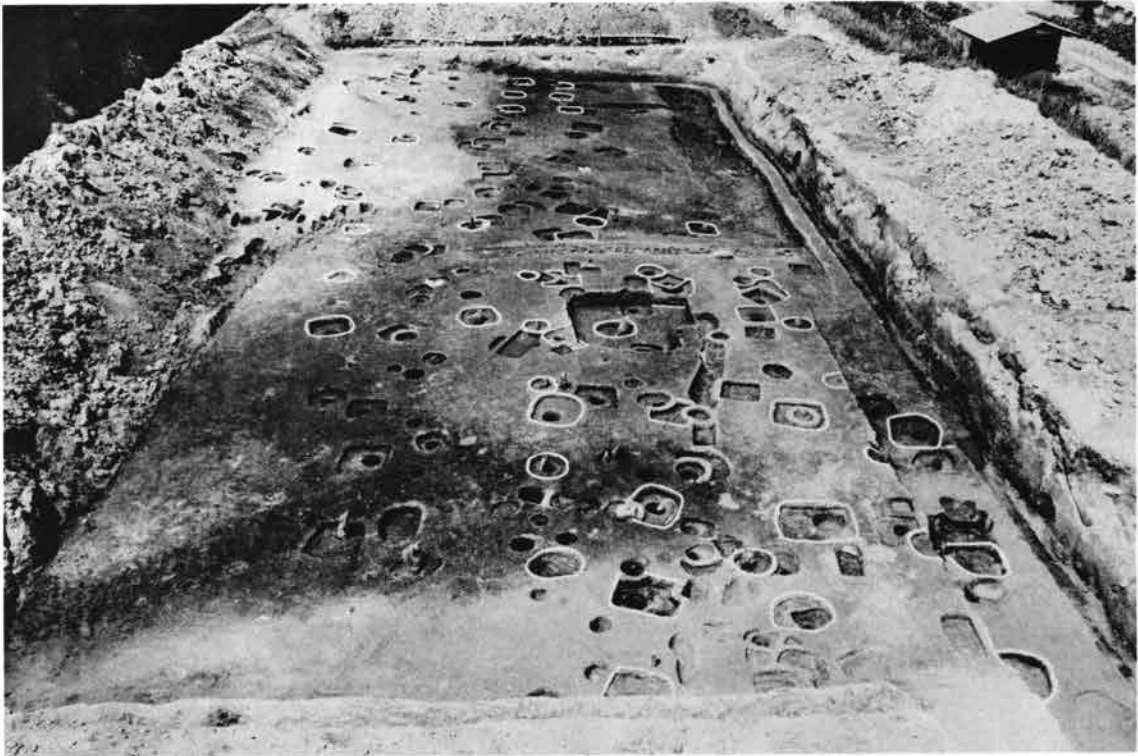
(2) S B04-1遺物出土状況



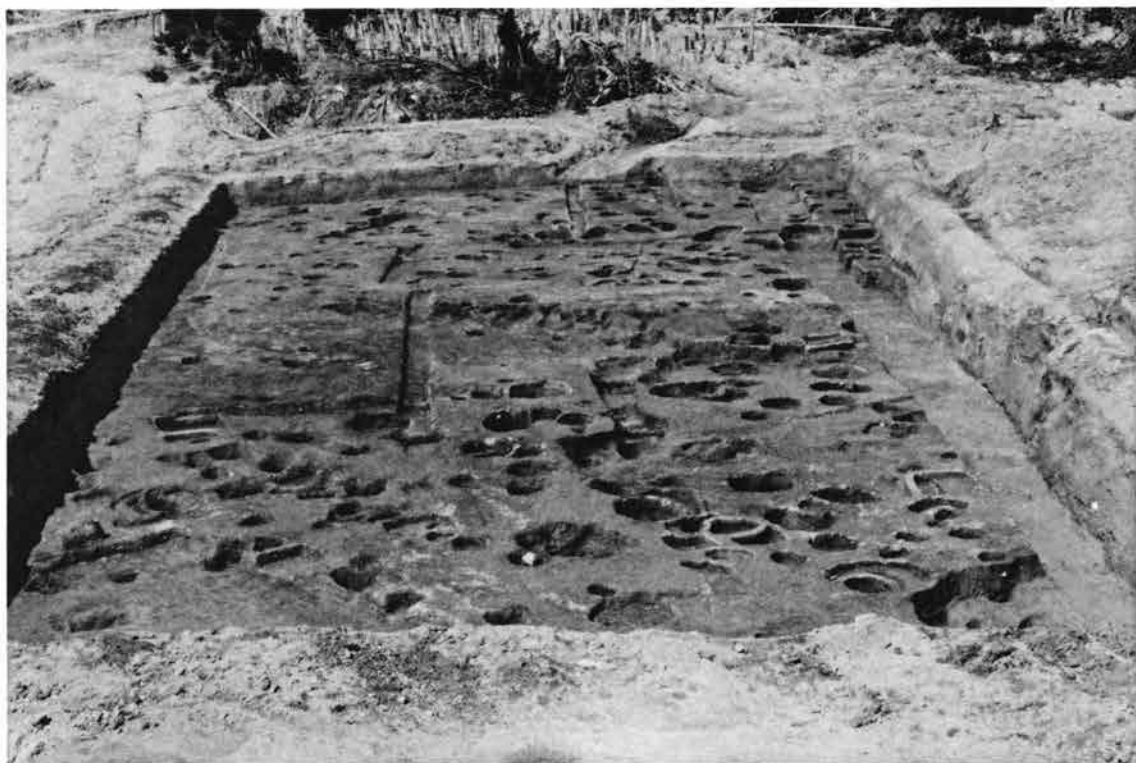
西町遺跡出土遺物



(1) 調査地遠景 (東から)



(2) 第1トレンチ全景 (西南から)



(1) 第2トレンチ全景（東南から）



(2) 第3トレンチ全景（東北から）



(1) 第4トレンチ全景 (西南から)



(2) 第5トレンチ全景 (東南から)



(1) S H05・06・07検出状況（東北から）



(2) S B01検出状況（西北から）



1



10



5



15



12

出土遺物(1) 弥生土器

1. 壺, 5. 甕, 10. 蓋, 12. 高杯, 15. 器台



出土遺物(2) 土師器・黒色土器

24. 蓋, 26・27. 杯, 33・34・38・39. 碗, 40・43. 黒色土器碗 (同墨書)



46



52



47



53



64



68



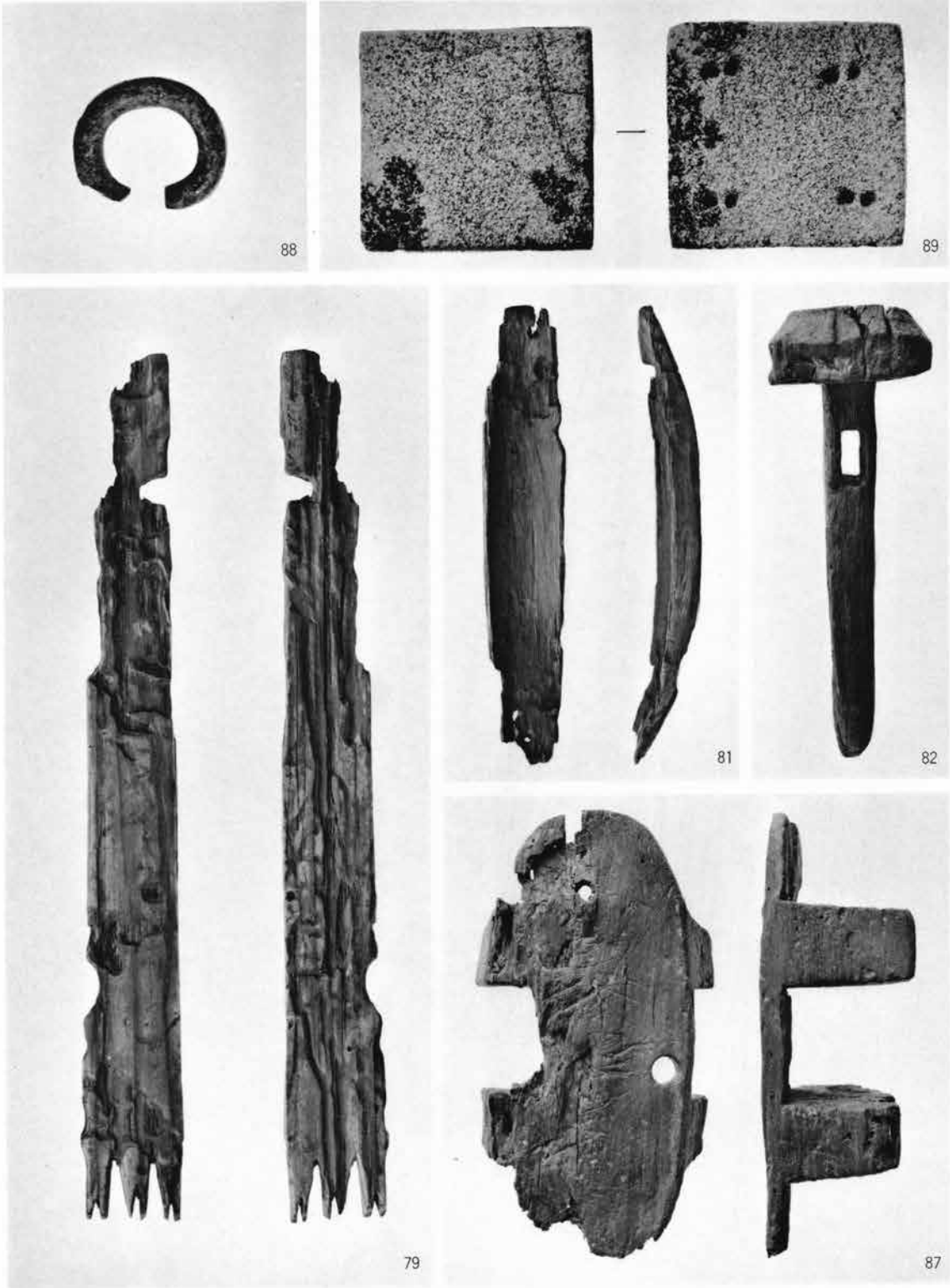
75



77

出土遺物(3) 須惠器・施釉陶器

46. 杯蓋, 47. 杯身, 52・53. 蓋(墨痕), 64. 杯, 68. 碗, 75. 緑釉瓦皿, 77. 杯底部(墨書)



出土遺物(4)

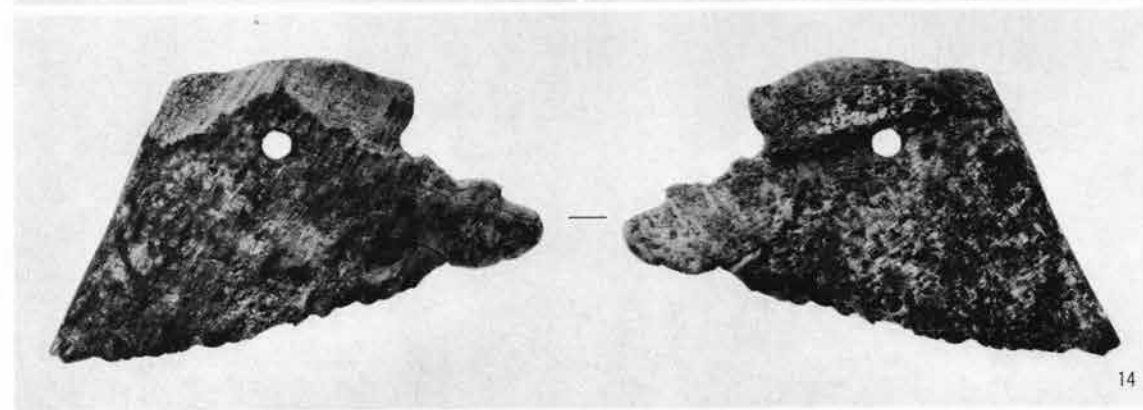
79. 琴形木製品, 81. 舟形木製品, 82. 釘様木製品, 87. 下駄, 88. 金環, 89. 石帯



(1) 検出遺構（北から）



(2) 自然流路NR01土層断面（東から）



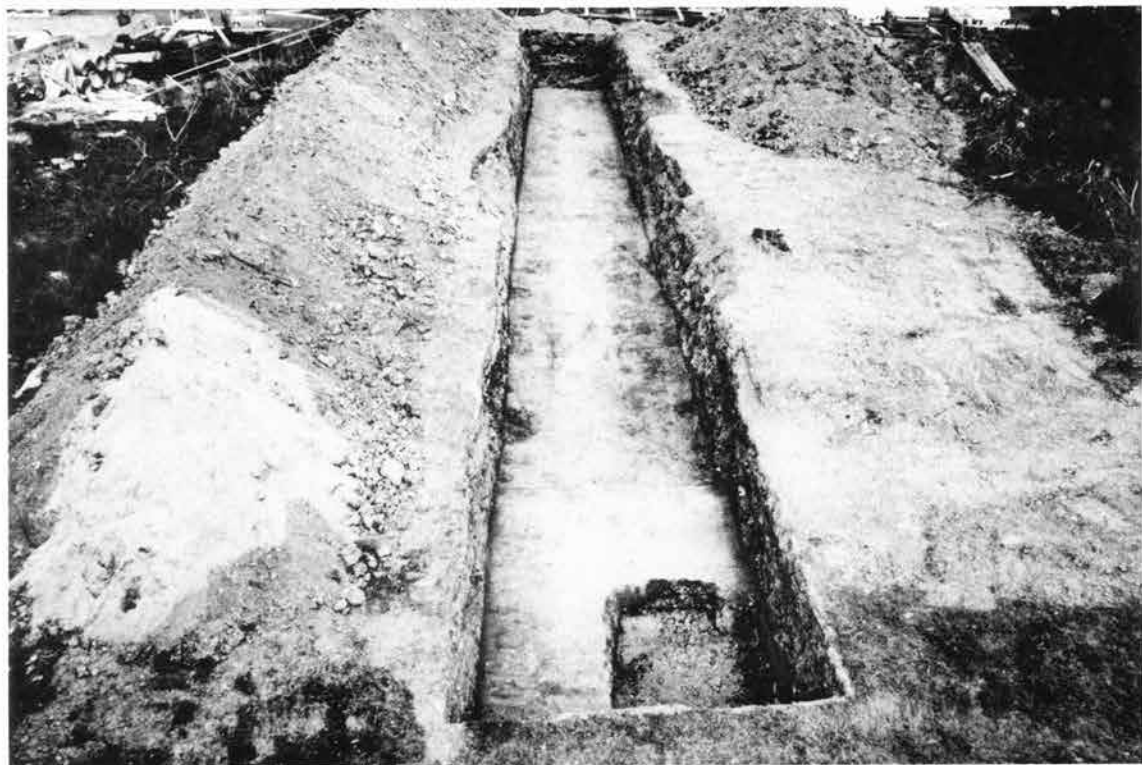
出土遺物（各番号は実測図に一致する）



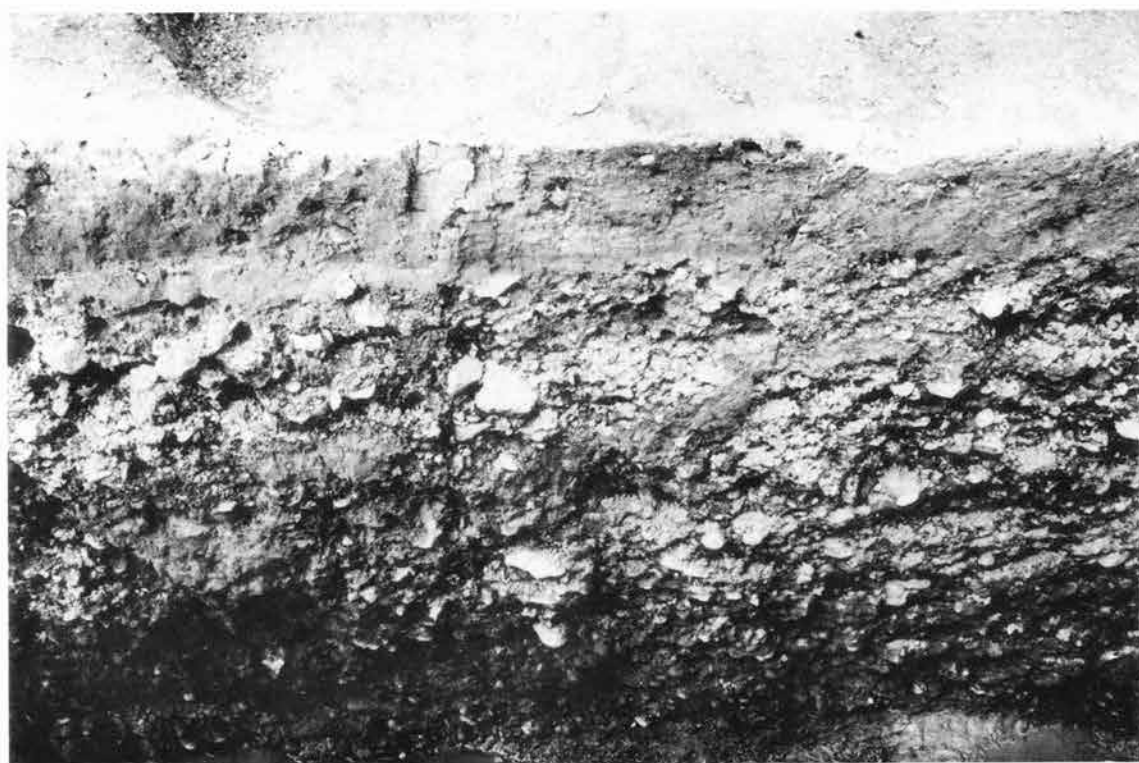
(1) 調査前風景 (南から)



(2) B地区調査トレンチ (南から)



(1) Aトレンチ全景 (西から)



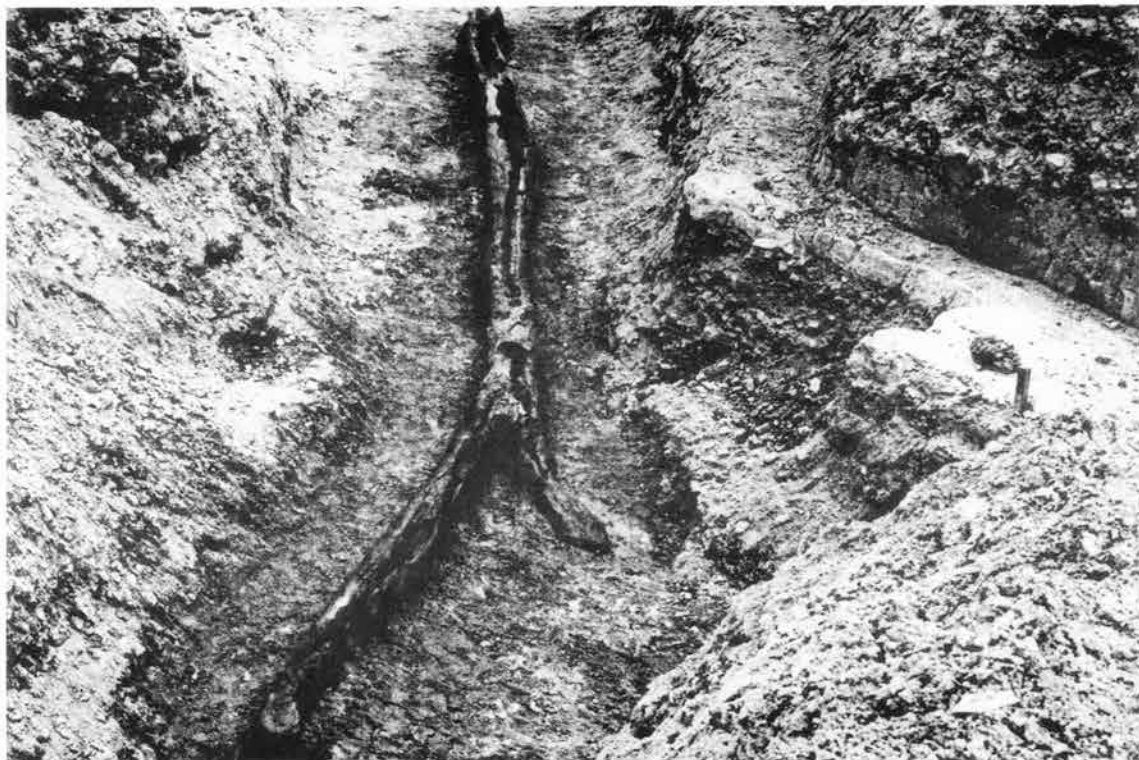
(2) Aトレンチ北壁断面



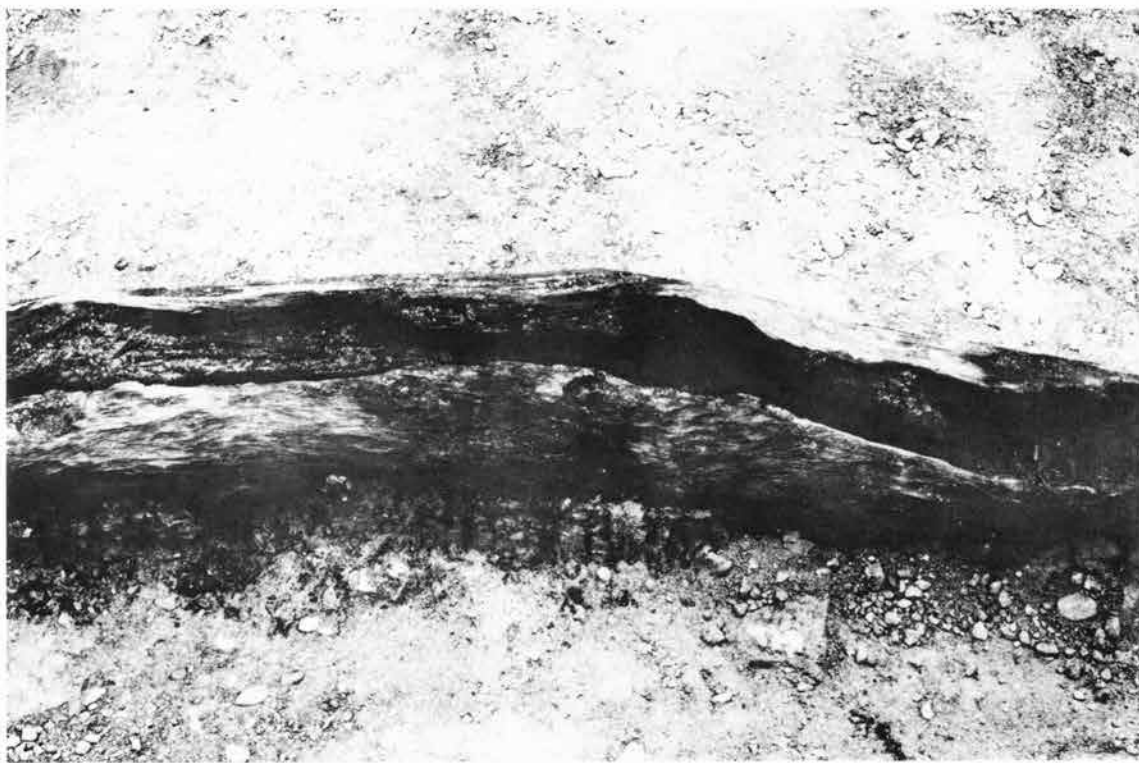
(1) Bトレンチ全景 (南から)



(2) Bトレンチ東壁断面



(1) Aトレンチ自然木出土状況(南から)



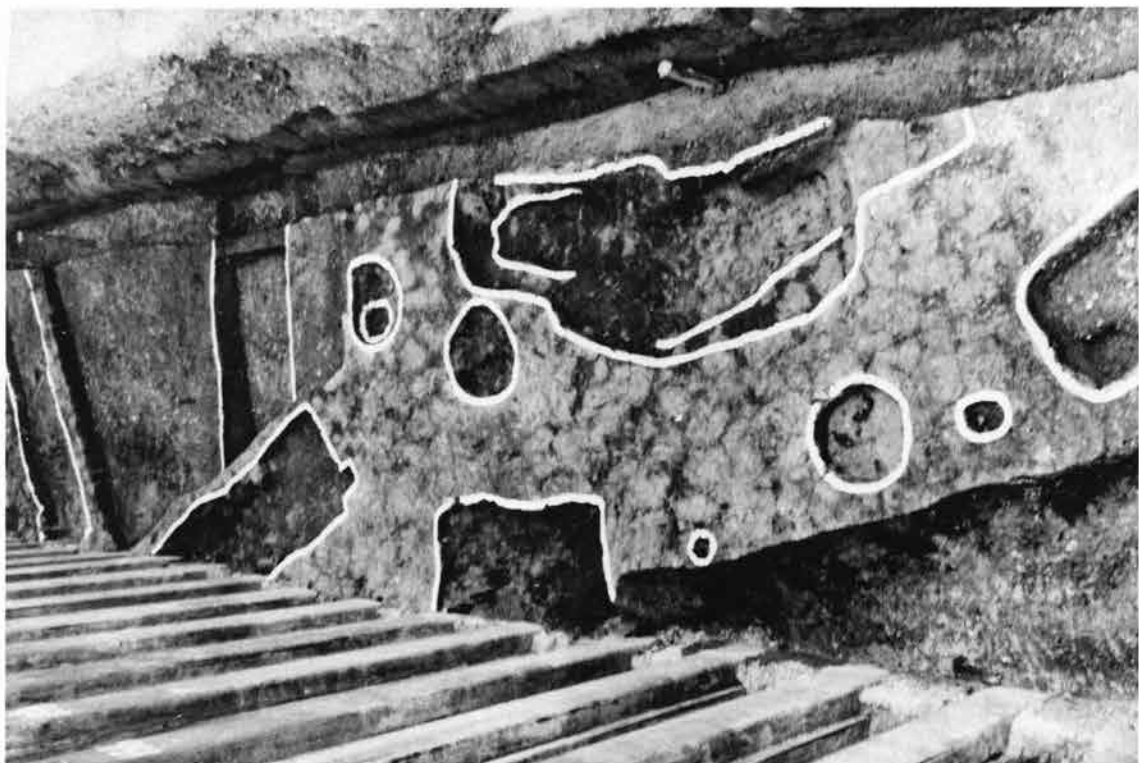
(2) 自然木出土状況(部分)



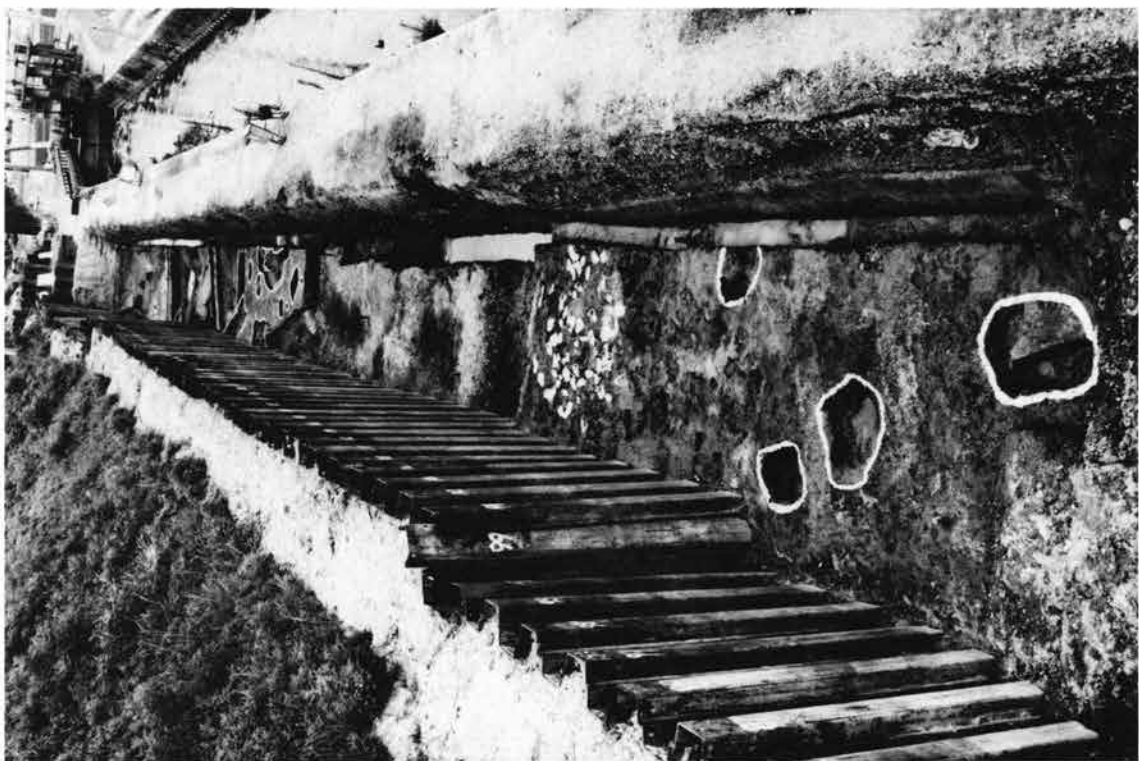
(2) Aトレンチ全景(北から)



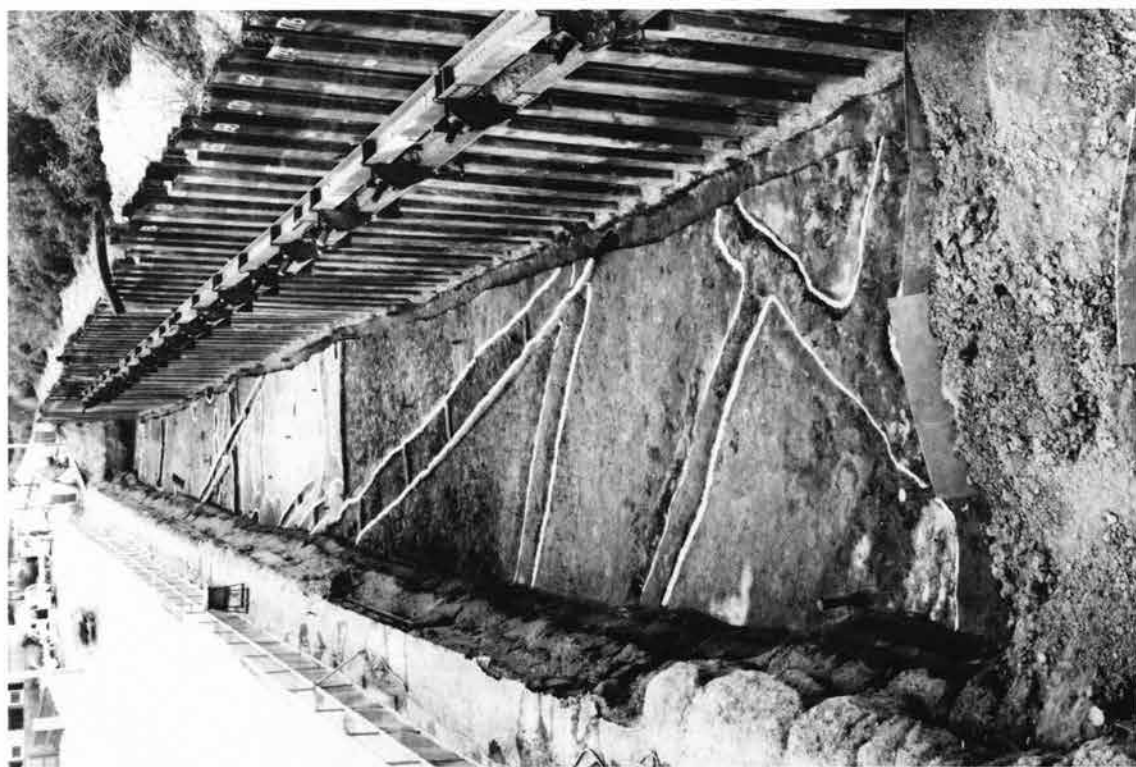
(1) Aトレンチ全景(南から)



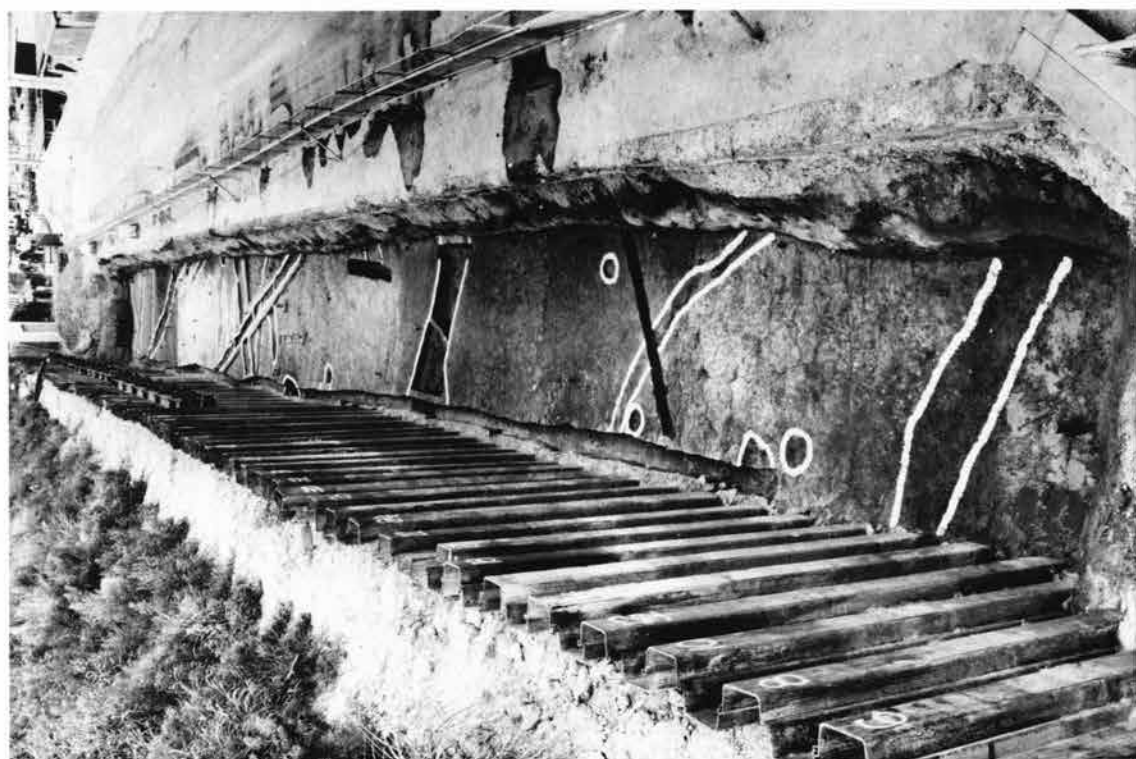
(2) Bトレンチ中央部 (南から)



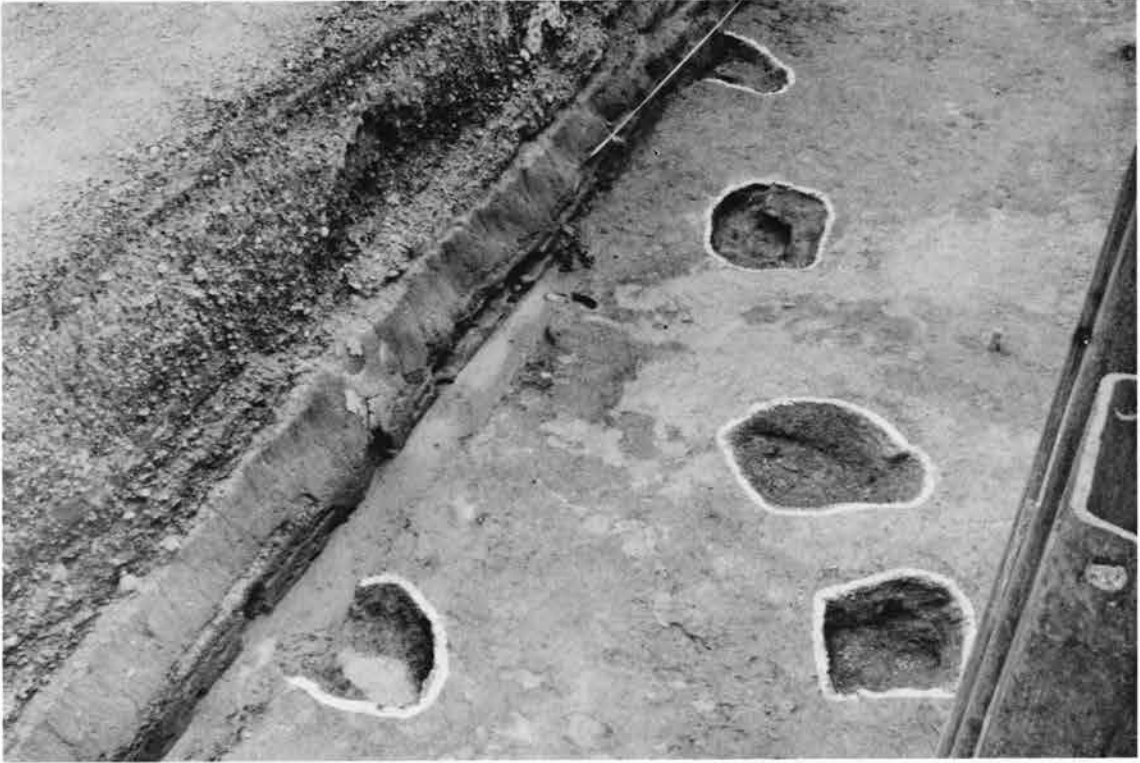
(1) Bトレンチ全景 (南から)



(2) Cトレンチ全景 (北から)



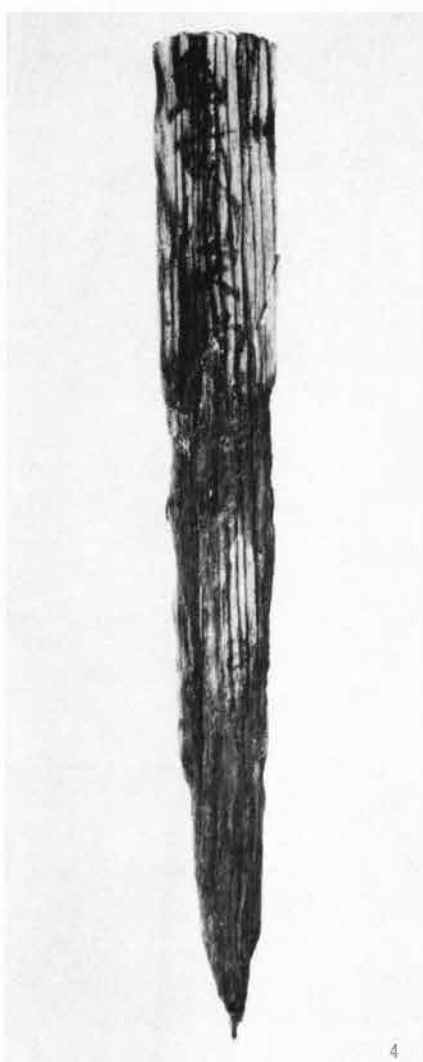
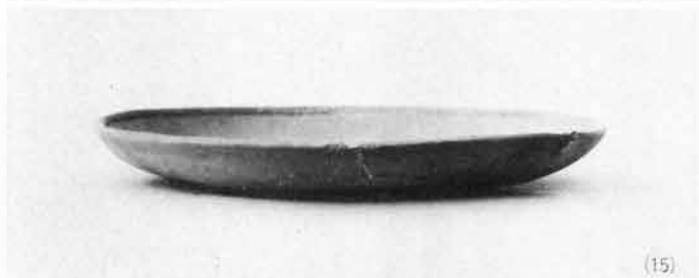
(1) Cトレンチ全景 (南から)



(1) 掘立柱建物S B15125 (北から)



(2) 同上建物柱掘方木筒出土状況



京都府遺跡調査概報 第22冊

昭和62年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40の3

TEL (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

TEL (075)441-3155 (代)